

# 千年の花を

大岡俊彦

(原稿用紙 二七四枚相当)

登場人物

風間 千恵

花好きで、陶器好きで、雑貨好きで、映画好き。

風間 司郎

千恵の夫。京都の学生時代からの恋人。テレビディレクター。

北村 和宏

タレント脳外科医。司郎の大学の同期。

広川 弓美

京都の小劇団の看板女優。

黒木

北村とつながる、不気味な金融業者。

藤岡 梨花  
狩野

劇団「夜明けの前は最も暗い」主宰。弓美の長年の恋人。

藤岡の新人。大学一回生。

北村病院の若手医師。

# 第一章

千恵と司郎

きらきらした光を、千恵は見ていた。五月のいちよう並木は美しい。夏の深い緑もいいが、この時期の若い葉は、緑より緑らしい色だと思う。トラックの中から見る街路樹は、まっすぐで長い五月色のトンネルで、幹の大きさが古くに整備されたことを物語っている。夏になれば埋まってしまうだろう葉と葉の隙間から、太陽が見え隠れする。

風間千恵は、走るトラックの窓をあげ、空気を大きく吸いこんだ。

「さっすが高級住宅地！ 空気の味も高級！」

隣の夫、司郎も窓の外にはしゃいでいる。

「家がデケエよ！ 街路樹デケエよ！」

夫が出世したので、千恵と司郎の夫婦は、「会社から自転車を通える距離」と司郎が譲らなかつた、あの狭くて空気の悪い部屋から引越すことにした。沿線に、Dという都内有数の高級住宅街の駅名を見つけたのは千恵だ。七万八千円という部屋を見つけたるまでには更に三カ月かかった。「Dに住んで、金持ちの空気を味わう」という二人の目論見は、引越したトラックの窓をあけた瞬間に叶った。

「いちいちお庭が凝ってる！」

ガーデニングなどという一過性のブームに左右されず、個性的な屋敷にはことごとく凝った庭があり、あるじの趣向を凝らした花が、色見本帳のように競い合う。オレンジ、鮮やかなピンク、黄色、水色、赤、ラベンダー色、淡い桃色、白。色の名がカタカナなのは、たいいてい外国産の花だ。千恵は、その一軒一軒に何が植わっているか、のちに記憶するほどの花好きである。春秋のサフィニアはペチュニアの一種だと目で確認し、夏のサルスベリに上品な白の花があることを知るのも、この庭たちからであった。

ゆるい上り坂をすぎ、大きな緑の列の終わり頃、古びた洋館の前の粗大ごみを見つけた司郎は、「金持ちはゴミも金持ちかあ」とツツコミを入れる。「金田一の映画かよ」と言いたくなる、別珍の椅子と古い白木のテーブルと、アールデコのすかし模様の電燈の傘。ほんとにあるんだこんなの。と、千恵は、その中の植木鉢と目が合った。

「あとで、助けにくるね」と話しかける。

祝いかなにかの品であろう。胡蝶蘭だった。花がすべて終わって、花茎だけがみじめに取り残された、葉も元気な、まだ生きている株だった。胡蝶蘭は、花が一カ月から二カ月もつ

為、開店祝いの贈答品によく使われる高級花。もともとは、ジャングルの端でひそやかに白やピンクが咲く着生植物。大英帝国が大航海時代にプラントハンティングし、寒い英国ではガラス張りの温室で、温度と湿度を保たねば栽培できなかった希少花。今では温室で大量生産され、その石油代が乗った値段で、自然には咲かない時季の花を、金さえ出せば手に入れることが出来る。金で使い捨てのリアルを見て、千恵は怒りと哀しみを覚えた。花が終わっても、根と葉は生きている。まだ生きている命なのに。

駅からの道は一本道だから、場所はもう覚えた。レスキューしに来なければ。千恵は去りゆくトラックの中から、その鉢に小さく手を振った。

段ボールを積み上げる力仕事は、引越しの人と司郎がやってくれた。坂の上にある、周囲の屋敷から見ても時代に取り残されてそうな、古い大きな二階家の二階の貸間が、新しい二人の部屋だ。築年数も随分経つこの部屋で一番目立つのは、六畳ふた間に連なる東南二面の大きな窓だ。千恵は、全部の窓をあけ風を入れた。畳の匂いが消えてゆく。窓の外には大きな下り坂が見え、その向うに多摩川のきらめきが見える。日当たり第一、は千恵の出した条件。風の通り道のような風水のいい所、は司郎の出した条件。あと二人とも言わなかったけど、京都で住んでたときのような、畳の部屋が不文律。

六畳ふた間にキッチン四畳半、これが終の棲家かどうか分らないけど、彼女と夫の「巢」としてふさわしいと千恵は思った。部屋に入るときにガラガラとあける木枠扉のガラスが、紅葉柄の細工硝子なのも気に入った。

「普通の賃貸じゃなくて、家のだから畳が大きいね、シーちゃん。柔道でできるよココ」  
境の襖を外せば、十二畳の道場が出現するのは容易に想像できた。

「とりゃ」と司郎は柔道組みをしてくる。「うりゃ」と千恵は返す。まだ何も無い十二畳で、摺り足や腰投げの入り方をする。

「なにこれ？」

奥の六畳間とキッチンとの間に、押し入れの間取りの関係か、半畳の板間があった。千恵は、こんな感じに「余ってしまった」ものが好きだ。

「んー、踊り場？」

「よし、これを二人の踊り場と名づけよう。嬉しいことがあったら、ここで二人で踊るのだ」  
柔道組みのまま、司郎は社交ダンスの真似ごとをしてみる。

「そもそも階段の踊り場は、なんでそう言うの？ あそこで踊る人いないでしょ」

「社交ダンスぐらいなら踊れるんじゃないか？」

ステップとか分らないし、裸足でペタペタするし、片袖片襟つかんでるし、ちっとも社交ダンスじゃないけど、千恵は少しうっとりした。二人にしか分らない「秘密の言葉」というのが好きなのだ。そういう発想がすぐ出てくる司郎の機転も愛している。ふざけて変てこな踊りで笑わせる夫を、千恵はいつも少し長く見ていた。

「あ、段ボールあけなきゃ！ 植物さんたちが！」

とりあえず隅に、山に積んだ段ボール。「すぐあけるもの」と下手なマジックの字で書いた箱を千恵があげると、中から大量に鉢ものの植物が出てきた。

広い窓際に、千恵は端から順番に植物を並べてゆく。単なる植木鉢ではなく、千恵の趣味の古陶器であしらえた、ひとつひとつが凝った器だ。レリーフ、複雑な反射ガラスもの、割れたやつを金のゴムバンドで止めたもの。この子たちの為の日当たりが、この古い和室十二畳を気に入った第一だ。あと、一番大事な「鉢」、司郎の日当たりの為。

「テレビはここでいい？」と司郎が尋ねる。まず最初にテレビの位置を決めないと、二人のホームポジションが決まらない。

「しーちゃんはテレビのお仕事なんだから、神の座に」

手前の六畳の真ん中にテレビを置き、コタツ兼テーブルで居間とした。奥の六畳間は寝室、と仮に考える。

テレビの配線を終えた司郎は、窓際を見て驚いた。

「右見て左見たら、もうジャングルじゃねえか。そこはオレの机のスペース」

窓際は司郎とシェアする、と言った癖に、植物の方がはるかに多かった。窓はハンギングもので埋まる。籐製の籠を針金で釣り、その籠から更に籠が釣られるように千恵は工夫していた。タテのスペースを最大に使い、その縦の列を横にも展開。それはすなわち、この広い窓が、籠と緑と籠と緑で埋まるということだ。ジャングルと司郎が揶揄するのも無理はない。部屋は、白壁に柱の木の色と畳の色、太陽の色とそれ以上の緑色だった。

「そのうち、花で埋まりますう。花から元気がもらえる部屋にしたいの」

司郎の机のすぐそばに、さっきの胡蝶蘭が入るスペースを確保した事を、司郎はまだ気づいていない。

「お茶淹れるね。んー。それ」

無造作に積み上げた段ボールの山のうちのひとつを、千恵が指差す。段ボールといっても、みかんや家電の入ってたものをつぎはぎした、主に再利用品だ。走り書きのマジックも含めて、何もかもが手をつくったようだ。司郎は、なんだか貧乏くさい千恵のそういうところが

ほんとは嫌いだ。だがそんなところを愛してもいる。

千恵の指差した箱を司郎があげると、古セーターに包まれた陶器、本、カエルの雑貨、あんまグッズ、オリーブオイルの瓶が無計画にあふれ出る。その混沌が千恵という人だ、と司郎は無理矢理納得することにする。

「整理しろよ」

「どこにいるかは、声が聞こえるから大丈夫」

混沌の底から、お茶セットが一式出てくる。

「なんでココって分んの？」

「だから言ってるじゃん。声を聞くの。『見つけてください』って。しーちゃんを大学で見つけたときも聞こえたよ？」

「超能力？」

「運命の声を、聞く力」

ときどき千恵には、そういう直感的なことが働く事がある。光ったり、呼んでる気がしたり、アイスの当たりを引いたり。超能力というほどではない、運命だと思いうことにしている。

偶然が重なる時は、神様がそっちへ行け、と言っているのだと千恵は解釈する。司郎は混沌の中からカップを探す。スペイン柄の入ったボウル、渋色のマグカップ、花の絵が淡い皿、玉虫色のそばちよこ。いつものマグカップはその次に出てきた。

「なんでこんな無駄に、割れたら終わりのばっか」

と、司郎の手が滑った。ペアのマグカップのひとつが落ちた。ばん。あんなに手になじんでいたものが、割れるときは一瞬で、しかも取り返しがつかない。

「あー。ごめん。あー……」

「裸足だから、動いちやダメ」

千恵は、すぐにガムテを引っ張り出し、小さな破片をすばやくぺたぺたとくつつける。

「京都の、西部講堂のバザーで買ったんだよ。覚えてる？ 私の部屋に来るときは、必ずこれでお茶を出してたの」

「ごめん。……くつつくかなコレ」

司郎は破片を、立体パズルのように組み合わせる。液体を入れるには、おそらく二度と使えないだろう。

「……壊れるから、だいじにするんだよ」

千恵は、笑った。今でも、司郎はその笑顔を覚えている。

駅前のスーパーは、高級品ばかりで目がくらんだ。晩ごはんの材料をとりあえず買って、千恵はあの捨てられた、花の終わった胡蝶蘭に会いに行った。病気はない。葉の張りツヤ、根の色も新しい。水蘚も古くない。「うちに来るか？」と声を聞いてみる。嫌がっている感じはしない。よし、と千恵は幅広でまっすぐな、楕円の葉をなげた。

机の上で、司郎は早速仕事をはじめていた。司郎の仕事は映像のディレクター。映画監督になりたくて、今はCMの監督だ。バブルの時代には横文字のCMディレクターなんて憧れかみだけど、実際の司郎の話の聞くとキツイ。いつも夜遅くて寝不足で仕事は理不尽で、司郎の愚痴を聞いたたびに千恵は可哀相になる。ランプに照らされた偶然の角度か、司郎の横顔が千恵ごのみの深い陰影になっていた。いいライティングでセリフを黙々と書いている司郎に、千恵は少々惚れなおす。司郎が家で仕事をする人でよかった。会社でこれ見たら、誰か惚れちゃうよ。

千恵の気配に気づき、司郎は修理したマグカップを見せた。

「くつついたけど、隙間から漏れる多分」

この人が集中しているときには、他の何も見えていない。火事が起こったら、真っ先に張り倒してでも気づかせなくちゃ。千恵が帰って来てから、司郎が「あっち」の世界から戻って来るのに、数分はかかった。ポンドでくつつけたマグカップは、完全に隙間は塞がらず、液体は確かに漏れるだろう。だが怪我の功名か、水と空気の呼吸には、「丁度いい」と千恵は言う。

「ん。なんぞそれは」

目ざとい司郎は、買い物袋の中に、蘭を見つけた。千恵は葉っぱをぺこりとして、挨拶させてみる。

「ウチに来てもいいですか？」

「かわいく言ってもダメだよ。大家さんに言われたでしょ。ペット不可って」

「しょくぶつは、ペットじゃないッス」

「ジャングルが増える」

「花が終わっただけで、捨ててるの！ どっかのあほな金持ちが、役に立たないからって捨ててるの！ 蘭は千年生きるのよ？ 大事に育てれば、来年も再来年も咲き続ける生きものなのに！ 世の中に、いらぬ命なんてないでしょ！？」

理屈は分かるし、気持ちも分かる。だが既に窓は、緑と籠と緑と籠で埋まっている。ひとつ増えても同じだけど、と司郎は嫌味を言ったつもりだ。

「ありがとうしーちゃん」

千恵は、つぎはぎのマグカップに、手早く蘭を植えかえた。



「一緒にここで暮らそうね」と、既に確保済みの、一番日当たりのいいスペースへ置いた。窓際の司郎の隣。引越し第一日目の、記念にしたつもりだ。

その胡蝶蘭は、一年後清冽なピンクの花を咲かせた。二年後も三年後も、たたずまいの良いた花を咲かせた。ピンクの花が咲く度に、千恵は「あのときの蘭」と司郎に説明したが、「どの蘭がどれか、多すぎて分るか！」とよく見てはくれなかった。それもそうだ。数えたことないけど、あれから拾った胡蝶蘭は増え、色々な種類の蘭にも手を出し、窓にはいまや五十から百の間ぐらの蘭が吊られ、太陽光を占有している。『一匹ゴキブリを見たら二三十匹はいると思え』と言うが、一コ蘭を拾ってきたら、いくつに増えるんだ？」と司郎はツツこむ。

そんな夫婦の日々は、幸せだった。子供は出来なかったけど、京都の恋人時代が、ずっと続いているようだった。

あの日が来るまでは。

## 2

司郎の異変になんか、千恵はひとつも気づいていなかった。司郎は天然ボケで気分屋だから、いつも思いつきで行動するし、子供みたいなミスをする。「妄想を仕事にしているから、少年のような心なのだ」と胸を張る司郎に時々ムカツク。司郎は四歳年下、ということが甘えさせてるのかなあ、と時々、子供みたいな弟みたいな夫に、腹が立つこともある。その時も、いつものテキストだと思っただけだった。

その日はよく晴れていた。奥の寝室、手前の居間と、部屋中の蘭の水やりをしていたら、司郎から電話がかかってきてびっくりした。

「今日会社行ったら、仕事ない日だった。ランチに行こう。ついでに、映画も行こう。ランチアンド映画！ ランチアンド映画！」と言われた。あいつはいっつも思いつきで休日の予定を決める。

朝起きたとき、司郎が仕事に行つて既にいないのが、千恵は無性に嫌いだ。起こしてよ、と文句を言うけど、寝てるのを起こされるのは嫌だろ、と司郎は間違つた優しさを見せる。一人、蘭に水やりしながら思うのだ。ほんとうの優しさは、わたしをひとりにしらないこと、なのに。

司郎の天然ボケのおかげで、エアポケットのような、学生の一日のような日が訪れた。千恵は待ち合わせした、隣駅のJ丘へと急いだ。「今邸宅だから、支度して三十分後」と司郎には言った。邸宅、はいつもの千恵の冗談である。

隣のJ丘は、「住みたい街No. 1」にも選ばれるいい街だ。適度に小さくて、適度にごちゃごちゃしている。下北沢ほど濁っていないのがいい。千恵の好きな雑貨天国、花屋天国、おいしいごはん屋天国である。かつて映画館もあったが、老朽化で閉館したのが惜しまれる。昭和の匂いがする、銀紙で包まれた四角いミルクバーが好きだった。本屋も古本屋も百円ショップも充実していて、最近は司郎ともども店の少ないDよりJ丘で過ごす時間の方が長いくらいである。

J丘マダムと呼ばれる、ベビーカーを押すオシャレ主婦を追い越し、中の赤ん坊がじっと見ていたので手を振つてあやし、無料で配られているティッシュとフリーマガジンを受け取つた。千恵は学生時代、ティッシュ配りのバイトをしたことがあつて、受け取つてくれない切なさを味あわせたくなくて、タダで配られるものは全部もらう癖がある。

J丘の女神像のいる、いつものロータリー。司郎を見つけた。千恵は、好きな人が自分を探している姿が好きだ。もう少し隠れて意地悪しようと思う心と、早く会いたいと思う心がケンカする。

さつき受け取つたフリーマガジンの表紙を何気なく見て、千恵は驚いた。これはしーちゃんに見せなければ。司郎が座っている柱に、背中側から無理矢理尻を押しこんで、千恵は二人座りにした。

「なにすんねんデブ」とびっくりした司郎は笑つた。

「北村さん」

そのフリーマガジンの「表紙の人」は、今テレビで話題の脳外科医、北村和宏医師だ。全国の人にとっては。司郎にとっては、大学の同期だった。

「おう北村。出世したなあ」

「なんか、ブレイクって感じだよね」

「しかし相変わらずニセモノ臭い笑顔だねえ。メガネの奥、笑つてないし」

「最近しょっちゅうテレビ出てるよね」

「出すぎだよ。本業ちゃんとやってんのかコイツ？」

「脳にイイ！街特集」という記事を見て、たしかにと思う。北村さんは今や「脳外科医という肩書き」のタレントだ。たしか、ご実家の医院を継いだ、ボンボンの筈。元々継ぐつもりはなかったけど、ご長男が亡くなられて卒業後医学部に入り直した、と司郎から聞いた。京都の学生時代は、何度か司郎がゼミに連れて来て、一緒に飲みに行ったりカラオケに行ったりした。千恵は、時々こういう当たりを引く。ある日テレビを何気なくつけたら北村が出ていて、机の司郎を大声で呼んだことがある。以来北村は、タレントとしてメジャーになってきた。ブレイク寸前の人を見つけるのも得意。司郎も、その一人だと思っている。

「私の引く力はねー。きっと今日の映画も引くよお」

自分の「引く」自慢をしようとした矢先。

司郎のケータイが鳴る。

嫌な予感。

「え？ 今日打ち合わせ？ ウソ？ 十日でしょ？ 今日十三日だよ？」

はあ、とため息ひとつ、千恵は吐き出した。

「と、お、か、で、す」

「マジで！ ごめん、三日間違えた。すぐ行くわ」

ごめん、は電話の相手に言ったのだろう。ケータイを切った司郎に、千恵はひと言だけ言う。

「ぶう」

「……すみません。申し訳ありません。なんか、スケジュール三日間違えてました。今から会社戻ります」

「なんで間違うのよう。スケジュールとかカレンダーとか見てよう」

「おつかしいな。……なんで今日十三日と思ってたのかな」

「今日は十日です」

「……とにかく、ごはんは一人で食べて」

「ぶうー。ぶーぶー」 千恵はとりあえずかわいく拗ねてみた。

「ぶっぶくぶー。さみしいよう。ベビー連れの幸せマダム達の中で、一人でごはん食べろっ  
て言うの？」

いつもなら笑いでごまかせるが、仕事のこととなると司郎はテコでも動かない。司郎は時計を見た。

「藤原俊成の女むすめとか、菅原道綱の母みたいに、私が歴史に残る名前は、風間司郎の妻、で

すか。私は、ちーちゃんなんです。司郎に振り回されるのが仕事じゃないんです」

「……」

「映画はいついくの？」

「ごめん、待って」

「待てないよ！ 朝起きて誰もいないのも、ほんとにはつらいの！ 夜いつまで待っても帰って来ないのもつらいよ！ 子供が生まれないのもつらいよ！」

「……それ、今、言わなくても」

「じゃいつ言うのよ！ えっちしてって、いつ言えばいいのよ！ いつ言うのがグッドタイミングなのよ！ ねえ、花はなんの為に咲くの？」

「……実を結ぶ、為です」

「……」

千恵は、これ以上の言葉を飲みこんだ。飲みこんだって、どこかへ行く訳でもないけれど。

「おしごと、がんばってください」

賢い妻を演じる。いつも、これしかない。

「……ほんと、ごめん」

司郎は改札へと消えていった。J丘のマダム達が、双子ベビーカーを押して笑っていた。

その時は、三日間違っただけだった。

いつものトンチンカン、勘違いだとあとで笑って許して、元の二人に戻るつもりだったのに。ごめんね、バカ、と言い合えば、それで済むと思っていたのに。

「それ、三日前にやったじゃん」

司郎がまた三日間違えた。ゴミ出しも、レンタルビデオの返却日も、「三日前にやった」と司郎は言い張るが、現実には何もやっていない。

「やってないことの言い訳にしては、つーまーらーないー」

「返したDVDは、小人さんが家にわざわざ返しに来た説。これはツタヤに雇われた延滞料金発生ビジネスで……」

「ほんとはどういうこと？」

「わかんない。……全てがデジャヴの気がするんだ」

「デジャヴ？」

「三日前に、今日の出来事が全部あった気がするんだよ。俺、全部三日前にやったよ。やっ

「……勘違いじゃなくて？」

「……こないだ三日間違えたのおんなじだよ」

今日は早く帰る、と言って司郎は会社に行ったのに、深夜三時を回っても帰って来ない。早く帰るなら丁丘で夕食を食べ、水曜日だし、駅前で演っている、クラゲの名のストリートバンドを二人で聞こうと思っていたのに。心配して電話するも留守電のままだ。

「毎回同じおばちゃんが出るのよ。このおばちゃんが司郎に会いたい私を邪魔するの」と、千恵は司郎に愚痴を言いたい。

いつものことだが、一人で待つには広い部屋で、千恵は司郎を待つしかなかった。司郎の仕事で深夜の帰宅は珍しいことではないが、実家が自営業で、父が二十四時間いる家に育った千恵には「帰って来るまでいない」という考え方が分らない。

どこかで事故にあってたらどうしよう。東横線中目黒の脱線事故はヒヤリとした。そうではなくても、「考え」がはじまったら、周りが見えなくなるから、うっかり「あつ」って言うて車に轢かれたり踏切で止まらなかつたりしたら。「あつ死に」と千恵はそれを呼んで心配する。

心配のたびに、千恵は雑貨屋でカエルグッズを買った。カエルのデザインは美しい。司郎もカエルのデザインが分る人で良かった。何故にカエル？と聞かれて、「しーちゃんが無事にカエルように」と言ったらダジャレじゃねえかと怒られた。笑いの中でダジャレは低辺である、と司郎は主張した。関東のダジャレ文化を笑いとは司郎は認めていない。

雑貨屋からやって来たカエルは次々に増え、最初はカエル大明神（夫を無事帰してくれる唯一神）だったのが、カエル四天王になり、カエル十二神になり、数が分らなくなつてからはカエル八百万の神（個々に魂はあり、また大いなるひとつでもある）となった。目が媚びてる首をかしげたカエル、人生など関係ないと達観した二次元神（シール）、前屈をする柔軟の神様のカエル、葉っぱの下の、陶器で出来たカップルのカエル、ジグソーパズルの中の、赤い風船を彼女のために持つ影絵のカエル、しもぶくれであごの下が超デブな、ブスカワイイカエル。心配しすぎだろ、と司郎は言うけど、何かあつたらと考えれば考えるほど、千恵は余計な想像をしてしまう。

寂しさの御神体たちに、千恵はお祈りを捧げる。しーちゃんが、無事帰ってきますように。

ガラガラと扉を開け、「ただいま」と司郎が帰ってきたのは、四時を回っていた。

「おつかれさま」と良い妻を演じようとする。

「起きて待つてなくてもいいのに」

「だって、起きてるしーちゃんに会えるのはこのときだけでも。お仕事お疲れさま。あの

ね、今日ね……」

「寝さして。もう寝るー」

司郎はごろりと横になる。こういう時の冷たい畳は最高だと司郎はつぶやく。

「なんか、今日の打ち合わせヘンだよ。あれ、三日前にやった打ち合わせだよ。延々同じことやってんの。全部三日前に確認したし、同じ質問して同じ答えして。デスクには三日前出した書類が出てないって言われるし」

「……デジャヴ？」

「三日前デジャヴ。もういい。寝る」

「ここで寝ちゃだめ。布団いこ」

目をつぶったと思ったら、すぐにけたたましく鳴るケータイの音で起こされた。空はまだ青味を帯びたばかりの、時計は朝の六時半。

「しーちゃん！ 電話鳴ってる！」

「んー。なに……？……」

電話の相手は、カンカンのプロデューサーだ。

「どうしてカントクが来ないんだ！」

「はあ？ ……何の」

司郎の寝起きにはまだ電池が入っていない。

「撮影に決まってんだろ！」

「？ ……撮影？」

「寝ぼけてんのか！ スタッフもスポンサーも来てんぞ！」

「撮影って……」

「ほんとに寝てんのか！」

「撮影って……三日前にやったじゃないスカ」

「……それでき、ヨースタート、ハイオツケーって、一日中やってただけだよ。何かヘンなんだよ。アレ三日前にもやったよ。何でもう一回おんなじ事やんだよ」

「……デジャヴ？」

「うん。仕事デジャヴ」

今日は休みであることを三回確認し、千恵と司郎は遅めのランチに出かけていた。J丘のいつものパスタ屋だ。遅くまでランチタイムなのでいつも重宝、何代店長が変わったか数え

きれないほど二人の通う店。フリードリンクつてのが千恵のツボだ。

「デジャヴってさ、なんかはじめて行った街なのに懐かしくて涙が止まらなくて、きっとここは前世で住んでた街、とか、はじめて会った二人なのにはじめて会った気がしなくて、実は前世の恋人、とか、そういうロマンティックな奴にしようよう」

「むっ。この塩パスタ、三日前に食べたデジャヴが」

「今週のパスタ頼んだのしーちゃんでしょ！」

司郎にとっては、今日が「三日前に見える」らしい。過去に経験した日のように思える、というのだ。たしかに経験した記憶のある日を、もう一度やらされているようだ。

もともとしーちゃんはウツカリさんなんだから、あまり寝れない仕事だし、この際たっぷり寝たりすれば一時的な混乱は治るのではないか。だが、本屋で脳関係の本に、「過度なデジャヴは統合失調症の前駆症状のことも」の記述を見つけ、千恵は本格的に心配しはじめる。精神病院、今は心療内科というのか、に司郎を連れて相談した方がよいのか。いつもの私の心配症ならそれでも構わない。しー坊は心配症だなあ、何でもなかったじゃん、って笑ういつもの司郎を見たい。

「アレ？ 未来のしー坊だよ」

「あああ。すいませんん。もう夜中の菓子パン一気食いはしませんん」

道ゆく巨漢の女性を見ると、二人はこの会話をしなければならぬ事になっている。千恵は地味だから、似たような人は沢山いる。巨漢の女性に限って、色白で、地味で、髪を染めずに後ろでしばって、千恵と似たような服の趣味が多い。「あれは未来の太ってしまった私がタイムスリップしてきて、未来がこうならないように現在の私に警告しているのだ」と千恵が自論を展開したら、司郎がそれを気に入って毎回言う。J丘に行く「未来の千恵」は、特に警告もせずただ通りすぎた。未来からやって来た私、未来はどうですか。太ったかも知れないけど、司郎は元気で、楽しくやっていますか。子供はいる？ 今私が太らなければ、あなたの未来は消えますか。

と、司郎が小さな電気店の前で足を止めた。

「コレ、ほんとびっくりしたよね。ドン！って大爆発するなんてさ」

テレビニュースで、火災の様子をうつしていた。大きな工場が燃えていた。プラントから上がり続ける黒い煙。禍々しい赤黒い炎が、千恵の不安と同じ色だ。女性レポーターがカメラに向かって、現在の状況をまくしたてている。

「それでき、この子のパンツ、見えそうで見えないんだよね」  
その時。

光の一瞬あとに、大きな重低音が来た。

カメラが揺れ、赤い炎が入道雲のように広がった。

「ひいっ」

化学工場が爆発したのだ。

「あー、おっしーい。やっぱパンツ見えねえや」

爆風を受けて、レポーターのスカートが広がるのを、司郎は下から覗きこむようにして見ている。千恵は、あることに気づいて恐ろしくなっていた。

「……………ねえ、司郎」

「なに？」

「どうして工場が爆発するって分ったの？」

「？ だってこれ録画でしょ？ 三日前の」

テレビの画面には、「LIVE」の文字が、ずっと出ている。

「どうして、これから起こることを知ってたの？」

テレビの生中継は騒然としている。その騒がしさが、かえって千恵の心を静かにしてゆく。

「……………まさか司郎は、三日先の未来からきたの？」

そう考えれば、ここ数日のことに合点がいく。司郎が何故今日を「三日前にすでに経験した」と言うのか。記憶の混乱やデジャヴや、統合失調症じゃないとしたら。三日先の人からすれば、今日は三日前の日だ。三日先から司郎が来たのだとすれば、全ての辻褄が合う。…いや、SFに過ぎるでしょ。たまたまでしょ。司郎も何かの映画かニュースと記憶が、ごっちゃになってるだけでしょ。千恵は自分の妄想を振り払おうとした。どこでもいいから、賢い妻としては、司郎をお医者さんに連れて行こう。「疲れから来る、一時的な記憶の混乱でしょう」と、ごく普通に診断してもらおう。

3

「どうせここもヤブ医者だろう」

「いいから、診てもらって」



洪る司郎の背中を診療室の奥に押しこんで、千恵は不安をドアの中に押しこんだだけの気になる。三軒目の心療内科。セカンドオピニオンでも満足できない。

廊下は冷たく、付き添い人らしき人が何人か待っている。この人たちも、私と同じ「夫が未来から来た」なんて不安があるのかしら。そんなことはないだろう。夫が統合失調症の前触れなのか、単なる疲れによる一時的な記憶の混乱かで、賢き妻である自分は心配すべきである。と肝に命じた。統合失調症の典型症状は「妄想」である。しかし監督とは妄想が仕事のようなもので、病気と正常の境目を往復するようなものだ。だからといって病気の発見が遅れてよい理由にはならない。司郎は「正常」の範囲を逸脱しかかっている。

この症状は、あの「爆発」の日以来、ずっと続いている。

仮に、「司郎が三日先から来た」としよう。なんらかのタイムスリップが起こったと仮定する。翌日はどうか。「二日先から来た」ことになるのか。そうではなかった。翌日もやはり「三日先」に司郎の意識があり、日々新しく「三日先」に更新された。肉体の時刻と脳の中の時刻が、三日ずれた、という言い方が正しいと言うべきだった。「二日先」「一日先」「当日」とカウントダウンし、司郎が三日前にタイムスリップする、という訳ではなかった。

日付け変更線、つまり夜中の零時を過ぎると日付のずれがどうなるか、起きてみたが大きな変化はなかった。眠ってから起きると、常に「三日先」に、司郎の脳の中の時刻は合わされていた。

そんな精神病は、事典には書いていない。仮に「未来病」と呼ぶことにしたが、その仮説を先生に話したら、今度は私も患者になってしまっただろうか。これは私の妄想に過ぎず、よくある病気ですよ、〇〇という病名でして、〇〇を〇回処方すれば改善するもので二週間ほど様子を見ましよう、などという普通の診断が欲しかった。どのオピニオンも、「睡眠不足による、一時的な記憶の混乱では。記憶障害というほどではない」と判を押したような答えだった。

かばんに入っていた雑誌を読もうにも、同じとこばかりを読んでしまい、堂々めぐりをしている自分に気づく。千恵は廊下を出て、外の空気を吸うことにした。

外の小さな駐車場にはプランターがいくつあつて、薄紫のペチュニアが咲いている。古い金属で人の背の高さのアーチがつくつてあり、バラがツタのように絡ませている。初夏が来ればこれはバラのゲートになるだろう。スペースは小さいが、この主人は花の世話が好きらしい。

派手なエンジン音を吐きながら、赤いオープンカーが入ってきた。司郎が見れば車の名前

が分るだろう。どうして男の人は、車の名前をあれほど知っているのだろう。司郎が家の周りに咲く花の名前をあまりにも知らないように、私は車の名を知らない。きつと男の子だけ授業で集められて、女子には秘密の授業で、あれはベンツである、などと教えられるのに違いない。ときどきDで見かける、カエルのような顔の車がポルシェだ、というのはようやく覚えたが。

派手なサングラスをかけた赤い車の主は、なにやらケータイでやかましくしゃべっている。それに夢中で、千恵が視界に入っていなかったのだろう。千恵の体ぎりぎりをかすめて、車を駐車場に入れる。停車位置もゆきすぎて、がっんとプランターを押し倒した。その衝撃で、車の主は慌てて周囲を確認した。

「引いた」と、千恵はその主を見た。

「轢いた？」と主は慌てて千恵を見た。

「引いた」と、千恵はその主に返す。

待合室から持ってきたままの雑誌は、J丘で配られていたフリーマガジン。表紙はテレビタレント北村医師。サングラスを外した車の主は、まさしくその男だった。否、千恵にとっては十年ぶりに再会を果たした、「出世した北村さん」であった。

4

北村は、三人の心療科医の、所見や会話の簡単な記録のコピーを、改めて読み返している。その間に、千恵は紅茶を淹れる。自慢の古陶器から華やかな柄のカップを選び、缶入りのダージリンの無農薬輸入茶葉を濃い目に。低脂肪ミルクをたらすと、深い赤にマーブル模様が広がる。二度と同じ形を描かない、この瞬間が千恵は好きである。書類を一通り確認し、北村は紅茶を口にした。渋い香りに、純度百パーセントのハチミツが効いていた。

二人の部屋に来客が訪れるのは、両親以来はじめてであった。なんだか二人の秘密をさらしているようで、千恵は居心地が悪い。窓一面を埋め尽くし、出窓にもあふれ出る緑の数々を、北村は「すげえな」と最初にひと言コメントしただけだった。

柱の目めくりが縦に裂いてある。右半分は今日の日付で、左半分は三枚先にめくってある。つまり、三日先と今日が、裂け目に隣り合う。

「三日先の記憶を持つ男」に大学の研究室で同期だった男がなくなってしまった、という突拍子もない話を、立寄った知り合いの医院前で持ちかけられた。久しぶり、変わらないね、と

彼女に言う暇もなく。

「妥当だと思うよ。三人とも大同小異だね。……いわゆるデジャヴは、科学的には記憶の格納ミスに分類される。普通、認識↓記憶の格納、と行われるプロセスが、誤動作して記憶の格納↓認識と逆になったときにデジャヴが起こると言われている。だからはじめてなのに記憶にある、と思ってしまう。海馬の一時的混乱が原因では、と言われているが、再現性が無い為詳しい研究はなされていない。慢性的にひどくなればそれは記憶障害。統合失調症の場合、側頭野のホルモン異常がひどいデジャヴを起こすことがあるが、……このケースは当てはまらないと思う。より詳しい検査をすれば、分ることもあるかも、だが」

北村は、脳外科医としての妥当な見解を述べた。

千恵は小さなふたつの人形を取り出して、机の上に並べた。緑のカエルと、白いウサギだ。

「こっち（カエル）が司郎で、こっち（ウサギ）が私だとする。私たちは、日々仲良く暮らしていました」

トントントンと、数歩一緒に歩かせる。

「ところがある日」

カエルの頭をぽきゅつと外し、その頭だけを一步、二歩、三歩と進める。

「カエルさんの頭だけが、三日先に進んでしまったのです」

カエルの頭を後ろに振り向かせる。三歩うしろに残された体とウサギを、頭が見た。

「頭から見れば、今はすべてが三日前」

「……」

北村は考える。一応の辻褄は合う。

「どうしたら、元に戻るのでしょうか」

未来から来た、なんて馬鹿馬鹿しい。第一、それこそ証拠もない妄想だろう。北村は、紅茶をもう一口飲んだ。煙草を一服したかった。

「ウチの病院にはさ、テレビでも宣伝してるけど、いいマシンを入れたんだ。脳の断面が時系列で観察出来て、しかも3Dで解析できる。ウチのエースに精密検査をさせてみようよ。何かわかるかも」

北村があくまで医師の立場をとるのを感じ、千恵は黒い手帳をとり出して広げた。走り書きのメモで、「オー四つの瞳がニッコニコ」とある。「04の132525」と数字も書き添えてある。ゴロ合わせ、と北村は理解する。

「三日前の宝くじ売り場でね、突然司郎がこう言うのよ。『ちょっと待って。メモして。思い出した』って。04の、132525。私はとっさにゴロ合わせに変換して『オー四つの瞳

がニッコニコ』って言いながらメモしたの。『それだ。そのちー坊のゴロ合わせで覚えてた』  
『なに？ 宝くじ？』って聞いて、慌てて二人で列に並んだけど、途中で『あっ』と同時に  
気づいた。宝くじって好きな番号を言う仕組みじゃないのよね」

千恵はテレビをつけた。ジャンボ抽選会の生中継番組だ。司会者が高らかに宣言する。

「さあ！ ついに一等二億円を決める瞬間が、やって参りました！」

「オイオイまさか。……だから、この時間に呼び出したのか？」

八台の的にスポットが当たり、的が回り始めた。ドラムロール。ダララララ…… 司会  
者とゲストがボタンを押すと、八本の矢が的に刺さった。回転がおさまるまでその数字は分  
らない。千恵も北村も、会話を忘れていた。千恵は息をするのも忘れていた。的の回転が、  
刺さった数字が読める程にゆっくりになってゆく。司会者が興奮してその数字を読み上げる。

「一等賞二億円は……04組の……」

千恵が、それと同時に呟く。

「オー四つの瞳が……」

「13……252……」

「ニッコニ……」

ダラララン、ジャン！

「コ……」

「5————！！」

北村は、手帳の走り書きとテレビ画面を何度も見比べる。

「なんだコレ！ なんのトリックだよ！ ていうか、百万でも一千万でも出して、この番号  
持つてる奴探して買い取りや良かったんだよ！……ていうか……どういことだよ！」

「できれば……外れてほしかったんだけど」

千恵は冷静に混乱している。

司郎の脳に一体何が起こっているのか。どうしてこんなことが起こっているのか。

襖がカラリと開いて、寝起きの司郎が隣の六畳間から出てきた。

「おう北村。久しぶりだな」

「おう風間。ていうかいつまで寝てんだよ」

「いやあ。慢性寝不足でさ。全盛期のピンクレディーはさ、殆ど寝てなかったって言うじゃ  
ない？ 三時間寝れたらいい方で、だからか、あの時のことを彼女たちは何も覚えてないん  
だってさ。睡眠は記憶の定着に係るんだ。だから俺もたっぷり寝て……」

と、司郎が不思議な顔をする。

「この話、前もしたよな？」

「俺にとってははじめてだが、……お前はもう経験してるんだな？」

と、北村は観察をはじめめる。

「でき、次に俺はこう言うんだ。そういえば大学するとき、クラス全員の下宿に、裏ビデオのチラシが入ってた事件あったじゃん。アレ、名簿売ったのお前だろ、ってさ。どうだ最近？ 相変わらずあくどいことやって儲けてるか？」

「ずいぶんな挨拶だな。……それも、三日前にしたのか」

「三日前？」

司郎は指を折って、記憶を鮮明にしようとする。

一本、二本、三本……四本。

「四日前だろ」

「四日……前？」

千恵は、カエルの頭をもう一歩進めた。

5

見慣れない検査服を着せられ、司郎は北村病院で一日中かかってデータを取られた。北村が院長を務める大病院だ。アキラみたいだ、と司郎はぼやいた。科学者たちに協力した異形の者は、切り刻まれて分解されて、結局本人の悲劇は癒せない結末になるよね、と物語と現実の狭間の話をする。

心配を、冗談で軽くしようということだと思う。否、妄想好きな司郎なら物語こそ現実だと思っっている節もあるんだけど。

暗い部屋に通され、千恵と司郎は担当医の狩野から説明を受ける。まだ若い医師で、北村によれば「ウチのエース」らしい。脳の断面写真が何十枚も貼ってある。千恵も司郎も、「パラパラマンガみたい」と同じ感想を言う。

若き狩野医師によれば、医学的には健康というしかない、という判断だ。CT、MRIによる側頭葉の灰白質は正常だし、その他の検査による中脳辺縁系のドーパミンやD2受容体、統合失調症時には六倍に増えると言われるD4受容体も正常の範囲だと言う。その他外科的な所見、たとえば脳腫瘍などもない。問診でも、統合失調症などに特徴的な、盗聴妄想や被

「害妄想、幻覚や感覚低下や自閉などが認められる訳でもない。」

「というよりも、心の病気は脳の病気だと、このとき千恵ははじめて知った。鬱とか精神病というものは、心の持ちようがこじれていくことだと思っていた。心の弱さゆえそうなるのだと。だが現在分っている最新の医学では、脳内の分泌物のバランスの異常が脳の機能をおかしくさせるのだという。性格は誘引のひとつにすぎず、ストレスとセットでそこに行きやすいだけなのだ。薬の処方とは、そのバランスの回復を物理的に助けるらしいのだ。心じやなくて、物質の化学平衡なんだ、と夢がひとつ壊された気がした。きっとまだ分っていないこともあるんでしょう？ それで心の病気の全てじゃないんでしょう？ だって心は科学じやなわりきれないもの、と医師に話をしたかったが、司郎のことを考えるとそれどころではない。」

「正常、ということですか？」

「ありていに言えば」

「未来の記憶は、どうして」

「ここに風間さんの脳の中の写真があります。この中が四日先のものか、今日のものは、写真では分りかねます」

科学なんてそんなものだ。分ることしか分らない。もともと千恵は病院が嫌いだ。屠殺場や漁港のような、命が沢山失われた匂いがする。隅田川へ行ったときも同じ匂いがした。それを隠蔽しようとするアルコール消毒の匂い、それを隠蔽しようとする香料の匂い、それを隠蔽しようとする明るい雰囲気やとりつくった笑顔が、千恵は嫌いだ。火葬場や墓場の方が、何もなくなってしまうた地平のようにまだ静かだ。病院は、現在進行形の生々しさがいる。いつだったか「病院が嫌い」と千恵が言ったら「俺も嫌い」と司郎は即答した。この人は信用出来る、と千恵はそのとき思った。

「俺の天才的才能が、ついに脳を見て分かった？」

と司郎は無邪気に質問する。頭の能力と脳の関係は、残念ながら医学では解明されていない。

「どうだウチのエースの見立ては」

と北村が入ってきた。専門的な難しい話を狩野医師とかわす。「更に詳しいことは解析班を待たないと分らないが」という最初の言葉だけを千恵はかろうじて理解した。あとは北村の表情を見て、「何も分っていない」というニュアンスだけを汲み取った。

「風間。ちょっといいか」

北村は持ってきた大量の雑誌や新聞を並べる。

「予言できるもの、ある？」

株価の雑誌、国際情勢、戦争の記事、競馬新聞、スポーツ新聞、芸能ゴシップ。ありとあらゆる「世界」が司郎と千恵の前に広げられる。

「いちいち数字とか覚えて暮らしてねえし」

と司郎は当たり前前のことを言う。四日前の万馬券の番号なんて、興味がなければ覚えて暮らす人はいない。

「宝くじは覚えてたじゃねえか」

「あれは、ゴロ合わせだったから」

と千恵が言う。司郎は山ほどの雑誌や新聞を見ながら、今日公開の映画の広告を指さした。

「あー。この映画はコケるね」

「そんなの私だって分るよ」

横からのぞいた千恵は、思わず突っ込む。

「だって人気タレントがこつちを向いてただ並んでるだけだし。ほんとうに面白い映画なら、面白そうなストーリーのさわりを紹介するもの」

「あ、阪神は負けたね」

「いつものことすぎ」

「この試合、2RKOで勝ったよね？」

「どれ？」と北村はスポーツ新聞を奪い取る。ボクシング世界戦。

「あれ？ この会社が不祥事起こして記者会見したのいつだったけ？」

「まだだ……！」

「ホラちー坊、全員頭下げてさ、ハゲ一列って俺が指差して笑って」

北村はメモを取る。

少し考えて、窓の外に目をやった。

「天気はどうだ？」

「ん？ 今日土砂降りだね」

「何言ってるの？ こんなに晴れてるのに……」

千恵は青い空を見て言う。司郎が見ているのは、この空でないことを二秒後に理解した。

北村はメモを終えて、さわやかでない笑いを見せた。

「明日の天気だけで何億も動く世界があるんだ。予言者さまかどうか、四日後には分るさ。

検査の結果も出るだろう」

四日後。土砂降りの中、千恵と司郎は北村医院の院長室に呼び出される。

重い封筒を、どさりと渡された。中身は現金だった。

「何ですかこれ？」

「予言サマサマさ。儲けは折半といこうじゃないか」

机の上には新聞が置いてある。世界戦では2RKO、不祥事の記者会見。

「ホラホラちー坊、ハゲ一列」

司郎は指さして笑っている。さらには、今日の土砂降りで開会式が中止になったニュースも。「予言」は的中した。

千恵は笑うに笑えない。現金の重さに不安になる。こんな重いお金、持ったこともない。

「なんか……賭けとか、そういうお金？」

「こういう仕事やっているとさ、人脈が広がるのさ。俺その為にテレビ出てるしね。大丈夫。

俺と儲け折半って言ったろ？ 俺の所でそういうややこしいのは止めとくからさ。なあ風間。

今日の御神託をひとつ」

「やめてよ……そういうのに司郎を利用しないで。検査の結果を教えてください」

「えっとね……」

司郎はスポーツ新聞をのぞきこむ。

「しーちゃんも乗っからないですよ！」

「なんで？ 儲かるならいいんじゃない？」

と司郎は無邪気だ。

「脳波が、少しヘンだ」

と北村は本題に触れた。

「どういうこと？」

「覚醒時脳波と共に、デルタ波が多く検出されている」

「それって……」

「普通、熟睡するときに出る脳波なんだ。風間、お前検査中寝てたのか？」

「覚えてないや」

と司郎は呑気に新聞を眺める。北村は続けた。

「追跡調査しよう。検査を何度かやれば時系列で分るかも。学会の連中とか、専門機関に聞いてみる。テレビのネットワークも使ってみるよ。君の家に、テレビカメラを設置して、風間の様子を記録する許可をくれないか。専門家に見せたら、何か分るかも知れない。……風間、天気だけでも教えてくれ。ここ二、三日の記憶でいい」

司郎は無邪気に天気の記事を書いていた。夏休みの宿題じゃないんだから。



風間司郎と千恵が帰ったあと、北村のケータイが鳴った。

「どうです？ 御神託、当たったでしょう？ 黒木さん」

「どこで見つけてきた？」

声の主、黒木は、土砂降りの野球場から電話していた。ダフ屋の元締めとか金融業者とかは表向きの顔だ。「なんでも屋」と黒木は自称するが、北村も、電話以外では直接会いたくない男。堅気のスーツを着ている筈なのに、服の下からはそれとは違う空気が出ている。

「それより、次の予言聞きます？ 金を動かすチャンスですよ？ 今日で信用して貰えたでしょう？」

「投資の方に回すのか」

「今度こそ億単位で儲けましょうよ！ 今度オレ、タレント本出すんですけど、それ位じゃその儲けに追いつかないし！ アハハ」

「……」

「黒木さん？」

そういう世界に生きる者は、嗅覚が鋭い。

「聞いておこう」

だが四日後は、司郎の雨予報は当たらなかった。カツと照る太陽を見て、「洗濯しとけば良かった」と千恵は文句を垂れた。だがその次の日が雨だった。それ以降は予言が的中した。

四日先が、五日先にずれた。そう考えるしかなかった。

徐々に司郎の「脳の時」は、「体の時」から離れはじめた。司郎の予言が、想定日よりあとに起こり続けた。

確定できたのは、七日先。

千恵は司郎に「今日何曜日？」と聞き、月曜との答えを得る。千恵は目めくりの左半分を二枚破り捨て、左と右の曜日を同じにした。

梅雨入りはまだ先だというのに、今日も静かな雨が降っていた。窓の外の多摩川は、増水した濁流になっている。少し先の下流、中原街道がかかる丸子橋の下にアザラシのタマちゃんが出没したのは、何年前の夏だったか。あまりにも暑くてわざわざ見に行くのもやめたけど、今思えば生タマちゃん、見ておけば良かったと以前司郎と話した。タマちゃん、今ももう姿を見せないが、流されてなきやいんだけど。

司郎が一週間先にいってからも、おそらく「症状」は進行している。曜日はもう合わない。二週間先か、一カ月先か。正確な所はもう分らない。今が何月何日、と聞いても、いちいち今日が何月何日か数えて暮らしてないし、と司郎は反論する。カレンダーや何かの日付を見て日々短期記憶に入れるのが、「今日は何月何日」という認識かも知れないと千恵は思う。たしかに夏休みとかは、今日が何日とかは何も考えなかった。司郎はそういう風に毎日を生きているのか。

司郎の「天気予報」も当たらないので、雨なのに洗濯をしてしまった。部屋干しをすれば、部屋中の蘭たちは空気中の水分を吸って喜ぶ。蘭は元々熱帯生まれの生きもの。夜の湿気を空中の根から吸収する能力がある。

「なんだそれ」と、千恵の干すものを見て司郎はツツコミを入れた。

ハンガーに、司郎のパンツと千恵のパンツを並べ、ひとつに洗濯挟みで止めたもの。陰陽の象徴パンツ大明神、と千恵はひそかに名付けている。

「私独自のおまじない。はやくえっちがありますように、って」

「呪い干し（笑）」

ひどい。司郎は時折絶妙なネーミングセンスを見せることがある。乾いた洗濯物を畳みの上に放置していたら「妖怪洋服玉」とネーミングした。この妖怪が一度現れると、成長して大きくなり、そこから直接服をとって着るようになり、一定の大きさを保つ生命体となる。一定しない位置のゴミ箱を、ロプノールと名付けたこともあった。

窓際に座る司郎の隣に、千恵は小さく座った。

「司郎の今日は、晴れてる？」

「晴れてる」

雨の部屋に座る自分と、晴れた部屋に座る司郎をイメージした。異なる時空のものが、同じ部屋で重なり合って、隣同士に座っている。

「いい加減帰って来てよ。カエル大明神は『帰る』のシンボルなんだよ？」

机の上に、ウサギの人形とカエルの体が並べて置いてある。外されたカエルの頭は、北村

に見せたときよりも、何歩も先にいる。

「えっちして、ってケンカしたから、しーちゃんは私から遠ざかってるの？ どうして私からどんどん離れていくの？ しーちゃんは、私が嫌い？」

「そんなことはない」

千恵の手を、司郎は握る。私の手は、暗く雨に濡れている。司郎の手は、明るく晴れた日の匂いがする。

もしカエルの頭が、このままずっと先に行ってしまったら……。先にある机の端が、千恵には断崖絶壁に見える。ぼろりと頭が落ちて、体だけが取り残されたら。

「どんだん先に行って、寿命より先にいつたらどうなっちゃうの？ 脳死？」

「そうかも知らないね」

冗談とも達観とも冷静ともとれる温度で、司郎は返した。

「心配だよ。しーちゃんは一体どうなっちゃうのよう」

「大丈夫。地球は滅亡していないし、恐怖の大王も大地震も富士山爆発もしてないよ」

司郎はやさしく千恵の頬をなでて、それ以上にやさしいキスをした。柔らかい唇がそっと触れた。

「時空を超えたキス」

と司郎はほほえむ。司郎はこんなときにもやさしく晴れた顔をしている。

「時をかけるおっさんはカッコ悪いよ」

千恵の表情には雨が降っている。

「アレは少女だからいいんだよねえ」

こんなに近くにいるのに、彼は手の届かない所にいる。ふたつに裂いた日めくりも、もう役に立たない。この部屋の半分には雨が降り、この部屋の半分は晴れていた。二人は時を隔てた遠距離恋愛のようだ、と千恵は思った。

千恵は立ち上がり、長年かけて古本屋で集めた園芸本から、切り抜きをはじめた。

机の上のカエルの頭と体の間に、切り抜いた花の写真を千恵は順に貼った。

「セブナイレブンの隣のエンゼルトランペットは咲いた？ あのお屋敷のクレマチスは？」

その向かいの黄色いミニバラは？ 駅前の噴水の、『高島屋の包装紙みたいだ』って言ってた大きいポルドーのバラは？」

千恵は、このあたりのお屋敷を花で覚えている。普通の人は主の職業や家のデザインで覚えるだろう。桜やチューリップぐらいなら分るが、菫やこぶしや沈丁花や杜若や時計草や鷺

草や、曼殊沙華や金木犀や椿や山茶花などは、司郎には名前も姿も一致しない。カタカナの花なら尚更だ。司郎と散歩するたびに、これは〇〇の花だよ、と千恵は司郎に教えた。千恵にとつて、この街は花で地図をかける街だった。

「男がいちいち花の名前なんて覚えてねえし」

「覚えてよ！ 私の好きな花、覚えてよ！」

「うーん。……これは咲いた気がする。……駅前は、まだかなあ」

例年と咲く時期が同じなら、一カ月先に司郎はまだ行つてはいない、と千恵は花の歳時記から推理する。「発病」から計算すると、八十を寿命とすれば、司郎は今三十三だから、十年たらずにそこにたどり着く。もちろんこのペースで、という仮定だ。ペースは加速している気がした。これ以上、千恵は考えたくなかった。司郎の死を想像するのも嫌だった。早く帰つてきてよ。

チャイムの音が鳴った。今日は北村の来る日だった事を思い出した。業者の人を連れて、監視カメラを設置する。司郎の日々の症状を記録して、専門家に見せる為だ。

「一カ月先、か」

北村は、机の上に貼られた花の写真とカエルの頭を見比べた。

「なんかデカイニュースは未来にあつたか？」

「うーん、I S S A がハゲた」

「今もじゃねえか」

「このカメラは、二十四時間記録するの？」と千恵は尋ねる。

「テープを回収しがてら、話を聞くことにするよ。専門家は、今ピックアップ中だ」

司郎はカメラを覗き込む。監督という職業柄、映像をうつす道具は見てて楽しいらしい。

「夜中に幽霊がうつつてたりして」

「まさか」

「じゃ俺のドッペルゲンガーが」

「それはそれで、テレビに売れるわ」

その夜。深夜のDは、時々「無音」になる。はじめてこの街に来た夜も、何も音がなくて不安だった。慣れてくると、その静けさこそ高級住宅街の価値だと常々千恵は思うようになった。

眠れないのか、司郎が起きてきて台所の冷蔵庫を開けた。ペットボトルのボルビックを、ペアのマグカップの残りひとつに注ぎ、一気飲みする。眠れないのか、千恵も起きてきた。

「ちーーーーー坊！」

千恵を見て、司郎は異常に驚いた。大きな音を立て、台所のマグカップが割れた。司郎が落としたのだ。

「は、はい？ ……ちーちゃんですが」

「生きてたのかああああああ！」

「……え？」

司郎は千恵をあげしく抱きしめた。力一杯抱きしめた。

「良かったああああああ！！ あああああ良かったああああああ」

「ちよつと……司郎……どうしたのよ？」

「ああこの匂い。ちー坊の匂い。生きてる。動いてる。ちー坊！ ちー坊！ ちー坊！」

「一体どうしたの？ 怖い夢でも見たの？」

怖い夢を見て、声をあげて目を覚ますのは、千恵ばかりであった。浅い悪夢から司郎が起こして、大丈夫、とよく手を握ってくれた。同じ事をして安心させようと、千恵は司郎を抱きしめる。

「ちー坊！ ちー坊！ ちー坊は死んでない！ ちー坊が死ぬわけないんだ！」

嫌な予感が、小さく低く警報のように鳴ってはいた。

昔から、千恵は何かが呼んでいる、と引く力がある。自分の未来についても、ぼんやりと見えていた。ところが最近、それが黒一色に塗りつぶされている。不安が形になっているのだろう、と千恵は理屈で納得させてきた。

「ああ！ ああ！ ああ！」

こんなに理性を失っている司郎は、見たことがない。司郎は私より安定した精神の持ち主で、頭の良い人で、感情で精神の均衡が崩れることはない鉄壁なのだ。私が不安定なとき、「俺はずっとここにいるから大丈夫」と言える人なのに。「未来」に何か起こった。司郎はそれを経験してるから、こんなに取り乱しているのだ。

「私は……死んだの？」

「黒一色の未来」を言葉にするとこうなる。

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ！」

司郎の呼吸に、持病の喘息の気配が急に来た。落ち着かせなきや。吸引スプレー、取ってこなきや。

根気良く待って、喘息の発作もおさまった。司郎の発作は、恐くなる。空気を吸っても吸っても吸えないのだという。ぜいぜい言う気管の音が、穴のあいたふいごの断末魔に聞こえる。

ペアのマグカップ、両方とも壊れちゃったな、と千恵は司郎の背中をなぜながら思う。

「落ち着いた？ 大丈夫。大丈夫」

「……そうだよ。これは夢だよ。」

「？」

「だってちー坊が生きてる訳ないもん。病院でさ、雨が降ってきてやだなーと思ってたら急に心拍数が乱れてさ……。病院の裏口から霊柩車出されて、坂の上で一回止めてもらって多摩川をしばらく見て、……葬式もやって、棺の蓋に釘打つ前にさいごの、アディオスのキスをして……。骨を拾って、帰ってきて……」

「……」

「これは夢だよ。ちー坊が生きてる、って夢の中なんだ。……そうだよ、これは夢だ！ 夢の中でちー坊と再会出来たんだ！」

司郎は、千恵の手をとり立ち上がった。

「踊ろう！」

「はい？」

「いいことがあったら、二人の踊り場で踊ろうって言ったじゃん！ さあ！」

引越しの日以来、半畳の板間は、雑誌を積むスペースになったり、妖怪洋服玉のすみかになったり、ボディブレード置き場になったり、買ってきたガジュマルの鉢のスペースになったりしていた。

この板間で、あの日以来二人で踊った。

BGMは深夜の「無音」。二人の、裸足で板間を踏む音だけがひびく。司郎は柔道組みをしたり、社交ダンスの真似事をしたり、いつもするようにな変てこな踊りをした。淡い月だと、司郎の顔はよく見えなかった。司郎の表情は見なくても、司郎の気持ちが踊りで分った。

「そっちはどう？ 暑かったり、寒かったりしない？ いつも使ってたカユミ止めと、寒いとき用のバンダナと、暑いとき用の『風』って書いた扇子と、小腹すいたとき用の柑橘類と、棺の中に入れていたから。メガネは電気炉にはダメって言われて心配したけど、でも幽霊に視力はないか、って思いなおしてさ。あ、もう体重とか関係ないから、ダイエット考えずに腹いっぱい食べても怒られないよ？」

司郎の腕に抱かれながら、千恵は尋ねた。

「司郎。今、司郎はいつにいるの？」

「わからない。きみが死んで、時が止まったままだよ。俺自身、生きてるのか死んでるのかも分らないしさ。……でもきみに会えてよかった。たとえ夢の中でも、この体をがしつと抱きしめられるよ。……ちー坊愛してる。ちー坊愛してる。ちー坊愛してる」

一カ月かそこらの未来、私は死んだらしい。

司郎は、私のいないその未来を一人で生きている。

最初、私は司郎の死を想像して身震いした。

私の死の方が、先だった。

## 第二章

### 司郎と弓美



朝の光で、風間司郎は目が覚めた。レースのカーテンごしに、蘭の葉と葉の間の隙間から、低い斜めの光が司郎の顔に当たる。布団の中で目をあけて、右隣に「おはようちー坊」と手をのばす。もう十年以上やってきた習慣のようなものだ。手をのばした先には、妻の千恵の遺影と骨壺があった。いつも彼女の寝ていたところに置くことにしたし、いつも隣で寝ているように、いつもと同じ所で布団をひいて司郎は寝ていた。いつもと同じように「空気を入れ替えるね」と言って窓をあける。いつもなら、ここで千恵が何かしゃべりはじめるはずだが、どれだけ待っても千恵の写真と骨壺は返事をしなかった。

あの日から、ずっと同じ時間に目が覚める。朝七時一分。病院で、心臓マッサージを宿直医が止め、この機械は心臓の拍動に反応してはなくて、私の押した揺れに反応してるだけなんです、と説明し、腕時計を見た時刻だ。その瞬間、看護婦も手馴れた様子で時計を見た。看護婦と複数で確認するものなのか、という観察と、時計なんか見ないでくれ、と叫びそうだった、あの時刻だ。

あの瞬間から、司郎は自分が生きているのか死んでいるのかも実感が無い。千恵がそこで紅茶を飲んだりテレビを見ているつもりで、司郎はしゃべり続けた。ずっと彼女と話を生きてきた。家に帰れば、あぐらをかいたオランウータンみたいにテレビを見ていた彼女は、いつもこつちを振り向いて笑った。黙るなんてこの部屋でやったことがない。魂がこの世にあるなら、あいつはまだこのへんにいる。その彼女と話をしたいと、司郎は思う。千恵の写真は、どんなに話しかけても何の返事もしない。幽霊が起こすという部屋のラップ音は、建材が湿度や温度の変化でピシッと鳴るって科学が説明してたけど、司郎の話に合いの手のタイミングで鳴ったときは、千恵の霊の返事だと司郎は信じる。定番のギャグをいくつも言うが、定番の返しは来なかった。

眠ることすら、一体どういうことだったのか分らない。千恵といる時は、眠りが楽しみだった。今は眠るのが怖い。千恵のいない世界で眠るのが怖い。この部屋に最初に来た夜は、段ボールを隣の山に置いたまま、何も無い六畳と布団ふた組だけで寝た。「旅館に泊まりに来たみたいだよ」と千恵は言った。「早く前の家に帰ろうよう」と冗談を言った癖に、布団以外のスペースはあつという間に色々な物で埋まった。

二人で暮らしてきたこの部屋は、一人には広すぎる。柔道が出来ると言った十二畳は、ひとつの布団には広すぎた。宗教色が嫌いな千恵の為に無宗派に決めた祭壇は、ほんの八十七

ンチ幅三十センチ奥の二段だ。いつも千恵の布団のあったスペースは空いている。不在という名の畳がそこに露出している。人が死ぬということは、その人がただいなくなることだ、と司郎ははじめて経験した。二人で暮らしてきたこの部屋は、一人には広すぎた。

朝の光で、司郎は目が覚めた。レースのカーテン越しに、蘭の葉と葉の間の隙間から、低い斜めの光が司郎の顔に当たる。布団の中で目をあけて、右隣に「おはようちー坊」と手をのばす。

「ん？」

手をのばした先は遺影と骨壺ではなく、千恵のたたんだ布団だった。朦朧とした意識で起き上がると、襖の向こうから千恵の話し声が聞こえた。幻聴？ 幻聴じゃない。ガラリとあけると、千恵がいつものように紅茶を飲んでいた。

「ちー坊！ 生きてたのか！」

千恵はぼかんとして司郎を見ている。まるで千恵が生きていたときと何も変わらない。あのときと同じように千恵がそこにいて、あのときと同じように紅茶を飲んでいる。千恵の匂いや、千恵の発する音がしている。なにもなくなった部屋ではなく、ここは千恵のいた部屋と同じだ。

「あ。…：：：そうか。これ、夢だな？ ちー坊が生きてるわけないもんな。ここでちー坊が死んでるって気づいたら、夢が終わっちゃう。夢の神様をだましてやるぞ。ちー坊だ！ ちー坊！」

司郎は手を振った。千恵はただ静かに微笑んだ。その横に、大学の同期の北村がいた。アレ？ なんて夢にお前までいるんだよ。

## 2

その一時間ほど前、北村は千恵に緊急に呼び出された。一週間後に見る予定だった、昨日取りつけたばかりの監視カメラの記録を見る羽目になった。深夜の台所で司郎がマグカップを落として割り、千恵を抱きしめる。喘息の発作をおこし、落ち着くまでには十分を要した。すべての会話を見せたあと、千恵はビデオの停止ボタンを押した。

「…：：：つまり、私は死ぬの。一カ月かそれ以上先に、雨の降る病院で」

つとめて冷静に、千恵は言った。そのつもりだが、実際にそう言えたかは千恵には分らない。

「話を整理しよう。風間の頭の中は、未来を知っている。それで、一カ月あたり先、君が死んだと。……何だそれは？ SF？」

「でも、天気予報は当たったし、工場の爆発や宝くじの番号も知っていたよね」

「……そりゃ、それでちよつとは儲けさせてはもらったさ」

千恵は、落ち着く為に丹念に時間をかけて淹れた紅茶にミルクを入れる。二度と同じ模様を描かない、ゆっくりと回転するマール模様広がるのを眺めるのが好きな筈なのに、今の千恵はそれをただ見ているだけにすぎない。

「未来が決まっているかどうかについては、科学では二種類ある。決まっている、とする決定論と、決まっていない、とする非決定論だ。ニュートンなどの古典力学では、物体の運動は全て計算出来る。方程式に従って、全ての粒子の行く末、つまり運命は、決まっている」

北村は、広がってゆくマール模様を見た。

「ところが、量子力学やカオス理論などの現代物理学では、未来は非決定だと考える。そのミルクの渦は、厳密に予測出来ない、とカオス理論が解き明かした。最初のほんのわずかな違いが、未来に大きく影響するんだ。バタフライ・エフェクトとも言うね。量子力学では、未来は確率でしか表せない。世界は、可能性と言う名の重ね合わせなんだ」

「……それで？」

「運命は決まっているか？ という問いと同じだ。現代では運命は決まっていない、と考える。人間の意志は自由であるべきで、と考える人達が、運命は決まっていなくて、変えられる、と考える。……女の人は、運命や占いが好きだけど」

「私は……司郎との出会いは、運命だと思ってるけど」

「それは決定論だ。運命に従って、死という決まった未来へ進むのみ」

千恵は、冷めた紅茶をひと口飲んだ。

「未来が決まっているか、いないかが当面の問題じゃない。私の死が確定かどうかも、問題じゃない。私は、司郎を元に戻したいだけなの。それが病気というなら、治療法を知りたいの」「あいつの言うことが全て妄想の産物で、今までの予言は全て偶然の一致、ってこともあり得る」

千恵は部屋の隅の籐製のダンスを指した。前任んでいたマンションのゴミ捨て場で拾った、味のあるダンスだ。

「私と彼しか分らない暗号を、あの籐の引き出しの中に入れてしばらく封印する。司郎に『未来』でタンスを開けて、中身を言ってもらおう。監視カメラがあるから、司郎が今タンスを開けない事ぐらい確認出来る」

「未来に、こちらからアクセスすると」

「未来通信。……それが出来れば、未来の証拠になる」

北村は頭を抱えた。当初思っていたより事態はややこしくなった。未来と通信して、時をこえて情報をやりとりし、それを元に行動したとする。未来を変えねば、千恵の死は回避できない。しかし未来の情報は、現在が変われば変わる。それは最初に得た情報と矛盾する。原因と結果が矛盾する、因果律のタイムパラドックスだ。

「下手に未来を変えたら、タイムパラドックスが起こってしまう」

「起こって、私の死が回避されるような未来になれば、それはそれで構わないけど」

「……」

俺は何を話してるんだろう。北村は、この部屋自体が時空に歪まされているような錯覚に陥る。

千恵の方がむしろ落ち着いて、必要な情報を収集しようとしていた。

「脳波の謎は分った？」

「いや。あれは誤作動としか思えない。人間の意識ではありえない。追検査ではなにも出なかったし。ただ似たケースがないか、今調査中だ。熟睡時脳波と覚醒時脳波が重なってるなんてのをね。学界、世界中のネットワークを探している。テレビ局なら、奇病のケースを知っているかも知れない」

「未来の情報を、司郎からなるべく聞き出さなきゃ」

千恵は、紅茶を飲みほした。

「予言者って、こうやって未来とつながったりするのかな。夢の中でお告げを受ける人は、日本にも外国にも沢山いる。エドガー・ケイシーとかノストラダムスとかジュセリーノ・ダ・ルースとか。……未来が確定していたら、の話だけど」

そこへ丁度司郎が起きて来て、襖をあけた。ちー坊は死んだ筈、と昨夜と同じくらい驚いていた。彼の心を落ち着けさせるのに、昨夜より時間はかからなかった。司郎が、「ここは夢だ」と自分の中で納得するのが早かったからかも知れないけど。

北村が帰ったあと、司郎は急に甘えてきた。

「ひざまくら」と司郎が要求するのは、相当の甘えタイムだ。

「ああ。このぶつとい太股の膝枕。高くて、首が痛くなる膝枕」

「なにそれ腹立つ」

「それが好きなんだ」

千恵は何も言えなくなる。司郎は膝枕に甘えながら、千恵の遺影のあった場所を眺める。そこに今は何もなくて、布団が雑にたたんであって、高い膝からの体温が直に伝わってきている。

千恵は司郎の髪を撫でながら尋ねた。

「ごはん、ちゃんと食べてる？ お仕事どうしたの？」

我ながら実家の母みたいなことを心配していると千恵は思った。

「仕事はしばらく休んだ。面白おかしい事なんて今は考えられないよ。あ、前にさ、ウチの親が勝手にかけてハンコだけ押してって君が激怒した保険がさ、下りたよ。八百五十万だつてさ。高いのか安いのかも分らない。その相場って何？って感じ。世の中の人はそれで黙るのかな。八百五十万払って君が生き返るなら、どんな辛い仕事してでも一瞬で稼ぐよ。でも金じゃ生き返らない。そんな金、いららないよ」

司郎の傷ついた心を、髪を撫でて癒せるのなら、いつまでも撫でていくべきだと思う。自分のいない未来なんて、想像できない。逆に、司郎が突然いなくなつて、この先ずっと一人で生きて下さいって神様に言われたら、どうしていいか分らない。それこそ黒一色の未来だ。途方に暮れる。自分の死より、司郎の孤独の方が身に沁みて辛かった。

「十キロ、痩せた。ちー坊死んだダイエット。ごはんはいつもの店で食べてるよ。パスタでしょ、回転寿司でしょ、マダムの焼肉屋、オムライスの洋食屋、隣の韓国料理屋、ザーサイがうまいバナナ餃子の中華、最近見つけた風呂屋の近くの中華……でも一通りあきたつていうぐらい、そもそも飽きてたよね。新しい店も開拓してないし。こないだ、バイトに何名様ですかって聞かれて、指二本出したときに気づいたんだ。あ、一人なんだって。この人は、ちー坊とオレのツーショット、見たことがないんだって」

千恵は司郎の髪を撫でつづけていた。それは祈りにも近かった。

「ちー坊のさ、テレビの番組表に、録画するやつに蛍光ペンで印つけたやつあるじゃん。それがもうなくなっちゃった。あのオレンジペン書きやすいつて気に入ってたよね。もうひとつもちー坊の見たい番組やらないんだ。あ、見に行こうって言った『Xメン』の続編、意外とよかったよ。あと、『びっくり寿司』潰れた。一度いつときゃ良かったよね。毎回『びっくり！』って、店の前通るたびにコントやってたのにね。あ、あと梅の実がなって、オモトだっけ、が庭にあるあの古い屋敷、庭の木全部切ったと思つたら、突然更地になつた。

あそこのワイン飲んでた御老人二人、土地を売って多分どこかへ引越したんだよ」

そのひとつひとつに、千恵は「そう」とうなづいてあげた。

「君と暮らした街が、少しずつなくなっていく。君の知らない何か、周りにちよつとずつ増えていく。それが嫌だ」

「そう」

「ちー坊」と司郎は甘えてくる。

「毎日、何してるの？」

「何もしてない。……ただ、じっと生きてる」

千恵の死後、司郎は眠れなくて、何度も朝になるまで窓の外空を見ていた。何度かはただ空の色が明るく変わってゆくだけで、何度かは綺麗な朝焼けだった。いつもなら、朝までしゃべるなんて学生時代のゼミの続きをまだやってるよ、社会の仕組みとか文化の男女差とか、とやるべき所を、司郎はただ黙って朝を迎えただけだ。きみといくつもの夜を語り明かした。ようよう明るくなりゆく空の手前には、千恵の拾って育てた蘭たちが、葉を茂らせ籠に吊られている。

司郎は膝枕から起き上がり、蘭を指さした。

「あ、蘭の水やりはちゃんとやってるよ」

「ホントに？」

「きみに託されたから。口癖を色々思い出しながら。『初心者の水やりは難しい、たいていやりすぎて根腐れさせる』とか、『東京の冬はカイロより乾燥するから空中湿度を』とか、『なすべき生まれた環境に近い環境にしてやる』とか。そうだ、お前が勝手にバナナを柱の釘に吊ってたの思い出したよ。あそこに時計かけてた筈なのに、今何時って見たらいつの間にか時計がバナナに！ってシュールな場面思い出した。バナナは房として出来るから、吊るした方が長持ちする、って理屈は、それで覚えたけどさ。だからウチの蘭は、大きな樹に着生してるのを、吊るした籠で再現してるんだね？」

「よくできました」

「で、水やりは週二回？ 三回？ やりすぎも根腐れで、でもやらなくて水がなければ枯れるでしょ？」

「その案配が難しいから初心者向けじゃないの。水蘚を触って……」

「その湿り気でしょ？ 天気によっても違うし」

「知ってんじゃない」

「だいたいどれも『緑』じゃん。どれが何か、品種が分んねえよ。園芸本ってさ、花の写真

しかのつてねえじゃん。シンビジウムはこう育てる、は書いてあるけど、この葉っぱと緑はデンファレである、なんて説明はどの本にもねえよ。こいつは胡蝶蘭でこれはデンドロビウムでこれはオンシジウムってのは色々見比べて、大体分ってきた。シンビジウムとカトレアとデンファレも分かった。胡蝶蘭がファレノプシスってのも分かった」

「NHKの趣味の園芸のが参考になるよ」

「ああ。それ発掘して写真と見比べながらやってる。バニラが蘭だつてうんちくも知った」

「よく見つけた」

「でもごめん。二株、枯らした」

「ええ？」

「でもさ。新しい根が出てくるとちよつと嬉しくなるんだよね。新しい葉っぱはさ、ツヤツヤしてんの、赤ちゃんの肌みたいに。命なんだよねこいつらは。水をやると、ラン菌っていうの？　なんかイイニオイがするしさ。一日だとほんのちよつとしか変化がないから、毎日毎日少しでも目をかけ続けなきゃいけないてき。いのちなんだよ。『壊れるから大事にする』つてちー坊が言つてたその意味が、今なら少し分るんだ。こいつらはいのちだ。いのちを君は残したんだ」

「遅すぎだよ」

「遅すぎるよ。なんでもっと早くに分らなかつたんだろ」

司郎は立ちあがり、窓に吊り下げられた山ほどの蘭を見た。二人で暮らしてた時は、ただごちやごちやした緑が、窓際一面を占領するだけだった。今なら、ひとつひとつを見分けられる。雑草と言う草はない、と言つた植物学者昭和天皇の話が千恵が愛している意味を、司郎は反芻した。

「学校の先生つてきつとこんな感じだよね。生徒を毎日毎日見てなくちゃいけないて、一日ぐらいじゃほとんど変化がないんだけど、元気に成長してるとか虫がついたとかは、毎日見てないと分らない。少しずつ少しずつ、この植物園が変化していくのを見てなきゃいけない。

ようやく一学期の終わりに生徒の顔と名前が一致してきた、みたいな」

そんな事を司郎が言うとは思わなかつた。どれだけ話しても、なかなか理解してくれなかつたのに。私の死、がここまで司郎を変えたのだろうか。

千恵は司郎に、秘密をひとつ教えた。

「ね、蘭に寿命がないって知ってた？」

「ウソ！　いのちでしょ？　あるでしょ寿命！」

「葉っぱが新しく上から出て、下から順に枯れていくでしょう？　下の古い根は死んで、新しい根が上から生えてきて、死んだ部分を残して、生きている部分が順に上にキヤタピラミ

たいに移動する、それが永遠につづくって言われてるの。植物の寿命って、正確な研究は誰もしてないのよね。屋久杉とか、動物よりはるかに時間のスケールが大きいし、年輪が蘭にある訳じゃなし。胡蝶蘭は着生植物って言って、大きな樹の枝の上とか、小さな幹に根を絡ませて生きるツタみたいな生き物だから、木みたいに構造物を自分の中に持たないのね。下から順に死んで上に生えていくの。いのちがトコロテンみたいに生きていくの」

「永遠を見た人なんて、誰もいないのに」

「三十年ぐらいまでは確認されてるのが実在する。育てるのが難しいからわかんないんだよね。原産地のジャングルじゃ継続的観察はされてないだろうし。……それでも、千年生きる、私たちとは違う時間を持つ生きもの、って言われて」

司郎は胡蝶蘭たちの葉をやわらかく撫でた。どの蘭も、花の時期はまだ先だった。どんな花を千恵が咲かせたかまでは覚えていない。切り花にして、トイレに飾ったりしてた記憶がおぼろげだ。

「いのちつてき、波みたいだね」

「ん？」

「昔ちー坊がさ、髪とか爪切ったとき、まだ細胞が生きている髪や爪は自分なのだろうか、って哲学的なこと言ってたじゃん。俺は生きたり判断したりする主体が本体であるから、髪や爪はちー坊ではない、と言ってたけど」

「うん」

「こいつらの生き方見てて、波なんだって思ったよ。バルブ単位で生きるでしょ。古いバルブは死んで、新しいところに最新のバルブが生まれて、その連鎖が現在のいのち。死に続けて生まれ続ける。どこから生まれた波が、崩れ続けて生まれ続けるみたいに、その現在進行形が命という存在なんだよ。人間で考えるから生と死が一個しかないんだ。細胞は死に続けて生まれ続けてるんだから、固定した一個じゃないんだ。主体は、更新し続ける波なんだよ。髪や爪は更新しないじゃん」

「なるほど」

二人は黙って緑色の波を見ていた。十年、百年、千年、映像を早回ししたら、その波を見ることが出来るのかと想像した。

おなかのすいた司郎は、突然千恵に言った。

「ね、ランチいこうよ。二人でいこうよ。ランチアンド映画、行こうよ！」



Dの坂の上にある、昭和に建てた大きな古い家。その二階が千恵と司郎の部屋だ。家を出て外から窓を見上げると、蘭たちが埋めつくしているのがよく分る。駅方面に坂を下って、H公園の中を抜け、小さな森の息を吸いながら木の階段を上る。上のスペースで、しばらく司郎が太極拳に凝ったけど、いつの間にかやらなくなつた。光と影が立体的なトンネルをつくる、長いまっすぐないちよう並木を歩いていけば、緩やかな下り坂の向こうに赤い屋根とバラ園の噴水を持つDの駅舎が見えてくる。「ランチ、アンド、映画！」と司郎は即興の歌と踊りで行進している。

粗大ゴミの中に、千恵はまた花が終わつただけで捨てられている胡蝶蘭を見つけた。胡蝶蘭は、花が「蝶が飛ぶような形」と形容されるから胡蝶の名がある。女性器に似ている、とスケベな顔をするおじさん園芸家も多い。だからバタフライ・オーキッド（蝶の蘭）と言うのかと思いきや、それは東洋だけで、英名はモス（蛾）・オーキッドらしい。胡蝶蘭、という雅びで妖しい響きの方を、千恵は愛している。学名ファレノプシスは味気ないしね。

この子の胡蝶は終わったばかりなのだろう。根と葉だけの生き物は、花しか用のない人から見たら、何もないように見えるのかも知れない。こつちが本体なのに。花を愛する人は、花以外の時期の本体を、それ以上に愛するものだ。花しか見ないのは、調子のいい時期だけしか認めないにわかファンと一緒だ。全部を愛するから、花を喜べるのだ。この子にもう一度胡蝶が飛ぶまで、うまく育ててもまる一年かかる。

「拾いなよ。病気とかは大丈夫？」

耳を疑った。司郎がそんなことを言うなんて。毎度毎度胡蝶蘭をレスキューしてくる千恵に、「欲求不満の花が咲く。不満げの花が窓に咲く。不満げ咲く道恨み道」と即興の歌を歌う司郎とは思えない変わりようだ。

葉の裏と健康な根を確認する。カイガラムシもない、モザイクウイルスにも侵されていない。

「帰りに拾う。重いし。……なんか司郎、変わったね」

「そう？ 一緒だよ」

再び司郎は、ランチ、アンド、映画！と歌い出した。今日はいいいランチと映画を引く、と千恵は思った。司郎に幸せな一日をあげたかった。司郎の「ランチ、アンド、映画！」の合いの手に「リベンジ！」と千恵は入れた。「ランチ、アンド、映画！」「リベンジ！」「ランチ、アンド、映画！」「リベンジ！」と、端から見たらバカに見える行進をした。

司郎が鳥取砂丘に一人で行った、と聞いたのは、結局いつものパスタ屋に決めて、注文を聞き終えた時だった。

「ずるい！ 一人で行くなんて！」

と千恵は憤慨した。

「え？ いたでしょ？ 四十九日までは魂がそこらへんに漂ってるって坊さんに聞いて、慌ててちー坊の写真持って。仕事忙しくて、結局俺ら新婚旅行行ってないじゃん。だから一緒に行こうと思っつき。京都だって回ったじゃん。ちー坊の下宿の前にもチャリンコ漕いでいったじゃん」

「あ。……いたよ私。いた。涙が出た」

千恵は話を合わせた。

「俺だって号泣しながら自転車漕いでたよ」

鳥取砂丘。このことばを聞くだけで胸がときめく。おそらく幼い頃からのすりこみと、大学女子寮時代のルームメイトとのすりこみと、ふたつが混ざっている。

京都の大学で過ごし、司郎と出会っても、司郎はしばらくはずっとゼミ友達だった。ある日、「京都でつきあうカップルは、いずれ鳥取砂丘へデートに行く」という神話をルームメイトから聞いたとき、そのロマンチックさに二センチぐらい板間から浮いたものだ。東京のカップルにとっては、デイズニールランドや古くは不忍池がそれにあたるだろう。それ以外の土地でも、それぞれに〇〇湖や△△施設などがあることは想像できる。京都にきたからには、きつと有名な××寺や△△神社がその「聖地」なのだろうと想像していた。何百年前や千年前からある場所へ若いカップルが詣で、そこに住む神に報告するのだ。私たち、カップルになりました。その存在をお許し下さい。よし許す。永遠に栄えよ。こうして太古の魂と通信を交し、時をつなぎ、連綿と続く縁の中に参加するのだ。実際、我が大学の学生たちが詣でる定番はいくつかある。最も近い吉田神社（節分の発祥の地として有名。節分祭で豆をぶつけられる鬼役は、たいていウチの学生のバイト。星の数ほどある劇団員のことが多い）は、二人きりになるには手っ取り早い。秋の紅葉なら詩仙堂か東福寺、哲学の道だろう。鈴虫寺もある。しかし、そんな妄想を軽く飛び越える、千年単位のスケールよりも遙かに太古の、砂丘とは。所詮は人のつくりだした神という概念や、建築物や人工の庭だろう？と頭を殴ら

れた思いだった。人類がいてもいなくても、そこは砂漠だったのだ。人類とは関係ない砂の丘。そこに神がいなくて、どこにいるのだと思った。砂漠は死の世界だ。生きものはいない。死だけが横たわる。無と静寂と夜と昼と風だけが永遠に続く、その絶対的場所こそが、神のいる場所なのではないか。

そんな話をその後司郎にしたら、「サハラ砂漠をイメージするのは誤りである。デカイ砂浜をイメージせよ。観光用にラクダを数匹歩かせている発想がちやちく、ただの地方観光地にすぎない。『砂丘』という言葉に酔うだけだ。実際は二三十メートルの砂の丘で、その向こうはベッタベタの日本海。北風が強くて出来た、巨大な砂の吹きだまりに過ぎない。何で知ってるかって？ 関西では林間学校とか遠足で、小学校か中学か高校かで必ず行く場所なんだよ。奈良の東大寺とか若草山とかと一緒にだね。ほんと期待外れにがっかりする」と一蹴どころか全否定された。

だから、司郎と恋人関係になったのち、「ひと目鳥取砂丘を見たい」と言ってもそのロマンは理解されなかった。京都のカップルは皆砂丘を目指す、というロマンも理解されない。第一、クルマで行くには朝イチで準備せねばならず、早朝四時に迎えにきて男が運転、女は助手席で爆睡、砂丘は熱いし、意外と小さいし、他になにもないから同じ道を帰ってくるだけ、というリアルな話をルームメイトから聞かされたはいた（そのルームメイトは三回別の男と詣で、全員と別れた）。第一その前に司郎は免許はない。電車でいけばいいじゃんと言っても、泊まりでいくことになる、と貧乏学生司郎は一蹴した。

そんな話はとくに忘れられた、と思っていた。千恵自身も東京に出てきた司郎について来て、司郎の仕事が大忙しになって、蘭とか集めはじめて、いつか行ければいいや、と、キリスト教徒におけるメッカ巡礼と同程度のニュアンスの、心の奥底の大事な小箱に入っていた「聖地」だった。

どうしてそんなこと覚えててくれたの。わたしの魂を、「行けなかった」聖地へ連れてってくれたの。

「でもやっぱ鳥取砂丘は、リアルだとなんかこんだけ？って感じになるよ。それでも、きみといつか行かなきゃいけない場所だったから」

「……………ありがとう」

「京都にも寄ってき、ちー坊の住んでた部屋さ、今誰も住んでなくてさ、カーテンもかかってなくて、窓際に大家さんの掃除で使われたと思われる洗剤が置きっぱなしになってさ。…………その窓に、いつものように小石拾って、投げて、コンってしてみたけど。そうすればいつもちー坊が窓をあけて、ダダダダダって階段下りてきて一階の扉がカチャって開くの。」

誰もいなかったよ。窓も扉も開かなくて、勿論ちー坊もいなかった」

司郎の孤独が、あまりにもリアルに想像できた。

「でもさ、まさか広川さんと再会出来るとは思わなかったよ。まだ京都で芝居、続けてたのはね。あの頃の人はみんな京都出ていったのにな。俺一人じゃあんな偶然引けないよ。あの再会は、ちー坊が引いてくれたんだよね？」

「広川さんって……あの、広川弓美さん？」

広川弓美。私と出会う前からの、司郎の憧れの人。一年先輩の同い年（司郎は一浪）な、微妙な関係だった。京都には星の数ほどある学生劇団の、いつもどこかに所属しているジプシーのような女優。司郎が会いにいきたいって、わざわざ私を連れてった。面白くなんかあったけど。

「劇団辞めて独立したんだよ。自分で書いた一人芝居なんだ。相変わらず、空気が凜としてさ」

と彼女の芝居の物まねをした。

「暗い暗い川を、一人で下るようです。しかし私は、さかのぼる必要があったのです……」

「あの人の芝居、辛くさくて嫌い」

芝居に連れてかれた時も、なんだか千恵はそう言ったと思う。

私のいない司郎一人の未来に、第三の登場人物が現れた。

他の女が。

5

久しぶりに二人で見た映画は面白かったし、帰りに蘭を拾わなくちゃいけないし、司郎の思いつきで「銭湯に行こう」となって、大きな風呂は気持ち良かった。「銭湯体勢をとれ！」と片膝をつき、洗面器でお湯を背中にかける格好で「カコーン」と言うのは司郎の定番ギャグだ。一回笑ったら、司郎はいつまでも笑わせに来る。

風呂上がり以外のベンチで千恵と司郎は待ちあわせる。司郎が半分残した、缶の冷えたポカリを千恵が飲み終わるのを合図に、「ヒバ！ 風呂！」とサインを出してポーズを決める。京都の学生時代から、この習慣は続いている。あのときは二人で自転車を漕いで銀閣寺湯に行き、そのあと白川通りを下って真如堂前の歩道橋の下、すじ肉うどんをしょっちゅう食

べた。青ネギとおろししょうがと肉のダシのハーモニ―がとろみの宇宙をつくり、その匂いですする細麵がよくあった。ダシは毎回全部飲み干した。突然味が変わって店が潰れるまで、何度も何度も通った、生涯ベストワンのうどんだった。潰れたあとは本屋の銀林堂で待ち合わせ、白川通りを上がって蛸焼きの蛸安で、高倉健にそっくりな大将が焼く梅蛸焼きとビールをつまんだ。司郎が千恵の部屋に泊まりに来るときだけの贅沢だ。その頃の小さな幸福感と銭湯の記憶はひとつである。だから司郎と千恵は、その記憶ごと銭湯で幸せになる。

千恵は、いまだに司郎のかいた落書きを手帳に挟んで持っている。昼寝をしているときに、司郎がJ丘のカフェで仕事しに出て行ったときの置き手紙だ。機嫌が良かったのか、司郎がイラストを描いていた。「仕事終わった!」↓「風呂セットもってち―坊登場!」↓「銭湯でプハー!」って言ってるイラストだ。わざわざ乳首までかいてあった。たとえマンガでも、自分のことをかいてくれて千恵は嬉しかった。

帰り道、千恵は刺を含めて司郎に尋ねた。

「で? 広川さんそこには通ってるの?」

浮気をしている、というのは厳密には違うけど、千恵にとっては怒りの感情がどうしても先に来る。

「何を言ってるの。二回、芝居見に行っただけだよ」

「えっ。それだけ?」

拍子抜けする。そういえば、司郎の「狩人」(獲物は女)としての腕はダメダメだった。浮気がしたい―って私に言うぐらいだ。「浮気祭り開催! (春のパン祭りのように)」が司郎の夢だとバカな踊りをしながら言うぐらいだ。浮気も何も無い司郎の誠実さは、「結果的誠実」であると司郎をバカにし、「結果的一穴主義」と呼ぶぐらいだ。私から告白するまで、私が好きだって全く気づいてなかったし。

「あと喫茶店で何回かしゃべって、酒飲みに行こうって言ったら芝居の稽古があるんで、って断わられた。脈は、多分ないよ」

「ないかも知れなくても、芝居来て、って言われたら京都までいくんでしょう?」

「……うーん、いくかもね」

ムカツク。司郎は私へのデリカシーとか、そういうのが全くない。裏表がなくて嘘をつけない、と言いかえれば正直という美德にはなるのだけど。嘘をつかない、というのは千恵の信条の中でとくに大事なものだ。恋愛の神様は、嘘と正直さで、二人を試すのだ。

J丘の銭湯からの帰り道、長い直線の住宅街。「ビバ風呂!」から一分二十秒で千恵は不機嫌になる。

「あ、呪い干しでしょ？」

と、思い出したように司郎は言った。

「なに？」

「籐のタンスに入れたもの。そんなもの入れんなよ。俺号泣しちゃったじゃねえか」

籐のタンスの一番上の引き出しをあけて、入っていたものを答えて、と司郎に言っておいた。ほんとうに「未来の世界」があるなら（現代科学と北村は否定するが）、未来に二人しか分らないメッセージを送れるかも知れない、と千恵が入れたものだ。

入れたのは、ひとつのハンガーに司郎と千恵のパンツを洗濯ばさみで止めたもの。パンツ大明神、めおと干し、との千恵の願掛け。黒魔術と揶揄した司郎がたった一回だけ言った、二人にしか分らない暗号。

千恵の「通信」は、未来に届いた。狂言や妄想の可能性は消えた。司郎は「未来の世界」にいる。そこでは私は死に、司郎が弓美さんと、何度か会っている。

千恵は弓美の連絡先を調べ、会いたい旨の約束を取りつけた。

6

単独、千恵は新幹線に乗り、京都に来ていた。広川弓美の現在所属する小劇団の稽古場へ向かう。

その前に、かつて自分が住んでいた下宿に寄り、前に立ってみた。京都を去るときにもいた玄関のゴムの木は、何度もあっただろう冬の霜にも耐えて元気で、隣家の羽衣ジャスミンも相変わらず元気だった。二階の千恵の部屋だったその部屋は、まだ入居者がいないようで、司郎が言った通り窓際には洗剤が置き忘れてある。小石を拾って、窓に投げる真似をした。私は窓をあけて階下で微笑む司郎を見たけど、司郎から見た景色はこんなだったのか、とはじめて思った。

「私は、どうやって死んだの？」

核心をつく質問を司郎にした。どうやって死んだのか分れば、死の未来は避けられるかも知れない。司郎はそれに答える代わりに、あまりにも哀しすぎる瞳を浮かべ、喘息の発作を繰り返すだけだった。

「思い出したいくない」

発作がようやく収まったあとに、絞り出すように司郎は呟いた。まだ見えている「黒一色」の未来の、全容はつかめていない。

「京都へ行く」という相談を、北村さんにするんじゃないかった。弓美と司郎をひき合わせる、という千恵のアイデアを、北村は激しく否定した。

「弓美さんは未来に起こる出来事を知らないのだろうか？ 彼女の人生の時系列が狂うことになる！」

タイムパラドックスが起きて、パラレルワールドに世界が分裂して、因果の破綻が阻止される、という説がある。パラレルワールドが生まれてしまえばいいのに。私が死んでる世界と、死んでない世界。太ってる世界と太ってない世界。二人に子供がいる世界といない世界。私はそのどちらにも行けるのかしら。それとも、二つに分裂するのかしら。ピカーツでSF映画みたいに閃光が走って、全てがまるくおさまるように決着するのかしら。

劇団の稽古場は、古いレンガ作りの建物の地下だった。京都には、こんな古い「学生会館」がいくつも残っている。明治とか大正モダンとか、帝大の匂いがする。こういうところばかりをロケ地を選んだ、学生がつくった8ミリ映画を司郎と見た事がある。ウィーンという設定で、バッハだったかモーツアルトだったかの生涯を、何故か日本人の大学生がモーニングを着て、何故か日本語で演じていた。珍妙な映画の内容より、「他にこの趣を理解している人がいる」ことが嬉しかった。京都には、昔ながらの日本家屋と、現代のマンションと、近代の香りが混在している。

約束の時間にはまだ早く、庭に停められた学生たちの自転車を懐かしく思う。後輩に譲った私の赤い「伍右衛門号」は、まだこの古都のどこかを走っているだろうか。

「お待たせしました」と、広川弓美が現れた。短い黒髪に、黒い大きな瞳が、稽古あけの上気した頬で息を切らせている。美しい顔だちと、地味なジャージ姿のギャップが印象的だった。普段は冷たいとさえ思われる白磁のような肌、紅潮の色気を足されていることに本人は気づいていない。三十歳をこえているのに、この少女のような色気はどうだ。司郎がこの場にいたら「たまらん」とよだれを垂らすだろう。

微妙な知り合い同士のぎこちない挨拶を経て、弓美は核心の質問をした。

「メールでもらった件ですが、よく分らなくて。……突然、東京に来てくれと言われても。風間くん、何が起こっているんです？」

上手く説明が出来ないし、回りくどくなるのを千恵は避けたかった。昨日の司郎の真似を、千恵は真似た。

「暗い暗い川を、一人で下るようです。しかし私は、さかのぼる必要があったのです……」  
弓美の大きな黒い瞳の警戒色が、とまどいの色に変わる。

「どうしてその台詞を知っているの？ ……まだ、誰にも見せていない原稿なのに」  
弓美の話によると、彼女は今の劇団内の人間関係に嫌気がさして、独立することを考えているらしい。フリーで女優をやり、公演毎に劇団を渡る手もあるけど、一人の芝居をやってみたいと思っている。その台本を、最近こつこつと書きはじめたばかりだと言う。千恵の台詞は、その台本の第一場の締めだった。

「私が途中で挫折しているその台本は、未来には完成していて、しかもその芝居を、風間くんは見たっていうのね？」

「ほめて、ましたよ」

「……ありがとう、って言っただいのかしら」

そこへ、劇団主宰の演出家、藤岡が煙草を吸いに中庭へ出て来た。弓美は彼に尋ねた。

「次の公演が決まるまで、私はどれくらい待てばいいの？」

よくあることだが、藤岡の新作台本は完成していなかった。今日の稽古は仕方がないので基礎とダンスレッスンをやっただけだ。弓美の言葉に刺があったのはそのせいだ。藤岡は、煙草を挟もうとしていた指を二本、そのまま彼女に見せた。

「……二週間なら」

東京行きを弓美は決意した。それが長いのか短いのか、千恵にも分らなかった。

弓美には、「未来の」弓美を演じてもらおうと思っていた。司郎は今を「夢の中」だと思っている。夢の中で好きな人が登場すれば、司郎の心も開くかも知れない。私が直接「私がどうやって死んだ？」と尋ねるより、効果的に未来を探れるかも知れない、と千恵は弓美に説明した。

劇団「夜明け前は最も暗い」は、主宰の藤岡が、大所帯のコント劇集団「劇団7」から分派して立ち上げた。大手なりの小回りの利かなさに不満を持つ役者や、本体と兼務しながら実験場として捉える、個性ある役者を抱え、一時は京大吉田寮食堂跡（この界隈の学生芝居



のメッカ)やブンピカ(文学部控え室の略)を毎公演全日満席にした。

主宰の藤岡は、弓美の恋人であった。否、恋人、彼氏というには長過ぎる付き合いかも知れない。同じ理想を持つ同志だと確信したときもあった。彼のミューズとなっていた時期は、藤岡もばんばん新作を書いた。いつの頃から違和感を感じはじめ、それでも妥協の範囲で同じ方向を向いていると思っていた。演出家と女優がデキてる、と文字で書くと馬鹿馬鹿しい。演出家と女優ではなく、私とあの人、という認識のつもりだった。一人芝居の台本を書きはじめた頃、機を一にして彼に若い女の「愛人」が出来た。弓美は看板女優だから、彼女は浮気相手というより愛人呼ばわりされているのを知っている。大学一回生の新人で、梨花という。

京都のこの界限には数えきれないほどの小劇場の劇団があるが、大抵「書く人」はその集団の中で一人である。小さな芝居の集団というものは、演出が一人と、その他の沢山の役者(兼スタッフ)で構成される。狩りの集団に近い、と弓美はいつも思う。人類は、太古の昔からこういう小集団で生きてきたのだと想像する。リーダーのスランプや無能に幻想を抱いたり幻滅したり、周りの悪口に嫌気がさしたり、誰と誰がつきあったとか別れたとか取り合ったとか、誰が許せないとか、誰かがいなくなり新しい血が入るとか、そんな事は中世の一座でもあったことだろうし、マンモスを追う集団であったことだろうと思う。

小さな芝居集団は、今日も生まれ続け、解散し続けるだろう。大きな視点から見れば、それはひとつの波に見えるのだろうか。

小さな集団の小さな人間関係に少し疲れて、弓美は距離を取りたかった。二週間と自ら設けた期限内に、彼は台本を書き終えるかどうか、それは彼女にとってどちらでも良かった。ただ彼と同じ空気を吸うのが嫌だっただけだ。

東京の宿代は、千恵が出すと言った。隣のJ丘近くのビジネスホテルがあいていた。D駅についた弓美は、かつての旧友に会う為に、彼の妻と緑の街路樹を歩いていた。

Dにはいちよう並木がみつっつある。昭和の駅舎を再現した赤い屋根の建物を背に、半円形の噴水広場を正面に見ると、放射状にみつつのびているのが一望出来る。私たちは「左いちよう」「真ん中いちよう」「右いちよう」と名づけている、と千恵が説明した。空気が深い、と弓美は感じる。東京に出てくるとそのゴミゴミさ加減は、京都駅周辺の比ではない。ここは、いつもの京都の北白川の辺りと似た空気である。あの界限で学生時代を送った人間は、同じような所に住みたいのだろう、と弓美は千恵をすこし理解した。

歩きながら、女優さんに聞きたいことが、と千恵はたずねた。

「シナリオ上、死ぬと分かっている役者は、それ以前の場所で何を考えながら生きるの？」

彼女の奇妙な運命を指しているのは明らかだ。死ぬ役を演ったことは弓美にはない。死ぬ役というのは、役者にとってオイシイ役と決まっている。「劇的」な場面を演るのはやりやすい。感情を高ぶらせればいいからだ。ほんとうの芝居は、そうでない場面にあると弓美は思う。でもそれはあくまで、「芝居」をするうえでの話だ。

「死ぬと分っても、自分が死ぬ訳じゃないから、正直考えたことが」

と弓美は控えめに答えて、当事者意識のない自分のうかつさに嫌気がさした。

千恵は微笑んだ。

「そりゃそうか。お芝居だもんね」

それは、そうなだけけど。日差しは強く、いちよう並木の落とす深い影で、千恵の表情はわかりにくい。私は末期癌の患者に同じことを聞かれても、同じ事を平気で答えられるだろうか。

坂を上った先の、木造の大きな家。この二階部分を貸間に行っているらしく、風間夫婦の他に、もう一家族借りているほど敷地は十分ある。おとなりはそこそこの有名な作曲家さんなんだった、と千恵は自慢した。京都の鴨川より数倍大きくて深そうな、空色の川面と大きな緑の土手が坂の下に見えた。多摩川だ、と千恵は説明した。

「お邪魔……します」

「アレ？ 広川さん？ 広川さんまで夢の中にやってきたよ！」

司郎はすっとんきようなりアクションで弓美を迎え入れた。

「ようこそこの部屋へ！ 夢の中では、たいいていこの部屋なんだ。まだちー坊の生きてる頃の、ちー坊の匂いが残ってる。夢の中に来るってことは、俺は広川さんをムフフ……って、あれ、ちー坊いたの？」

「いるわボケ」

ああ、そうだ。風間くんこんな感じの会話をしていた恋人がいた。十年以上前の記憶と、ようやくつながった。風間くんは、その人と結婚したのか。

「ようこそ夢の中のこの部屋へ！ この部屋はさ、ちー坊がまだ生きてたときの部屋なんだよ。まだちー坊の匂いが、畳の中や布団の中に残ってて、蘭の数もまだこんなでさ」

「お久しぶり、です」

「久しぶりじゃないじゃん。こないだも京都の芝居、見たし」

「どう……でした？」

「すぐくよかった。切れてる。ときどき広川さんの台詞は、突き刺す。あの鋭さはなかなか

書けないよ」

「まだ……書き終えてもないから、なんか変な感じがする」

「？」

「あ、いえ、こっちのこと」

未来から芝居の結末を聞くことは出来る。しかし聞いてそれを書いたら、その物語は誰が書いたことになるのか。タイムパドックスの一種だ。弓美は聞かなかった。自分一人で書くことが、自分にとっての試練と信じているからだ。

テーブルに弓美、司郎、千恵が座ると、ひとつ席があく。司郎はその空席をさし、

「ちー坊、コバラスキーさんがロシアからいらっしやったよ」

と言った。

「？」

「えーと、小腹が空いた、の擬人化表現といいますが、冬將軍到来みたいな感じといえますか」

と弓美に千恵が解説する。

「ああ。成る程。ふふふ。ことばひとつで日常を異化しているのね」

司郎が目を輝かせた。

「ホラ！ この良さが分るレベルの人だって言ったじゃんちー坊！ 広川さんは、そこらへんのアホ女優とは器がちがうんだよ！」

異化、なんて京都の学生がアカデミックのふりをして使う言葉を久しぶりに聞いて司郎は興奮した。プロの映像の現場では、ファンタジーとか不条理とかシュールとかで適当に流される類いの概念である。千恵を失ってから、そんな言葉で遊べる高等遊民は周りにいなくなったのだ。興奮した司郎は言った。

「どうせ夢の中なんだからさ、遊園地に遊びに行こうよ！」

「はい？」

弓美と千恵は同時に口をひらいた。司郎だけがテンションが上がっていた。

「いいいやっほうううう！」

「私、やっぱ無理ですー！ー！」

「大丈夫大丈夫うううう！」

司郎が昔つくった8ミリ映画の中で、遊園地デートのシーンがあった。そこだけは別格によく出来ていた。「女の子と遊園地でデートしたくてしょうがない」という子供っぽい「夢」がストレートに描けていたからだ。千恵は絶賛したが、モテナイ男の真実を突かれた司郎は不機嫌な顔をしていた。司郎の「聖地」は遊園地なのかも知れない。

ひと通り絶叫マシンを楽しんだあと、司郎と弓美はベンチに座る。

「やっぱりああいうのは苦手」

「そう？ 大人になると逆に面白くなってきたよ」

司郎と弓美のテンションは真逆なことに、司郎は気づいていない。

千恵は北村に連絡をし、ビデオカメラと会話を録音するためのピンマイクを調達してもらった。二人きりにしたとき、司郎がなにかを話すかも知れない。なにしろ彼にとっては、「好きな人が夢に現れた」シチュエーションだ。趣味が悪いけど、千恵と北村は、物陰に隠れて二人のデートを盗聴することにした。

北村はビデオを回している。千恵はイヤホンのボリュームを上げて、二人の会話に集中した。

司郎は遠くの観覧車を見ながら、弓美に話しはじめた。

「ちー坊はさ、いや、僕の『妻』は、いや、妻とあらたまるのも変だな。あいつをうまく表す言葉がないなあ。あいつはヨメって言葉が嫌いで、『ウチのヨメって言うな』って言って、『学生時代からの古女房』と言ったら『恋女房にせよ』って言って、細君が文学的でもいいかと思ってたけど、俺は『太君』って呼んだら結局怒って。……つまり、俺にとつてちー坊はちー坊でしかなくて、人前での彼女の呼び方は考えてもいなかったんだけど……」

「あの人、とか、彼女、で続けて大丈夫」

「彼女はね、貧乏症だった。まあ実家も貧乏なんだけどさ」

イヤホンから聞こえる司郎の言葉に、「何言い出してんの」と千恵は怒る。

「学生時代は、よく食べ放題いったなあ。河原町の花きやべつとか、三条新京極のシェーキーズとか。東京来てからもバザーやフリマやボロ市によく行ってね。……彼女は小さい頃、養子に出されそうになったことがあるのね。それがトラウマになってたんだろうね、『役に立つから捨てないで』って思いに敏感なんだ。捨てられるのは、愛されなくなったからじゃないって、役に立たないから、って思っちゃうんだろうね。お前は役に立つ、というのは、お前

は愛されてる、捨てない、ってことと同じなんだ。彼女は、だから、弱いのに、張り詰めた」

「……」

「そこがきみの芝居に似てるんだ」

「……そんなこと、はじめて言われた」

司郎は弓美を口説きにかかっている、と千恵は思い、止めてやろうかと思う。司郎は続ける。

「あいつ貧乏症だからさ、フリーペーパーとかティッシュとか絶対もらうし、捨てられたものとかよく拾う。花が終わって捨てるだけになった花屋の『どなたか育てて下さい』って鉢とか、蘭とか、古本もそうで、そんなんで溢れた部屋は、ご覧の通りで」

「素敵な部屋だったわ」

「俺もさ、『大学で拾った』って言ってたよ。モテナイ男が、大学の生協の『誰でも持ってってください』コーナーで泣いてたのを拾った、って」

「ふふ」

「俺、そういうのほんと嫌いだっただ。あいつのおばはん臭いとも嫌い。紙袋とか割り箸とかパチンコでもらった飴とか、そういうの貯めこむのも嫌い。部屋とか引き出しを、ティッシュの箱をくりぬいたやつで整理しようとするのも嫌い。ズボンだって何度もつぎはぎして、肌触り命だから綿の古いシャツばっか着てて、勿体ない、まだ役に立つ、ってのは分るけど、部屋にモノが多すぎる。あの部屋にはモノが多すぎて、……だから俺は何一つ捨てられないんだ」

「……」

「まだ、信じられないよ。ちー坊が帰って来て、あれがない、捨てたでしょって言われたくない。勝手に場所動かしたら使にくいだろうから、ひとつもモノを動かせない。二人で暮らした部屋のまま、住んでいたいんだ。でも、俺には広すぎるんだ」

弓美はどう返していいか分らない。

「ごめん。俺、広川さんが好きで、口説きたいと思ってるんだけど、こんな話しちゃう。ただ寂しいだけなのかも知れない。ちー坊に匹敵する知性と丁々発止したいけど、周りにいなくて、きみとしゃべりたいだけかも知れない。……せつかく夢の中なんだから、なんでも出来るはずなのに」

弓美は一拍置いて、ゆっくりと答えた。

「本音が、分かってよかった。ただ口説いてきただけだったら、私はあなたを軽蔑したわ」  
司郎はしばらく黙って、視線を遊園地に戻した。

「次、あれ乗ろう！」

イヤホンのポリウムを下げた北村が、カメラの三脚を畳んで移動の準備をしている。この日、司郎の本音が聞けたのはこの時だけだった。千恵は、いつそ司郎が弓美をストリートに口説いてくれたほうがましだと思った。

9

その夜は、千恵が手料理をつくって、弓美と司郎と三人で食事することにした。D 駅のすぐそばの大きなスーパ―、P へ買い物に出かける。ちょっと高いが、品揃えは流石だ。安さで手軽ならJ 丘のT やP だが、高くてもいいものが欲しい時はD の駅前だ。

「夢の中でちー坊と広川さんと3P だぜイエーイ」

と司郎は自作の歌と踊りの最中だ。

「バカなこと言っていないで、果物選んで来て」

「ラジャー！ ブラジャー！」

司郎のアホな返しに千恵は苦笑する。肉のコーナーに二人で来たとき、弓美が口を開いた。

「なんか…:ごめんなさい。うまく彼と話せなくて」

「まだ初日だし。先は長いし。なんかバカばかりやってる感じですいません。でもやるべきはやる男なんですよ」

そもそも千恵と司郎の出会い、大学一回生の学園祭、ゼミの講演会だ。千恵が同期の永橋くんに面白いゼミがあって、学生たちが議論してるから、と誘われ、そのイベントに誘われて「議論」というものをしてきたのだ。最初はたしか、中絶の話で反対派に回った。「役に立つから捨てないで」とあの頃から千恵の主張は一貫している。殺される子の立場に、千恵は立った。司郎はその中ではさして目立つ存在ではなかった。第一タイプの顔とガタイじゃない。あんなちんちくりんは基本対象外、背景枠。ゼミでカラオケにいった時、ようやくはじめて「やるな」と思って、良き友人枠へ昇格した。

三回性の秋、学園祭が近くなった頃。大学近辺には立て看板が無数に出て、メインストリートは左右は色とりどりに埋まる。その中でもひととき大きな（あとで聞いたところによると、ベニヤ四枚分の）立て看板を立てて、脚立の上でペンキ職人よろしく絵を描いている男がいた。ふつう完成した看板が立つものだが、バカが一人いる、と思ったらゼミの風間さん

だった。そういえば映研で映画撮ってるって言ったのを思い出した。だいぶ前に、当時の彼氏とエキストラで出てあげたやつ、今頃完成したんだ。何でかいてんの、って聞いたら、場所取り先行という見切り発車だそうな。監督が立て看の絵まで描くのか。いや、風間さん絵描くのたしか上手かったし。後輩の戸棚に水墨画をペンキで描いてあげてたのをみて、すごいと思ったのを思い出した。

蕎麦打ちとか料理とか、端で「出来上がるもの」を見ているのは楽しい。最初はそんな感覚だった。授業に出る度に、いつも彼は黙々と描いていた。晴れの日も雨の日もいた。雨の日にはいたっては、傘をさして脚立に座り、にじみ表現すら雨を利用していった。ちょっと描きこみ過ぎて汚くなつたな、途中あたりの水彩っぽい感じがのが好きだったけど、と素直に感想を述べたら不機嫌そうな顔をしていた。缶コーヒーフたつ差し入れて、十一月の寒い夜一緒に飲んだ。あの看板のところに行けば、いつも風間さんがいた。絵の具は赤青黄の三色と、黒白しかなくて、少ないよと言ったら、「原理上全ての色はつくれる筈」って豪語していた。その大きな看板は、弓美も知っていた。結局その映画は、三百円で一回見た。遊園地のシーンをほめたら、不機嫌な顔をしていた。

学園祭が終わって、大学はお祭り騒ぎから平常運転に戻った。苦勞してつくられた看板たちは、一枚たりともそこになく、黙々と看板を描き続ける彼の横顔もそこになかった。

ゼミの打ち上げでカラオケに行った時、「亜麻色の髪の乙女」の表示を見て、彼と私が同時に立った。彼はヴィレッジ・シンガーズ版（68年のオリジナル）、私は島谷ひとみ版（2002年のカバー）を入れていた。酔っ払っているから、二人で歌った。彼はムーディーな低い声で。私はダンサブルに。

「亜々麻色のうう（司郎）」「長い！髪を！（千恵）」

「風がうやあさしく（司郎）」「つつむッ！（千恵）」「爆笑（ゼミ一同）」

「乙女は胸えにい白オイイイー花束うおーー（ユニゾン）」

最後まで二人とも自分の曲だと譲らなかつた。へんてこなセッションで、それが千恵にとって恋のはじまりだった。

そこまで話し終えて、千恵は「で、どこがいいの？」と言われるだろうと思った。司郎との感情の噛み合いを第三者に説明するのは難しい。

「司郎はね、基本的なスペックが高いのよ。実家に帰ったら話がとろくてイライラして、はじめて気づいたの。普段の頭の回転がはやいのよ。話が早いのは重要なこと。全部分ってる

ってことだから。繊細な涙を流すし、義憤に青い炎を燃やすし、言葉に敏感で、天才肌で、ベルベットののような感触で……」

弓美は黙って聞いている。大きな黒い瞳。世の男性がこの美しい瞳に恋焦がれるのも少し分る。

「長いこと付き合えば必ず良さが分る。自分で毒を出してるから虫もつかないし、結果的誠実で。だから……だから、優良物件なんです」

千恵は、これほど司郎のいいところを並べたてているのが何故なのか、自覚していなかった。だが、次の瞬間出た言葉で、自分の真意を理解した。

「私に万が一があったら……その後の司郎を、お願いします」

涙が止まらなくなってきた。私は、そんなことを無意識に思っていたのか。

「熟れ熟れ中年女の欲求不満の如き桃、はっけん！ 食べごろギリギリですぜグへへ」

空気を読まずに、そこへ司郎が白桃をみつつ持って帰ってきた。千恵は涙をぬぐい、今夜のデザートを受け取る。

「あっ」

タイミングが合わず、そのひとつを床に落してしまった。ぐちゃり、と一部が潰れてしまった。果汁が飛び散る。口に含めばさぞ甘かっただろう。

「ごめん」

「……しようがない。時間が巻き戻る訳でもないし」

床の桃を拾おうとした千恵の手が止まる。デジャヴではないが、思い当たる節があった。

「どうしたちー坊？」

「あるよ」

「何が」

「時間を巻き戻す方法」

「は？」

「意識の、時間を巻き戻す方法！」

「何？」

「逆行催眠だよ！ 逆行催眠！」

「逆行催眠……って、あの、ネバダ州の夫婦の記憶のなくなった空白の時間を調べたら、UFOに実はさらわれてて、とかいうやつ？」

「そうそう！ 三才、二才、一才、0才まで戻って、試しに「一才、二才……って遡っていったら、前世の記憶が出て来て……ってやつ！ 巻き戻せばいいのよ！ 意識を！」



「逆行催眠」という言葉は本来なく、おそらくテレビ番組（不思議ミステリー系やUFO番組）の造語だと思われる。心理療法的には逆行催眠という。実は、催眠術がどうやってかかるのか、科学的には分っていない。偽の記憶や夢で見たことや思い込みが脳内に蓄積されていて、それが真の記憶と誤認する場合もあるそうだ。

人の心はあまりにも辛い出来事があったとき、壊れたレコードのようにそこだけを再生し続けることがある。フラッシュバック現象だ。思い出したくなくても脳内のスクリーンにうつされるのだ。もつと辛いとき、人の心は意図的に「記憶から消去する」らしい。「なかったことにする」力が強制的に働く仕組み、ということまで分かっている。なかったことにして普段を生きていくだけの平常運転を取り戻すのだ。だが本当に忘れている訳ではなく、意識下にはそれがわだかまり続け、忘れている本人の頭在意識を圧迫して心身に影響を与える。逆行催眠は、本人ですらアクセス出来なくなっている記憶領域に潜ってゆく方法論である。逆行催眠をかけて本人の「無意識」と対話して、そのような記憶が封印されていることを突き止めるのだ。覚醒時で思い出すにはあまりに辛い記憶の場合、本人すらその記憶の存在に気づかない。逆行催眠で掘り出したその記憶の存在に気づかせることで、脳内のバランスを回復しはじめる端緒にするのである。前世記憶やUFOアブダクション（誘拐）などは、テレビのヨタ話に過ぎないが、と事前に北村は否定した。

催眠療法、というのは医師の治療と関係ないから資格がないのか、と千恵はひとつ勉強した気になった。「治療」というのは医師の行為で、「療法」や「健康法」は医師の領分ではないという厳密な区別もはじめて知った。

山崎催眠療法院と看板が出たここは古い木造の建物で、千恵は近代的なビルより、昔の診療所っぽい風体で落ち着いた。

「どうする？ 俺が実はUFOにさらわれたりしてたら」

「そのUFOを打ち落とす」

庭の手入れと古いステンドグラスを見て、千恵は少し安心した。入口の下駄箱が小学校のに似てたから緊張がほぐれた、と司郎にあとから聞いた。

二人は診療室に通された。北村は既にビデオカメラをセットし、暗視モードにしていた。電気を落し、ロウソクの炎だけで催眠状態に誘導してゆくためだ。療法士と司郎二人を残し、北村と千恵は部屋を出た。

廊下のつきあたりには待合室があり、小さな温室があった。食虫植物の花を千恵ははじめて見た。毒々しく美しい色だった。

メトロノームの一定のリズムが、ゆっくりと場を満たしはじめる。診療室は暗く、ロウソクの炎だけの空間になり、インドっぽいお香が焚かれている。心臓のリズムがメトロノームのリズムに落ち着くように、誘導されてゆく。体が沈むほど深いソファーに座らされた司郎は、意識も沈んでゆく。

待合室の小さな温室では、自動噴霧器が霧を出していた。いいなあ。こんなウチにあつたら、蘭の好む空中湿度がつくれるのに。今は洗濯ものの部屋干しで維持してるからなあ。

「しかし、あらためて黒川さんと風間が結婚してたとね」

北村が口をひらいた。事態が急すぎて、そのような世間話をしていなかったことに千恵は気づいた。

「一緒に、東京出てきたから」

「俺が知ってるのはさ、ゼミで仲よさそうにしてる二人だったから、ああ、ぐらいには思ったけど」

「意外じゃなかったってこと？」

「そう」

噴霧器が、霧をひと通り撒き終えた。

「まだあのこと覚えてる？ 俺が君を好きだって言って、振られたこと」

それ、今言うか。それこそ「なかったこと」にしてきたのに。人は放っておくと、過去を蒸し返す生き物なのだろうか。

「それ聞いてどうするの？」

北村は千恵を黙って見た。

「私にとって、あなたは夫の親友で、主治医だと思っています」

一線を引いて、千恵は視線を食虫植物に戻した。虫を放りこんで溶かしてしまいたいと思っ

突然、廊下の向こうから司郎の悲鳴が聞こえた。

千恵はまっ先に走りドアを開けた。強い喘息の発作を司郎は起こしていた。声が出ず苦しむ背中を右手でさすりながら、左手でかばんの中の吸引器を探り当てる。ひと息吸わせる。辛うじて声が出るようになった司郎は、再び泣き叫ぶ。

「もう嫌だ！ もう嫌だ！ なんていなくなつて気づくんだ！ あれが幸せか！ お前がいらない人生なんて……ない！ ないよ！ 自分の半分をもぎとられた……！！ ちー坊！ ちー坊！ ちー坊！ ちー坊！ 一生分君の名前を呼んでも、何も起こらない！ なんでお前、京都へ行つたんだ！」

「大丈夫、私はここにいます！ 司郎は一人じゃない！」

千恵は、暴れる司郎を抱きしめて落ち着かせようとする。

「何が起こった？」

と北村は冷静に催眠療法士に尋ねる。

「……駄目でした。彼の深層心理に拒否されました。抵抗が強すぎます。よほどの強い力で、あの日に戻りたくないと。近づけば近づくほど抵抗は強くなり……」

「あの日って」

「奥様の、亡くなられた日」

少し想像すれば分ることを、どうして考えなかったのか千恵は後悔した。記憶を遡ることは、その日を追体験させることなのだ。

「ごめんなさい。……中止しましょう」

これ以上司郎に苦痛を与えるのは、本意ではなかった。人の死を「時が癒す」とよく言われているのは、ただ忘れるからではないか、と千恵は思った。

家に帰って、千恵は司郎のシャツを脱がせうつぶ伏せに寝かせ、ラベンダーオイルで背中マッサージをした。気が向いたときにやってあげる、千恵のスペシャルだ。喘息のときは、背中の上半分、肩甲骨の間の背骨の左右が特に凝り固まる。ここをほぐしてあげると司郎は喜ぶ。肺癒という名のツボだと、古本のツボ本で勉強した。

司郎はツボの高手だった。繊細な手の感覚を持っているからだろうか、的確に肩こりを治してくれた。寝る前の司郎の按摩は本当に至福だった。あまりにも眠りに落ちすぎて、起きたら寝たことを忘れて司郎に「時間どろぼう」と言ったこともある。司郎が仕事で疲れてい

るときに、千恵はなるべく按摩をしてあげた。

「あああううう。久しぶりのちー坊あんまだよううう。コレだよコレえええ。ずっとなかったから体調狂うよう」

「おえーって感じがなんかたまってる。おえおえが列をなしてやってくるうう」

ラベンダーの香りを足すのは、千恵の工夫だ。ぐっすり眠れるハーブの力を借りるのだ。

「現代の魔女もハーブを使う」という雑誌の切り抜きを、千恵は保管している。

背中全面、足、手、肩。全身の凝っているところをほぐしてあげる。私がやってあげられていない、未来の分までやってあげなくては。

「ねえ司郎」

「なに？」

「私は、京都へ行って死んだの？」

司郎は答えなかった。答えずに寝息をたてていた。千恵は布団をかけてあげ、司郎の髪を撫でた。

ひとつだけ、手がかりが与えられた。あのとときの司郎の叫びを、千恵は反芻していた。おそらく、私は京都で死んだ。だとするならば、私は京都へ一生行かなければOKだ。

11

二人の部屋で、司郎と弓美が談笑している。千恵はその二人に気を使つてか、台所の四畳半に引込んだままだ。北村が回線に手を加えて、監視カメラの映像を台所でも見られるように小さなモニタを置いた。が、小さなテレビの中で司郎と弓美の笑顔を見るのは気が進まない。すぐに台所は千恵の籠城空間になった。本や鉢植えが持ち込まれ、更に拾ってきた鉢植えが増えてゆく。モニタの音声は切つてある。

司郎が他の女を口説くところなんて見たくない（実際、口説ける力なんてないだろうけど）。千恵はヘッドホンを被り、音楽を流す。流れてきた名曲「モルダウの流れ」が、千恵を遠くの世界へ連れてゆく。深く大きな川の流れは時の流れ。ゆつくりと、滔々と、時はどこからどこかへ流れてゆく。「死の状況」は、あれから司郎は話さない。「いつ」という時期も分らない。「病状」がどれだけ進行して、司郎が現在からどれぐらい離れていつているのかも不明だ。一年経った？ 何年も経った？ 鳥取砂丘の話が出た時は、四十九日のあとぐらいらしかった。その後、弓美さんとはどうなってるの？ 私のことは忘れてるの？ 司郎は、現

代に帰ってくるの？

箆城グッズの中には、カエルグッズ達も参加している。十年以上暮らしてきて、徐々に集めたナイスデザインのカエル達。千恵の白魔術が効いたから、きつと司郎は事故にもあわず、毎日千恵の元に帰ってきたのだ。今度も、司郎を無事帰してください。お願いします。

開け放した窓から、ゆるやかな風が入る。レースのカーテンが揺れる。死ぬこと自体に千恵はそれほど恐怖は感じていない。人はいつか死ぬ。千恵にとって辛いのは、司郎との別れのほうだった。時の流れの中で永遠にはぐれてしまうのだろうか。想像したら辛くなって、涙が出てくる。これまで我慢してきたせいかな、あとからあとから、ぼろぼろと涙が出てきて止まらなくなった。

ふと、千恵は自分が背中から抱きしめられているのに気づいた。ヘッドホンを外して現実世界に帰ると、司郎だった。

「ちー坊の飼い方マニュアルに書いてある。涙を流しているときは、すぐには訳を聞かないこと。うまく説明できない感情だから涙を流すしかないのに、そこを追い詰めてはいけません。気持ちを整理出来るまで、黙って待ってあげてください。できれば、うしろから抱きしめて、大丈夫だよ、って安心させる。『たとえ世界中を敵に回しても、僕は君の味方だよ』って安心させてあげるんだ。ちー坊はね、我慢しすぎなんだよ。痛いときは痛いつて言っていないだよ」

「……しーちゃん」

「……ちー坊が生きてるときは、上手く出来なかったけど、ちゃんとやってあげたかったんだ。……うまく出来たかな」

千恵は小さくうなづいた。「……出来た」

風に吹かれるレースのカーテンが、波のうねりのようだった。外したヘッドホンから、「モルダウ」の残りが流れていた。川は流れる。プラハの街を流れる大きな川と時の流れを、ベドジフ・スメタナが五線譜にし、それを誰かが書き写し、それを誰かが演奏して再現し、後代へ辺境へ流れてゆく。極東の島国の、NHK交響楽団の昭和何年かの録音が、二十一世紀のヘッドホンから流れその分の時の流れも奏でていく。小さな人間とは関係ないほどの大きな川の流れ。川は流れていることすら知らないのに、その流れる時の中で、ほんのわずかな間、二人は抱き合っている。この一点を生じさせる力を、人は運命の力と呼ぶのではないだろうか。

風が突然強く吹き、いくつかのカエル人形が倒れた。ガラスで出来た繊細な細工のウサギも倒れ、音をたてて割れてしまった。

「あれ？」

不意に千恵はひらめいた。

「どうしたのちー坊」

「この『病気』は治るよ！」

「はい？」

千恵は、三つのカエル人形を並べ、全て頭を外した。最初のやつの頭を、次のやつの体にとりつける。押し出されたその頭を、三番目のカエルにくっつけようとして止める。

「だって、もし未来でも未来に行く病気が続いたら？ その司郎は『未来の未来』にいき、未来の未来の司郎が、未来の未来の未来に行くことになる。無限ループが続くことになる。そうはなっていない。未来の司郎は、その時点では未来に行っていないの。つまり、この現象は、未来の時点では治ってるのよ！」

倒れたカエル達の中に、割れたガラスのウサギが混じっている。勘の良い千恵は、この司郎の「病気」に大きな影響を及ぼしているのが自分なのではないか、と思った。神は人に試練を課す。その試練を乗り越える力のある者にだけ。キリスト教ではそう考える。試練には、だから理由がある。二人にとってこの試練になんの意味があるのか、神様の意志までつかみかねる。が、これ以上考えるのを千恵はやめた。私は京都に行かなければいい。司郎は未来には治っている。時の流れの運命は、私には見えない。司郎が今背中から抱きしめてくれている。これだけが確かで、信じられる全てだった。

その夜。弓美は宿へ帰った。彼女の話によれば、「未来世界」のディテールはまだ見えてこない。その後の司郎が、仕事には復帰したがあまりめぐまれていないこと、日本の不景気がすすんでいることぐらいで、基本はその愚痴聞きになっている。

司郎と食事をして何気なくテレビをつけると、ミステリーハンター系の番組の途中だった。またもや千恵は、「引いた」と思った。次の事件はファイルナンバー0728、「三日先から来た男」だったからだ。

「あれ？ しーちゃん、引いたよ！ 何か手がかりがあるかも！」

似たような症状があれば、司郎の病気治療のヒントになるかも知れない。

テレビの中では、再現ドラマが流れていた。ナレーションがそれに被さり、事態を説明しはじめた。

「東京都に住む三十代の会社員、Aさんは、ある日強烈な頭痛を妻に訴え、意識を失った。

目が覚めた時、Aさんには不思議な現象が！ 彼には『三日先の記憶がある』というのだ！ 先日の〇〇石油コンビナート火災の爆発事故を、生放送を見ながら言い当て、宝くじの番号を予言したAさん！」

「ん？」

おかしい。ねえ、これ、しーちゃんのことじゃないの？

画面の中は、レポーターの取材風景になっている。

「ここがAさんの住む街です」

その駅舎は、モザイクが遠慮がちにかけられているものの、D駅であった。噴水のそばの、高島屋の包装紙のように大きいバラのつぼみの大きさからすると、一週間ぐらい前のロケか。放射状にのびる「左いちよう」の並木を、レポーターは歩き始める。たしかに一番絵になる並木だけだ。

「知ってる所がテレビに出ると、テンション上がるよね」

司郎は呑気に感想を言うが、千恵にそんな心の余裕はない。モザイクがかけられているものの、二人の住む家がアップにされる。

「実際の映像」と称して、モザイクだらけなもの、台所でマグカップを落とす場面すら、そのあとに流された。

「我々は脳外科医で有名な、北村医師に話を聞いてみた」

画面は話している北村に切り替わる。千恵にはもう番組の内容が頭に入っていない。ただ番組の中でつくり笑顔をしたり、深刻な表情を浮かべる北村の顔ばかりを見ることになった。

千恵は北村を、一応は信用していた。過去に少しあったが、「司郎の親友だから」と毎回思い直していたのだ。しかしその一応、という一拍置いた嫌な感覚が、現実に形を持ってきた。

「私たちを……売ったの？」

## 第三章

### 北村と千恵



翌日、千恵は勢いよく家を飛び出した。

ドアの外に、見知らぬ人達がケータイのカメラを構えていた。目が合うと、明らかに挙動不信になる。メールをする振りとかしてんじゃないわよ。

ネットが広まってからは、テレビの中の出来事はすぐに悪意ある晒しにあう。一応のモザイクはかけてあったものの、付近の住民ならこの家を特定出来る者もいるだろう。駅が特定できれば特定の確率も上がる。D駅の周りにもこの街の住民ではなさそうな人がちらほら、テレビと同じアングルになるようにケータイカメラを構えている。テレビとネットの影響力は馬鹿にできない。相手が名乗ればまだ正々堂々としているが、何に使用どう思われているかわからない、そもそも相手の数すら分らない無気味さがネットの嫌な所だ。しかもそれは無限にコピーされ、永久根絶は出来ない。北村医師のせいだ。彼は私の夫、風間司郎の謎の現象、未来病（仮名）をテレビに売ったのだ。

北村病院は世田谷の一等地にある。北村は実家の病院を継いだ筈だが、そことは別に北村病院をもうひとつ、ここにも建てた。規模の大きさが、北村が医師ではなく経営者として暮らしている事をたやすく想像させる。

外に、巨大な重機が工事中であった。通行禁止の柵の脇を抜け、千恵は正面玄関へ向かう。病院に似つかわしくない黒服の男達が七、八人、ボディガードのように立っていた。

千恵は、司郎とほんもののヤクザを、一度だけJ丘の祭りで見たことがある。テレビや映画に見るような外見の恐さは何もなかった。眼光鋭いとか、傷があるとか、派手なちんぴら服やアルマーニのスーツを着ているわけでもなかった。「顔に蛇がいる」と千恵は形容した。姿形は人間の筈なのに、中身が違う、と直感できる何かが見えた気がした。その人の周りだけ温度が下がっていて、既に死んでいる人のような恐さを感じた。視覚以外でその人を見た気がしたのだ。司郎も見たのだから真夏の幽霊ではない。連れ立った金魚の糞のような下っ端のほうで、映画みたいな格好と顔をしていた。埼玉の田舎の不良の延長線みたいだった。ただ先頭の男だけが、肌が青白くないのに青白く見えた。人間は、一人ひとりの熱量とかボリュウムが大体決まっているものだ。その男だけ、その大きさがゼロにも見えたし数人分にも見えた。千恵には面倒な直感がある。「呼んでる気がする」と言って角を曲がると、墓地だったり、骨董屋の棚の中に念の籠った日本人形を見つけたり、車に轢かれて潰された猫などを引く力だ。「呼ぶもの」には二種類ある。司郎のような運命と、関わってはいけないものと。

顔に蛇がいたその男は後者だった。息をひそめて、その集団が通りすぎるのを待った。

今日の前に立つ七、八人の黒服の男達は金魚の糞の側だ。ただ奥の小柄の一人からは、J丘で見た男の三分の一くらいの禍々しさを感じる。行ってはいけない、と千恵の守護霊が警告したような気がした。だが北村の真意を聞くには、阿形と忞形のように地獄門の脇にいる彼らを無視して、異界に入るしかない。

エレベーターのドアが開くと、ほんとうに異世界が広がっているとは予想しなかった。ここは病院の筈なのに、ワンフロアががらんとして何も無い。潰れたオフィスのように、配線がむき出しの床と天井と窓だけがある。工事業者のような人達が、機材らしきものを搬出している。指示を出している北村を認め、状況も考えず千恵は感情を爆発させた。

「どういふことよ！」

北村は呑気に答えた。

「やあ。丁度工事中でね。あのでっかいやつ、結構高かったんだがなあ」

入り口の手前ですれ違った、重機の上の機材のことを指していた。医療用の専用機材は、一台数億のもあると以前ニュースで見て驚いたことがある。

「そうじゃなくて！ 昨日のテレビ！ 私たちを番組に売ったのね！」

「テレビ？ ああ。昨日オンエアだったのか」

司郎もテレビの仕事だから、分かっていた筈なのに。オンエアするずっと前に収録は行われている。そもそもそのずっと前から準備するものだ。北村のこの発言から、裏切りの計画は、ずっと以前からのものであったことを千恵は悟った。

「まあ落ち着けよ。売った訳じゃないよ。情報提供を全国に頼んだのさ。似たような話を知ってる方がいたら……と最後に出たる？」

「そのせいで家の周りや駅前にも、見知らぬ人がうろついて……！ これじゃ司郎が元に戻っても、元の生活に戻れなくなる！」

「公開捜査、というやり方もあるじゃないか。八方手をつくしたけど、手がかりがないんだ。精神医学学会、神経学会、脳医学界、精神科救急学会、臨床心理学会、エジンバラ大のケーストラ―超心理学部、J・F・ケネディ大超心理学部、明治大メタ超心理研、テレビの怪しい都市伝説系……」

「だからって私たちに無断で………！」

「おかげで、有力な情報がひとつ」

「え？」

「アメリカの研究所で、『クロニック・デジャヴ』という症状があることがわかった。記憶障

害の一種らしいのだが、薬物投与が効果的な症例があった」

「……つまり、どういうこと？」

「その研究所へいこう。アメリカへ飛ぶんだ」

突拍子もない展開だ。想像の範囲外のことだった。

「……司郎は治るの？」

「可能性はある。完治するとは限らないが、効果がある症例がある以上、試す価値がある。日本では認可が下りていない、ちよいと強力な合成薬だ。手術の成功例もあるらしい」

アメリカ？ 薬物で薬漬け？ 手術？ 脳の？

千恵は混乱する。イメージが出来ない。

「ただね、べらぼうに金がかかるのさ。テレビにネタ売ったり、機材売ったりしてやりくりしようと思ってね。あ、今度俺のタレント本も出るんだよ。印税もちよっとは入るかな。そうそう、予言の臨時収入もあった。ちなみに今までの検査費用とかは親友のよしみでタダにしてるけどさ」

「……それは、有り難いと思ってますが」

「主治医としての紹介をして、俺も飛ぶよ。その治療費、渡航費、滞在費、全部俺が持つ。俺って親切だね。まあ治ったらその名誉を頂こうと思ってるがね。ただ、それにはひとつだけ条件をつけさせて欲しい」

「……何ですか？」

「俺が君を好きだった、って知ってるだろう？ 一晚、君を俺にくれ」

「……はあ？」

「俺は何でも手に入れてきた。その為には何だっと思ったんだ。ここまで辿りついたのに、何をしたって過去の君は手に入らなかった。君は俺の人生の唯一の汚点、挫折の象徴なのさ。そのトラウマをリベンジして清算したい。風間は治るか、改善する。未来に行き過ぎてるのを、戻せる可能性がある。俺も、未練を断ち切れる。悪い話じゃないよ。取り引きをしようじゃないか」

「……………」

この人は何を言ってるのだろう。地獄から救い出す蜘蛛の糸がたらされた。その糸をつかむ為には毒を飲まなければならないという。

「来週、風間の検査入院がまたあるだろ。それまでに返事を」

北村はエレベーターのボタンを押し、紳士的に千恵を案内した。態度は紳士でも、考えていることは肉欲だ。私の体を悪魔に捧げれば、事態はまるく収まるというのか。

エレベーターの扉が閉まり、衝立の向こうでこの会話を聞いていた黒服の男に、北村は声をかける。

「表のコワモテの連中、下げてもらえませんかね。みなが恐がる」

「ふん。恐がらせる為にやってんだよ」

千恵が見れば、その顔にも蛇がいるというだろう。金貸しの黒木である。

「そりゃ、脅しじゃないですか」

「威力業務妨害に決まってんだろ。法には触れないがね」

口調が穏やかな分、北村は距離感を計れずに怯えている。だが得意の営業スマイルは崩さない。黒木も笑顔は崩さない。死体の筋肉に電気を通せばこういう笑顔になるだろうと北村は思う。

「借金太りでケツに火がついたまま、まだ女を口説く余裕かい」

「金と女は別腹ということだ」

「随分親切の押し売りをしてたじゃねえか」

「女なんて、やっちまえば言うこと聞くもんですよ。わはは」

「ふん」

「予言者サマでもう少し借金返せるかと思ったんですがねえ」

「天気予報に六千万も突っ込むからだ。当る訳ねえだろうが」

「当たれば黒木さんとの縁も切れたのになあ」

「ヤクザはどうやったって必要だろ。新人の頃、看護婦孕ませて堕した胎児の内蔵、毎度い値でさばいてやったじゃねえか」

「あの頃から、金と女は別腹でして。わはは」

面白くもないのに北村は笑った。

「ふん。逃げたら追いこむぞこの野郎」

「またまた御冗談を」

面白くもないのに、黒木も北村も笑った。

伏魔殿からの帰り道、千恵はまた胡蝶蘭を拾って帰った。最近よく捨て鉢に出会う。「自分

の心が捨て鉢だよ」と神様の気の利いたダジャレを、ダジャレは笑いではない、と司郎の論法で否定する。

ここ数日の司郎は、安定して弓美によくしゃべっている。弓美によれば、千恵の死のことは今でも話さないが、演劇論や映画論は話すそうだ。私がいなくなって、そんなことの話し相手がいなくなったらしい。

司郎が治る可能性はある。その方法に光が差した。千恵は、誰にもまだ北村の出した闇取引の事を言っていない。学生時代北村に告白されたことも司郎には言っていない。弓美との会話はモニタの音声を切って詳しくは聞かない。聞けば割って入りたくなる。千恵の台所には、拾ってきた蘭が増えた。今日も千恵はヘッドホンで「モルダウ」を聞いていた。

その時は、司郎が弓美に、千恵の面白おかしい逸話を披露して弓美の受けを狙っていた。

「俺が夜原稿書いているとき、一人でさみしいのか、よくお茶淹れてくれるんだよ。有機の紅茶の葉見つけてね、喘息が出やすい冷えた夜は、おろししようがにハチミツ入れてくれて。でね、『うわーばしゃーんごめんなさいー』ってひっくり返すフリしてコントをはじめのさ。『あなたの大事な原稿をこんなにしてしまつて……私はドジなダメ妻です』そうすると俺がこう返さなきゃいけないんだ。『何を言うんだ。俺の愛する女を、お前自身がダメ扱いするな』『えっ……』『愛しているんだ』『え……』『ようし、寢室へ行くぞ』『あなた……』ってここで背景が少女漫画みたいにバラ一杯になり……って段取りなんだけど、めんどくさくなつて省略して、『ばしゃーんごめんなさいー』『ようし、すばーんすばーんすばーん』って省略して、空洞化した伝統芸能みたいになつて」

「この天井裏に、忍者がいるんだ。風魔一族の長兄で、ちー坊は彼と浮気をしている設定。俺が早くに帰ってくると、『主人が帰ってきたの！あなた窓から逃げてっ！アレ？しーちゃん早いお帰りですね（平静）』っていう遊び。『何か聞こえたけど』って俺がガラリと窓をあけ外を確かめる隙に、既に忍びは天井裏に戻つてるんだ」

「長いこと欲求不満が続いたんだよねえ。今になつて思うと、『抱いてくれないなら』裸で夜中のDを走り回るぞ』って脅すんだ。『どうぞどうぞ』って流してたら『巨大化するぞ』って。夜中のDで、全裸のおぼはんがゴジラみたいに暴れ回るんだ。で俺は『誰か相手してやれよー』っていちよう並木にもたれて、余裕で煙草をプカーツてやつて、『ムキー』って踏みつぶしに来る所までが伝統芸能」

弓美はひとつひとつのネタで、鈴のように笑う。話のディテールも去ることながら、二人の睦まじさに、想像力を刺激されて思わず笑ってしまう。ことばで日常を異化してゆく。頭

の中で同じものを想像して笑う。「おはなし」そのものの面白さだ。

「ちよっと、いい？」

突然、表情を変えた司郎が、弓美に尋ねた。

「？ 何？」

「膝枕してもらっていい？」

「？？ ど、どうぞ」

弓美は自分の両膝を司郎に貸した。司郎は至福の表情で膝に乗る。男の人がこういう子供っぽくなる瞬間が、弓美は結構好きである。この人を愛する人の気持ちも良く分る。

ところが、司郎は目をつぶったまま、「違う」と言った。

「太ももの高さが、気持ちいい高さだ。膝枕つてのは、もっと高くて首が痛くならなきゃダメなんだ。ちー坊のぶつとい太もものせいで、戦国武将の固い高い枕みたいにならなきゃダメなんだ」

司郎は膝枕から起き上がり、弓美の唇に唇で触れた。突然すぎて、弓美にはリアクションする暇もなかった。顔を離して、司郎はまたも「違う」と言う。

「あの体が、この世にはもうない。唇も、瞳も、太ももも、たるんだ尻も、たるんだ乳も、たまに洗ってなくて匂いをする頭皮も、ないんだ。広川さんは、ちー坊じゃないんだ。……当たり前なんだけどさ」

抱きしめて司郎の喪失感が癒えるかは分らなかったが、弓美はこの世でないどこかへ行ってしまいそうな司郎の魂を、引き止めようとしたのだと思う。

台所から、大きく扉の開く音がした。そこにいた筈の千恵はいなかった。

「モルダウ」の曲を聞きながら、目の端のモニタの中で、二人の膝枕とキスト、抱き合う姿を千恵は見てしまった。思わず立ち上がり「あわわあわわ」と手を振ってテレビに邪魔をしたが、進行が止まる訳ではない。一番見たくない、何かが進む決定的瞬間だった。二人が何を話していたかまでは、音楽で聞いていない。

家の外に反射的に飛び出した千恵は、北村のケータイに電話した。

「今すぐ、迎えにきてよ」

車種も分らない赤いオープンカーの助手席で、千恵は夜風をぼうつと見ていた。北村が話しかける。

「蘭が好きだと言ってたからさ、花束にしてみたんだけど、気に入らなかった？」

白とピンクの胡蝶蘭の大きな花束が、後部座席に山盛りになっている。それに加えてオレンジのデンドロと、淡い黄とピンクのカトレア。いくらするんだろう。あの花の大きさは、ポイラーをがんがん炊いた、日本では不自然な温室でしか咲かない大きさ。不自然な栄養を過度に与えられるブロイラー、ビールで太らされた牛のよう。太った家畜は病気になる易いから、更に薬を与えるんだって、太らせないという発想はないのかねえ、と司郎と話したことを思い出して、弓美とのキスの場面をあらためて思い出す。

「私……司郎から花束もらったことないから」

だから嬉しい、というニュアンスでないことを北村は感じ、少しの間黙る。

「……お酒飲みたい」

司郎は酒に弱い。だから酔うまで飲んだことがない。千恵の父は九州だから、九州人の酒に強い遺伝子が入っているのだろう。酔っ払って介抱される、か弱い女の子みたいになってみたいと、常々思っていた。訳が分らなくなるまで、飲んでみたかった。

気づいたら全裸だった。自分の両足が大きく広げられて、その間に裸の北村がいた。薄暗い間接照明だが、案外胸の筋肉があるんだと思った。

もうすぐ入るんだ、と思って、

「懐かしい」

と千恵は言った。

「え？」

と、北村の勢いが止まった。

「でもなんか違う」

「違う？」

「あ。……司郎とこうしたので、だいぶ、前なんで」

「……」

「大丈夫。ごめんなさい。続きを」

夜景が綺麗な、ドラマに出てくるみたいなバーに連れていかれた所は憶えている。景色が

ゆっくりと回っている。酔うってこんな感じか。たのしいな。司郎が酔っ払って帰ってきたときは、こんな感じだったんだ。せつかくたのしいのに、酒くさいプーとか言って悪かったな。ああ、それでマンションに連れ込まれたんだっけ。キスが煙草臭かった。火を消す間もなかったのか、テーブルの灰皿で、煙草が紫煙を吐き続けている。蘭の花束は床に放置されて、周りに二人の服が投げ散らかされている。ああ、そうだ。私は北村さんに抱かれに来たんだ。アメリカと引き換えに。

「続きを」と言われても、司郎とのリアルを想像してしまい、北村は気が削がれた。案外繊細な所を千恵が突いたのか、付き合っって強い酒を飲んだのがまずかったのか、途中で不能になるのははじめてだった。あせればあせるほど、自分の硬度が下がってゆくのがみじめだった。それを女にフォローされても、余計自身を失う。

「……ちよっと、シャワー浴びてくる。緊張してるのかも知れない」

北村は動揺を隠したくて、個室へ逃げた。

まだ朦朧としたぐるぐる回る景色で、ここに来るまでを千恵は思い出そうとする。船酔いみたいなバーの天井、「私のどこが良かったの?」「弱いのに、張り詰めたところ」という会話。そんな風に言われたことなんかなくて、それが引き金を引いた気がした。マンションに連れ込まれるとき、病院で見たような黒い服の男達を見た。黒服が北村にはなく、北村が黒服に頭を下げるのを見て、変だと思った。

千恵の揺れた景色が、風になってゆく。目のピントが、間接照明の暗い部屋に合ってきた。都内の高級マンション、小綺麗な広い部屋。おそらく家政婦を雇っているだろう。本棚は古い医学書のようなもので埋まっている。それ以外に生活感らしきものはない。男の人の部屋ってもっと「自分」に関係あるものがあると思うのだけれど……。机の上のパソコンに、ビデオカメラが接続されていて、撮影したものを転送中だった。先日の、遊園地での司郎と弓美だ。千恵はシャツを一枚まとい、何気なくパソコンの画面を見に行った。

「弱いのに、張り詰めてる」と画面の中の司郎が言った場面だった。たしかに、過去に司郎に言われたことはない。「未来の司郎」に言われた言葉だった。何故気づかなかった。酔ってたから?

「あの口説き文句、グツときたんだけど」

と千恵はシャワールームの北村に声をかけた。

「何が?」

「バーで。肩にもたれたとき。弱いのに、張り詰めてるって」

「ああ。……学生るときから、そう思ってたよ」



千恵はカマをかけてみた。

「どっかの映画とか本のセリフ？」

「……オリジナルだよ」

千恵はますます冷静になる。パソコンの他のファイルを見ようとするが、「パスワードを入力して下さい」とはねられた。

「北村さんにとって、司郎は友達なの？」

「親友って言うていいのかねえ。一回生のとき同じクラスだった筈なのに、アイツ映研で映画ばっか撮ってて授業に来てなくてさ、三回生ではじめて知ったんだよ。『発見が遅れた』なんて俺は言うてね。だから付き合いは学部と院でたった四年だね。奇妙な友情だが、親友だよ」

「shirou」 「kazama」 「best friend」 などのパスワードを入れるも、はねられる。鍵のかかっているところには、何かある。「パスワードを五回間違えたらロックがかかります(あと二回)。半角英数字でパスワードを入力してください」 英数字……。数字……。まさか、と思いながらも、千恵は思い当たる数字を入力してみた。

開いた。

まさかね、と言ってこの違和感を収めるつもりだったのに。

「動画フォルダ」は「風間司郎」のフォルダ内にある。「テレビ局売約済み」とそうでないものに、丁寧に分けられてあった。その隣の「各種書類」の中に、「借入れ金明細」の中身は莫大な赤字になっていて、その脇に「潜伏先」というファイルがあった。

書類の中身を知った千恵は、慌てて机の引き出しを探った。小さなハードディスクとワイヤを見つけ、司郎の全動画、全資料をコピーし、書類フォルダもコピーする。「コピーを開始します。99%、97%、95%……」 遅い。動画が重い。

がらりと戸が開き、北村がシャワールームから出てきた。メガネをかけようとする北村を、千恵は牽制した。

「メガネかけないほうが、イイ男よ」

「ふ。言うね」

北村は千恵を見つめた。北村の視力は不明だ。どこまで見えているのだろう。  
90%、87%……。

パソコンの画面に注意がいけないように、気を引き続けなければ。

「ちよっと、聞きたいことがあって」

「何？」

「私たちは、アメリカのどこへ向かうの？ 患者ってどういう人？」

「今聞くの」

「イメージしておきたくて」

「今聞かなくても」

北村の目が一瞬外れるのを、千恵は見逃さなかった。

「コロラド州の……シユワルツラボという研究所だ。患者名は、ステイヴン・ベルイマンという。彼の脳の左前頭葉の灰白質は……」

嘘をつく人間には二種類いる。黙るタイプと饒舌になるタイプだ。北村は後者らしい。膨大な情報量で押し流すつもりなのだろう。最初に北村が目線を外したとき、その「逆」に何があるかを、話を聞くふりをしながら千恵は確認した。医学書の本棚だった。シユワルツ、ベルイマンといった、彼の「話」の固有名詞が並んでいた。北村への不信は、千恵の中で確信となった。

コピー 60%……52%……

時間稼ぎをするしかない。

「向かう先がコロラドなら、どうして潜伏先がニューヨークになっているのかしら？」

千恵は意を決し、北村のつくり話に切りこんだ。

「……何で知っている？」

北村の目が変わった。

「司郎が親友というなら、どうしてパスワードはその逆の意味なの？」

「……何のことだい？」

「パスワードは、04132525。オー四つの瞳がニッコニコ。……どうして宝くじの番号なの？ 司郎は親友じゃなく、金ヅルだって意味？」

北村の表情が笑顔になる。

こういう男の人の表情を私は知っている。浮気がばれたときだ。人はやましくなると、笑う。

「その本棚に、シユワルツもベルイマンもいるんだけど」

北村の表情が変わった。笑顔から、真顔へ。

「全部つくり話なの？ アメリカに行くことも！ 司郎が治ることも！」

コピー 30%……25%……18%……

「中身を見たのか？」

振り向いた北村よりもはやく、コピー完了の合図が大きく鳴った。千恵の初動は、北村よりはやかかった。接続ワイヤごとハードディスクを引き抜き、机の上に登った。灰皿の、まだ火のついた煙草を奪って。

「動かないで！」

煙草を、天井のスプリンクラーに近づける。丁度その真下がパソコンの本体だった。「雨降らせるわよ！」

状況を理解して北村はひるんだ。今飛びかかっても、パソコンが水浸しになつては意味がない。中身のデータは保証できない。北村はマスコミ向けのひきつた笑顔を更にひきつた笑顔にして、猫撫で声を出した。

「さつきまでイチャイチャしてたと思つたら、なんだよ。落ち着こうよ。なにかの誤解だろ？」

「借金があるんでしよう？ 表で見た黒い服の人たちは関係あるんでしよう？ 私たちとアメリカに飛ぶ振りをして、自分だけ行方をくらませるつもりだったんでしよう？」

「ははは。何を見たのか分らないが、想像力が豊かだな昔から」

千恵はスプリンクラーに、煙草の赤い火を更に近づける。熱を感知した警報ランプが、赤い明滅をはじめめる。

「オイよせ！」

「じゃあ下がって！」

「全部君の中の妄想だよ！ アメリカへ行つて、風間を治すんだ！」

「全部口からの出まかせ！」

「違うよ！」

「どこからが嘘？ 司郎が治ること？ 私を好きなこと？」

北村の一步下がった右足が、くしやりと蘭の花束を踏んだ。

「ひどい」

千恵が言わなければ、北村は踏んだことすら気づかなかつただろう。

「ああ。花を踏んで、ごめん」

「違う。花は大地に根を張って生きるの。司郎が花束をくれないのは、それが切り落とした花だから。花は本体ごと育てるものよ。それは、生首の束だわ」

胡蝶蘭の花は、株の栄養状態が良ければ、ひと月以上もつこともある。受精して、結実する為だ。花が植物にとつての性器であるならば、花束とは切り落とした性器の束だ。千恵にとつて、切り花は痛み以外の何ものでもない。北村と私が相容れる所なんて、最初からなかったのだ。

「あともうひとつ。……私、煙草吸う人嫌いな」

その煙草をスプリンクラーに押しつけた。非常ベルとともに、勢いよく水が放出され雨が部屋に降った。パソコンは水浸しになり、ばちりと火花を派手に走らせた。

「あああ！ データが！」

千恵はすばやく自分のかばんを取り、シート一枚まきつけた姿で玄関の外へ飛び出た。靴を履く余裕もなかった。自分の体で、放水からハードディスクは守った。裸足で廊下を走り、エレベーターに乗ろうとして、追いつかれたら密室になると思いい階段を駆け下りた。

私がバカだった。北村は、私たちを金儲けの見世物扱いしてただけだ。一人で勝手に雲隠れするがいい。司郎の親友だなんて、初手から違っていたのだ。

マンションの下では、黒服たちが見張りをしていた。黒木が念の為姿を見せた。逃亡するなら気配があるから見張っておけと指示だけ出して、一服したら帰るつもりだった。北村の部屋の、シャワールームの電気がついた。お楽しみでも終わったかと煙草を吸い終わる頃、非常ベルが鳴った。

ロビーから、シート一枚の千恵が走り出てきた。今夜は失敗したのかね。そういう夜もあるのかと、次会う時は嫌味を言ってみるかと思つたとき、フルチン姿の北村も走ってきた。

「あの女を捕まえろ！」

「何やってんだお前？」

「データを盗まれた！ 全データが、あそこに入ってるんだ！」

千恵は既に数ブロック先にいた。黒木と黒服たちは走りはじめた。今日は何か持つてきてたっけ。左胸を確かめる。サイレンサーは、ない。深夜の住宅街は響く。銃を使うなら、目撃者が出る前にカタをつけたほうがよいか。

走った。とにかく千恵は走った。大人になって全力で走るなんてやってない。大学の体力測定が最後だと思う。心臓が痛い。目が回る。酒が残ってる。右足と左足がもつれそうになる。小石を踏んだか、裸足が痛い。

マンションから飛び出たとき、黒服の連中に、一人だけ「本物」がいるのを見た。顔に蛇がいた。だから本気で走った。北村は、あの男とつながりがある。

暗いこの街がどこかも分らない。どっちへ行つていいのかも分らない。

サラリーマンがタクシーから降りている所に、運よく出くわした。

「お金は私が払うから！ 今すぐ出して！」

財布を開けて支払おうとしている所へ、彼を追い出して、とにかく飛び込んだ。運転手も酔ったサラリーマンも、シート一枚きりの女が飛び込んできて、さぞ驚いたことだろう。

「つかまつちやう！」

背後から、黒服の男たちが走ってきているのに気づき、運転手はただならぬ気配を感じる。

「早く出して！」

黒木が懐から銃を出した。バックミラーに映って、運転手にも見えた。

黒木は後部タイヤを冷静に狙った。一発。二発。一瞬前にタイヤのあった場所は、アスファルトになっていた。急発進の方が早かった。空き地に手ごろな石を拾い、後部ガラスに向かって投げつける。

大きな音を立てて、タクシーの後部ガラスがひしゃげた。ワイヤーが入っているのか、映画みたいに粉々に飛び散ることはなかった。

「止まつちやダメ！」

突き当たりのT字路をタクシーは左に曲がった。黒服たちが走って追いかけてよとする。無駄だろう。自分の車で来ておけば良かった。足がない。

「女の家を押さえろ！ 先回りするぞ！」

北村は何らかのへまをやった。データを全部盗まれた、と言っていた。

黒木は振り向いた。この一瞬の隙に、フルチンの北村は既にいなかった。

北村の部屋はもぬけの殻で、スプリンクラーで水浸しになっていた。やられた。あのクソ野郎。北村に逃げられた。

とにかく走るタクシーの中で、千恵は司郎に電話をかける。

「しーちゃん！ しーちゃん！」

「あ？」

眠りを妨げられたいつもの司郎の声だった。何日も会っていない思いだった。

「しーちゃん！ 今すぐ財布と私の服持って、東京駅に集合！」

家に帰るのは危険だと、本能的に思った。

あの連中は北村と関係している。ハードディスクに転送したこのデータは、それとも関係している。中心にいた男は、かつて見たヤクザと同じ世界の生き物だ。遠くへ。とにかく遠くへ。東京駅なら、どこにでも行けると単純に思ったからで根拠はない。

「なに？ どっかいくの？」

「わかんない。夜行列車って走ってるんだっけ？ 飛行機って飛ぶんだっけ？」

「？ ……どこいくの？」

なるべく人のいない所。誰にも迷惑のかからない所。司郎をまきこまずに済む所。

とっさに出た場所は、いつか行くべき場所だった。

「鳥取砂丘！」

4

目を開けると、暗い空に朝日が昇ってきた所だった。鳥取へ向かう夜行列車は、品川から出ていた。窓から差し込む夜明けの光が、隣で眠る司郎を照らしていた。どうして私はこの人を裏切ろうと思ったのだろうか。赤ん坊のような寝顔を、私はこんなに愛しているのに。寝顔が醜い人がいる。寝顔はその人の無意識そのものだ。これほどブツダのように安らかに眠る人を千恵は知らない。千恵がその神々しい顔を見つめていると、ゆっくりと司郎が目を開けた。同じく朝日のまぶしさを感じたのか、千恵の視線を感じたのか。

「おはようちー坊」

司郎は習慣のように、千恵の頬に手を伸ばし、やさしく撫でた。

「おはようしーちゃん」

撫でられるこの瞬間が千恵を安心させる。

「随分急な新婚旅行だねえ。何の準備もしてないよ」

千恵は逆光で透けたような髪 of 司郎を見て、言葉を詰まらせた。

「？」

「……すみませんでした！」

「？ 何が？」

「あやうく、恋愛の神様を裏切る所でした！ でもしーちゃんだって弓美さんとチューした

し、ここはおあいこってことでひとつ！」

「？ なんて、夢の中で広川さんにキスしたの、知ってるの？」

「……膝枕だっただけに」

「許す」

「……はい？」

「許す。誓えるんでしょ？ 恋愛の神様を裏切っていないって」

「はい。それだけは」



「砂丘、イメージよりちっちゃーい！」

「だから言ったじゃん！ 現実ってこんなもんで」

「でもリアルなの！ ずっとずっとずっと夢だったの！ 二人で誰もいない砂の丘に行くの！ しーちゃんとちー坊が、二人で頂へ報告しに行くの！」

右足からも左足からも砂煙を上げて、砂の丘を千恵は駆け登ってゆく。

「トップ・オブ・ザ・ワールドーーーーー！！！」

頂上からは、一転、青い海が眼前に広がった。日本海だ。水平線が地球の終わりのように見えている。

北からの強い風が、砂浜をまくりあげてつくった巨大な壁。

青い空。

青い海。

巨大な白。

強い風。

砂煙。

千恵は両手をあげ、体ぜんぶで向かい風を受けとめた。

聖地に来た。

一番大事な人と。

司郎も追いつき、二人は頂上で同じポーズで叫んだ。

「トップ・オブ・ザ・ワールドーーーーー！！！」

気絶するかと思った。

その砂の丘で風を浴びて座り、しばし呼吸を整えた。汗は乾いて、べたべたが少し楽になった。眼下の海へは、丘がそのまま海の境へと潜りこんでいる。波うち際は普通の砂浜で、左も右も、この砂の丘が岬まで続いている。鳥取県の柔道部や野球部の砂浜ランニングは、きっとこの海では行われないだろう。一往復も出来ないわ、ここ。

「なんで鳥取砂丘なのさ？」

司郎はポカ리를飲みながら尋ねる。学生時代から、千恵はここにこだわった。

「砂漠の映画に出てくる、ターバンまいた濃いイイオッサンが好きだからでしょ？」

「そうなの！ 濃くて悲しいタレ目の長いまつげがバツバサで！ 黒いターバンが風になびいて、馬が走って鞭でピシャーンて！」



司郎は周りを見渡す。

「なんにもないじゃん」

「なんにもないから」

想像していなかった答えに、司郎は驚いた。

「好きな人以外、なんにもないから」

ああ、そうだったのか。こんなにただ真っすぐな考え方を、どうして生きているときに理解してあげられなかったのだろう。司郎は後悔した。千恵のまっすぐな瞳を、まっすぐに見た。相手の瞳の中に自分がうつっている状態は、二人が真っすぐに見ているときしか成立しない、とつきあい始めに千恵が力説していたことをふと思い出した。

千恵の髪が、ゆるやかに風に吹かれていた。

司郎は口ずさんだ。

「亜麻色の 長い髪を 風がやさしく 包む」

ヴィレッジ・シンガーズ風でも、島谷ひとみ風でもなかった。あえて言うなら、司郎風だった。

千恵も返歌した。

「乙女は 胸に白い 花束を」

あのとときのカラオケがはじまりだったのか、その前の立て看板がはじまりだったのか、その前の講演の教室で出会ったのがはじまりだったのか。どこからがはじまりでも、どうだったいい。どこで終わってもどうでもいい。二人はこの瞬間、なにもないところに二人しかいない。千恵と司郎は、永遠の風の中にいる。

「羽根のように 丘を下り やさしい彼のもとへ

歌声が明るいのを 恋をしているから」

簡単なことだ。ただの真っすぐな恋なのだ。

カラオケのときの二人は、ばらばらの声だった。今は二人とも、同じ声だった。

「薔薇色の微笑み 青い空

しあわせな二人は 寄り添う」

千恵は、身振りで指示を出した。司郎はその意図を理解して、砂の丘を海の方へ下ってゆく。千恵は司郎に聞こえるように大声を出した。

「亜麻色の 長い髪を 風がやさしく 包む」

丘の中腹まで下りた司郎は、両手を一杯に広げた。



「おはようちー坊」

「おはようしーちゃん」

司郎はいつも通り、千恵の頬を撫でる。一点が触れただけでも、幸せがそこから入ってくる。

「ねえ。四足歩行のサルが、二足歩行になった瞬間って知ってる？」

千恵の話に、司郎は微笑んだ。

「それ、何度もちー坊から聞いた話だね」

「いいじゃない。一番好きな話だから、何回もするの。サルは昔四足歩行で、樹の上で果物をとって暮らしてたの。ある日メスザルが果物がたくさんなっている樹を見つけて、家で待ってるオスザルに持って帰ろうと思って、いっぱい食べさせてあげようと思って、両手に持てるだけ抱えたの。で、思わずトトトトトって二本足で歩いたの。これが人類初の二足歩行」

「誰かが見た訳でもあるまいし」

「好きな人の為に、サルは人になったんだよ」

千恵は自分の額を、司郎にこすりつけた。千恵の甘えるときの癖だった。しゅりしゅりしゅり、と千恵は自分で擬音をつけた。

「もうちよつと寝ていい？」と司郎は千恵に聞いた。

「お寝坊さんね」

「久しぶりに、ぐっすり寝れそう」

浜辺を、少し千恵は歩いた。柔道部も野球部も走っていないかった。海のない県で育った千恵は、海を見ると興奮するとともに怖くなる。どうしてこんなに水があるのか、訳が分からなくなる。ただ波の音は好きだった。はじめて司郎とラブホテルに行ったとき、BGMは、どうでもいいJポップでもクラシックでもなく、ずっと波の音にしていた。

弓美に電話することにした。黒服の男の件を伝えなければ。北村と関わりのある、多分ヤクザ。ほんの一瞬見ただけでも、幽霊の出る廃墟と同じ磁場を感じた。とにかく関わるのを避けて、逃げた方がいい。いつまで？ ほとぼりが冷めるまで、としか言いようがない。北村は既にニューヨークへ高飛びしているかも知れない。

司郎を「治す」にはどうすればいいか、千恵は考えを巡らせる。地道に脳科学者を訪ねるか、いつそ予言者と呼ばれる人たちの所へ行くか。キツネ憑きを払う祈禱を受けて治るなら、それも価値がある。たとえばいつとき予言のビジョンと繋がっていたが、それが消えてしまった人、というような人を探し出すことは可能だろうか。勇気を出して逆行催眠にもう一度

挑戦するか。

とりとめもなく考え、弓美に整理してから話そうと思った。だが開口一番、弓美はその黒木に会ったと言う。

「家の前に、立っていた」

という言葉に肝を冷やした。弓美が千恵が出て行ったのを心配し、ケータイもつながらないので、翌朝、二人の家に訪ねてきてくれたそう。そうしたら、黒木が立って待っていた、と。弓美を、ではなく、あくまで北村が目的らしかった。昼間の住宅街で銃を出す訳にもいかないのだろう。きわめて紳士的な態度だったそう。

「北村医師を探している」と名刺を一枚貰った、と弓美は言った。「あまり関わり合いたくないタイプ」と、千恵と同じことを思ったらしい。

「とりあえず京都に戻って下さい」と、千恵は言う。二週間の約束はもう関係ない。これ以上巻きこむ訳にいかない。命の危険すらある。

「このケータイも一端解約します。私たちがどこにいるか、誰からも辿れないように、しばらく潜伏するつもり」と、千恵は弓美にしばしの別れを告げる。鳥取にいることすら、弓美には伝えなかった。未来の司郎をよろしくお願いします、と千恵は言わなかった。司郎となんとかして、元の生活に戻るつもりだという意志表示をこめたつもりだった。蘭の水やりだけが気になる。大家さんに定期的に頼むことにしよう。いつあの部屋に帰れるか分らないけど、しばしの間の、彷徨の旅の準備をするつもりだった。

が、司郎の異変がその計画を変更させた。

6

「司郎ー。お昼ごはんになっちゃうよおー」

ベッドで眠り続ける司郎を千恵は起こそうとした。

「司郎？」

司郎は答えなかった。

「司郎？ 司郎！ しーちゃん！ しーちゃん！」

ゆすつても叩いても、司郎は目覚めなかった。呼吸はしている。死んではいない。脈も取ってみた。ある。

「しーちゃん！ しーちゃん！ しーちゃん！」

パニックになりかける。誰に相談すればよいか、頭の中のリストはそんなにない。東京のかかりつけの医者？ そんなのいない。119番？ 事情を知らない医者にも、なんと説明する？ 頭がタイムスリップしてるんです、って言う？ 近くの病院に入院でもすれば人の目に触れる。いずれそれが漏れたら。

千恵は新しいケータイを買いにゆき、新しい番号から、北村病院のリースと呼ばれた、若き狩野医師に電話することにした。事情を知るのは、北村以外彼しかいない。

北村病院の狩野医師は、今日は非番で休みを取っており、自宅で千恵からの電話を受けた。声だけではしばらく誰か分らず、タイムスリップという言葉で思い出した。院長の北村の失踪は、病院の誰もまだ気づいていない。たださえ何処かにふらふらしている院長を、病院の誰もまだ心配してはいないことが狩野の話しぶりから分った。

脈拍、呼吸、瞳孔反射、とりあえず遠隔で出来る範囲の指示を狩野はした。大きくいびきをかいたりしていれば脳内出血などもありえる。帰って来た答えに、狩野はまたも「医学的には正常」という結論を出すのが歯がゆい。現場でみてみるとこれ以上は分らない。脳の病気だとすれば、外からは見えない内部で何か問題が起こっているかもしれない。

「近くの大きな病院へ。遠隔では、これ位しか言えません。緊急かどうか、ここからは分らない。専門家のいる場所へ」

「でも、目立っては意味がないんです……」

言いかけた千恵のセリフを、受話器が奪った、聞き覚えのある声がさざざった。

「どこにいる？ ウチのエースを回診にいかせようか？」

「……北村さん、ね」

北村はニューヨークではなく、狩野の自宅に潜伏していた。

狩野にコンタクトを取ったのは失敗だったかも、と千恵ははげしく後悔した。

「未来を変える方法を、知りたくないか？」

北村は、初手から核心に切り込んできた。

「……どうということ？」

釣れた、と北村は声色に出さずに笑う。千恵に最初にこの餌を垂らそうと、北村は決めていた。

「あらためて取引をしようじゃないか。俺にはあの動画が必要なんだ。金になる。テレビだけじゃない。医学界にも、薬業界にも」

「……当座、あの黒い服の人を納得させるだけの額が必要だと」

「返してくれよ。風間とは分らないようにするからさ」

「信用出来ない。ネットではまだ『三日先の男』の特定が続いてる。これじゃ、司郎が元に戻っても、元の生活に戻れなくなる」

「今度こそは信用してくれ。元データを加工してから渡すよ。俺はあのハードディスクが必要なんだ。返してくれば、その代わり、その未来を変える方法を教える」

「……」

そんな方法、ある？ 北村のハッター？ 一瞬で色々なことを千恵は考える。どう答えるべきか。北村も千恵の迷いを、全神経をかけて探る。

その無言の闇を、司郎の声がくつがえした。

「んー……」

「司郎？」

司郎が目を覚めたのだ。千恵は慌ててケータイを切り、電源も落とした。このケータイも、解約しなければ。

「あー。ちー坊だ」

良かった。しーちゃんが目覚めた。昏睡とかじゃなかったんだ。いつも司郎は私を心配させる。「あっ」ってウツカリ車とかに轢かれて死んじゃうんじゃないかって、いつも心配している。時々ある喘息だって、私の息もできなくなるんだから。

だが次の瞬間、目だけを開けた司郎の言葉で、千恵は凍りついた。

「久しぶりに夢の中に来てくれたね。夢の中のちー坊は、歳を取らないねえ」

「……なに？ どういうこと？」

「膝枕、して」

ゆっくりと体を起こし、千恵の膝枕に乗る司郎の動きは、やけにゆっくりしていた。若者の動きではない。田舎の、もう死んだじいちゃんの動きに近かった。

「あー久しぶりだちー坊の膝枕。固くて太くて首が痛くて……」  
考えたくない。けど確かめなくてはいけない。

「しーちゃん」

「なんだいちー坊？」

「司郎は、今いくつになった？」

「三日先」が「四日先」になったときを思い出した。あのときも司郎はぐっすり寝た。深い眠りが、加速の原因なのかも知れないと千恵は直感的に思う。

「ずいぶん生きたよ。きみの歳の倍をこえてさ」

「……え？」

「八十過ぎてから、数えてない」

カエルの頭が、崖のそばに来ていた。このまま司郎は、脳だけ死んでしまうのだろうか。神様は、何故いのちにタイムリミットを用意するのだろうか。

7

夜まで考えて、千恵は狩野の自宅に再び電話をかけた。すぐに、北村が出た。

「腹は決まったのか？」

「未来を変える方法って、どういうこと？」

「簡単だよ。……弓美を殺すのさ」

「はあ？」

突拍子もない考えだった。司郎の未来では、千恵の死後に弓美に再会する。弓美の芝居を見にゆき、夢の中で弓美に会い、その話を弓美にする。その後どうにかなって、少なくとも八十まで生きる。今弓美が死ねば、その未来は消滅する、という理屈だ。

「弓美は、京都に帰ったんだろう？」

北村の情報網の広さは、学生のときからだ。

「芝居の本番がもうすぐだ。女優なんだから、芝居はやらせてやろう。金土日とつづく芝居の千秋楽。そこで会おうじゃないか。データと引き換えだ」

「私がデータを渡して、弓美さんを殺せと？」

「殺し屋を雇ってもいいぞ。紹介しようか？」

「それで未来は変わるかも知れないけど、司郎が治るの？」

「あいつの脳の中から、未来がなかったことになるんだぞ？」

「……」

高速に頭を回転させて、頭が焼き切れそうになる。弓美と出会う未来が仮になかったとしても、別の未来を司郎は経験するのではないか。ハードディスクの中には、弓美と出会う未来の証言が記録されている。弓美が今死んだとしたらその証言は改変されるのか。されるとしたらどのような原理で。

「弓美さんの芝居は、どこで？」

「瑞祥会館。京都だ」

千恵は再び言葉を失う。「京都で死んだ」という司郎のあのときの言葉を、北村は聞いてい

ただろうか。それとも聞き逃したのだろうか。逆行催眠実験の混乱した現場の記憶を必死に再現しても、そこまでは分らない。

千恵は、賭けに出た。

「何時に？」

「十五時」

「……人殺しのビデオは、高く売れるの？」

「いい返事だ。話が分るじゃないか」

「一人で来てよ。あの恐い連中を連れてくるんじゃないでしょうね」

「むしろ俺が追われてるんだよ。データが今や俺の生命線なんだ」

「では、千秋楽に」

「……千秋楽に」

夜の海に一人出て、千恵は弓美に電話をかけ、賭けの内容を話した。

「無茶よ！ あなた、『京都で死んだ』って言われたんでしょ？」

「これが成功すれば、もうこれ以上おびえなくて済む。北村を野放しのままにしたら、元の生活に戻りたくても戻れない」

「台本なんて書けないわよ！ まだ一本すら書き終えてないのに！」

「だいたい私が話した通りよ。将来、あなたは立派なお芝居の台本を何本も書くのよ？ それに比べたら、たった一場面の台本なんて」

弓美は、右手に握った黒木の名刺を見ている。千恵の計画通りに、うまく行くとは限らない。計画と現場は違う。それを知り尽くしている弓美は、台本そのものを書けなくなった。

だが、台本がなければ、「役者」も動けない。

「……できるだけ、やってみます」

「……ありがとう。このご恩は、一生忘れません」

千恵は電話を切り、暗い海を見つめた。日本海の家は今日は荒く、風が強かった。弓美にも司郎にも言えない可能性のことを、一人考えていた。

司郎は、未来には「未来病」が治っている。それはいつ治るのだろう。司郎の話を総合すれば、私の「死」以降ではないか。精神的なショックが脳に影響を及ぼすのであれば、司郎にとつて最もダメージの大きい感情は、私の死だ。ガラスのウサギが、強い風で倒れて割れたときに、気づいたことだった。無意識にそれ以上考えることを避けてきた。私の未来の黒



を、夜の海が映しているようだった。

運命は変えることができる、と人は簡単に言うけれど。

もう少し司郎と生きたい。

未来を、よい方向へ変えたい。

あの幸せだった日々のように元に戻って、誰にも追いかけられない生活をして、いつものようにあの部屋で冗談を言いたい。

誰にも話すことなく、その夜千恵は司郎と眠った。

## 第四章

### 千恵

京都は雨が降っていた。

千恵は、京都が近づくにつれ、窓を叩く雨が強くなってきたのに気づいた。

北村も、京都が近づくにつれ、雨雲が低く黒くなってゆくことに気づいた。

二人とも、別々の方向から、同じ雨を見ていた。

砂丘の宿を朝早く出るとき、司郎は眠っていた。こっそりと暖かい布団を抜け出し、千恵は司郎を起こさないよう身支度を整えた。置き手紙をしようと思ったが、長く長く書いてしまいで、一文字も書けなかった。たったひと言だけしか伝えられないとしたら、と考へ、走り書きの一行だけメモを残した。千恵は、司郎の邪気のない寝顔を愛している。これほど楽しそうに私と眠る人はいない。

「必ず、帰ってくるから」

彼の寝顔に優しくキスをして、千恵は運命の地へ向かった。

運命の通りなら、私は京都で死ぬかも知れない。これがその京都ゆきかどうかとも分らない。司郎との生活を守るなら、ここしかチャンスはない。千恵の計画は、弓美と打ち合わせ済みだ。これは賭けだ。運命を変えられるのなら、私は死なず、いずれ治る司郎の元へ帰れる。

花遊小路の刃物専門店で、大きな包丁を買う。刺さったら痛そう。実際には、痛いというより熱い、という感覚だと聞いたことがある、と刺されたこともないのに想像する。

弓美の最終公演は、クライマックスに近づいていた。常連客がちらほら観客席に見える。芝居をはじめたときは彼らも学生だったし、弓美も学生だった。お互い京都で歳を取ってゆくのだな、と思う。あとどれだけ板を踏めるのだろうか。あとどれだけ、このスポットライトの中にいられるだろう。物言わぬ彼らと舞台の間の、無言の熱の交換を味わってゆく。

先日、弓美は劇団主宰の藤岡に別れ話を切り出した。同時に、この劇団を辞め、独立するつもりであることも告げた。しばらく一人でやってみたい、と弓美は言った。ふたつのこめられた意味を藤岡は理解した。長年のつき合いだ。意外とも思わなかったが、少し残念だ、という顔をした。

かつてのカリスマ女優も歳を取った。若い女でなくなった彼女を、引き続きいい役として使い続ける技量は藤岡にはない。毎回使い続けるレギュラーではなく、いざというときに使う隠し球は、隠している側にはいずれ錆びた感覚になる。控えのベンチに座り続ける者なら肌で分ることだ。無理に相手に合わせて待ち続ける必要はない。男女関係もだ。

「ひとつ聞きたいことが」と最後に弓美は尋ねた。「ある役がシナリオ上死ぬと分かったとき、その役はその瞬間までどうすべき？ 例えば神の計画を逸脱すべき？」

藤岡は役者と台本の話か、役と物語の話かを尋ねる。どちらで答えても構わないと弓美は返す。

「どっちでも一緒かな。全力で生きればええんちゃうかな」

弓美は感心した。どうしても愚かで許せない所がいくつかあった男だが、彼と出会ったとき最初に思ったことと同じことを素直に思った。

「あなた、才能あるのね」

「そんなもん、知っとるわ！」

「それを、大学生の梨花さんが愛してくれるといいけれど」

藤岡の新しい恋人はそういう名前だったような気がする。もう興味はないけれど。

難しく考えることはないんだ。全力で生きる。千恵に会ったら、そう伝えなかった。

## 2

京都瑞祥会館は、古くは何かの公共の建物であつたらしい。一端、古い大学の持ちものになり、手放してどこかの物好きが歴史的価値で維持している。壊すには勿体ないという程度の理由だが。京都には、昔ジャズや演劇や文学や映画をやっていた、自称〇〇崩れのオッサンが、数多くの喫茶店やバーで学生を相手にしている。この古い建物もそのひとつだ。若い才能が集まる、梁山泊やトキワ荘を、誰もが経営したがる。

昨夜から降り続いた細かい雨は、地面と触れる音も立てず、ひたすら景色に染み込み続けている。東山。古い瓦屋根。砂利の庭。木の葉のひとつひとつ。千恵のさす傘。少し遠くに停められた、黒いバン。

千恵はその黒いバンを一瞥し、鉄の門をくぐり砂利の庭を踏んだ。劇団「夜明け前は最も暗い」公演「裸足のアリア」千秋楽終了時刻、十五時。

脇の小さな建物の軒下で、北村がこつちを見ていた。千恵は傘から北村の顔を覗いた。表情はひきつった笑顔で、相変わらず真意を隠そうとしているのが分った。

低い音をたてて、黒く重い金属製の扉がひらいた。様々な人の波が、カラフルな傘を伴って出てきた。運命に逆らうように、千恵はその人並みを逆らって進んだ。

千恵は一端脇に避ける。人の流れを挟んで、千恵と北村が対峙する。

人々は芝居の感想を述べたり、晩ご飯の話をしている。この一人一人にそれぞれの人生があつて、悩みや苦悩があるのかと思う。通りすぎるその人たち越しに、北村と千恵が互いを探る。

北村は無言でビデオカメラを見せた。

千恵は無言でハードディスクを見せた。

北村の顔が歪み、奇妙な形に微笑む。テレビで見せる笑顔でない本当の北村の笑顔は、いびつだった。

観客たちはめいめいの方角へ消えていなくなった。祭りの終わりはいつも寂しい。学園祭の撒収とか、見えて泣きたくなる。見送りを終えた演者たちが、重い扉を閉めて中へ戻ろうとする。その最後尾の弓美に、千恵は声をかけた。

「弓美さん」

弓美は振り向いた。重い扉が閉まり、その低い音が、中庭に弓美と千恵が残される合図のようだった。

北村は物陰に隠れ、ビデオカメラを構えた。千恵は、弓美から見えないように、北村からは見えるように、長い刃の包丁を出す。北村のいびつな笑顔は更にいびつになり、ビデオカメラの録画をスタートさせる。

「千恵さん。……来てくれるんなら、席、用意したのに」

「どっちにしても、この時間じゃ公演終わってるけどね」

北村は、千恵の背後の包丁をズームでとらえる。

「お芝居、大盛況だったようね。お客さんの顔を見れば分る」

「ありがとう。この劇団での引退公演、出来れば見て欲しかったかな」

「え？」

「私、辞めるの。風間くんの言う通り、独立することにしたの」

「……司郎の予言した未来が、現実になってきてるってこと？」

一歩一歩、ゆっくりと千恵は間合いを自然に詰めてゆく。北村のカメラは、千恵の白刃と弓美とを交互にとらえる。雨の水滴がレンズにもファインダーにもつき、慌てて北村は袖で

拭う。

「風間くんの影響を受けた訳じゃないわ。前からうっすらと考えていたことに決着をつけただけ」

「……でも、司郎が決断のきっかけになったとしたら、一体誰の決断になっちゃうの？ ループしない？」

千恵は傘を捨て、包丁を弓美に見せた。あと三メートルの距離だ。

「バカ！ 早い！ もっと引きつけないと！」

カメラのビューファインダーを見ながら、北村は独り言を思わず言いそうになる。四十七センチはあるう出刃をつきつけられ、弓美は平静を保とうとする。

「それ、芝居の小道具じゃないわよね？」

千恵は左腕を包丁で浅く引いた。

筋の形に、血がにじんだ。淡い雨が、その血を薄めてゆく。ビデオを夢中で撮る北村の気配を、千恵も弓美も感じ取る。ここまでは計画通りだ。

そこへ、小道具箱を抱えた梨花が通りかかった。血と刃物を見て、悲鳴をあげた。

計画が狂った。闖入者は想定していない。

一瞬、千恵も弓美も判断に迷う。

千恵が決断し、包丁を脇に抱え、体ごと弓美へ突撃した。

「危ない！」

梨花が体を呈して、思わず弓美をかばった。

騒ぎを聞きつけた劇団員がかけつけた。尋常でない二人のテンションと刃物と血に、割って入るべきか躊躇して取り巻きをつくった。

もみあった拍子に、梨花は肩を切り、出血していた。

かけつけた藤岡は、刃を向けられている弓美ではなく、血を流す梨花の方へ走った。弓美はその光景を自虐的に笑った。

「どうして私を殺そうとするの？ 意味が分からない！」弓美は千恵に向かって叫ぶ。

「消えて、なくなつてよ！」

二度目。

千恵は包丁を構えて飛びかかる。今度は邪魔はいない。

弓美が転ぶ。

千恵が馬乗りになる。

千恵は包丁を、組み伏せた弓美に振り下ろし……

「くそっ！ 見えない！」

北村の角度からは、千恵の背中が邪魔で、結末が見えない。

カメラのビューファインダーから目を外し、肉眼で確認しようとしたその時。

北村は、両腕を強い力で拘束された。

両隣を、いつの間にか黒い服の男達に塞がれているのに気づいた。

「なんだよ！ 離せっ！ 離せよっ！」

カメラに夢中で、気づかなかった！

……俺としたことが！

千恵が起き上がり、弓美も起き上がる。包丁は、砂利の地面に突き立てただけだ。

千恵も弓美も北村に向かって、西洋式の礼をした。スカートの裾を少し上げ、右足を左足の後ろにクロスして、ちよんと膝を曲げる。

「……芝居か！」

北村の顔が、真っ赤になる。

門の後ろから、全てを見ていた黒木が、拍手をしながら入ってきた。

「いい芝居だった。お代はいずれ、この男から払わせる」

「畜生！ 離せ！ なんだよ！ なんだよ！」

なんてことだ！ なんてことだ！ 全員に嵌められた！

暴れば暴れるほど、屈強な男達は力を強めて北村の腕を雁字搦めにする。武術の技なのだろう、時代劇でひつとらえられるように腕がねじられ、肘がねじられ、北村の身体が、釣られた魚が腹を見せるようにのたうちまわった。

千恵と弓美の芝居の計画は、成功をおさめた。

「私だって女だし、芝居のひとつやふたつ、出来るんだから」

息を切らせて、千恵は言った。

「台本にない彼女が来たとき、どうしようかと思ったけど」

「人生は、臨機応変にアドリブで」

千恵は微笑んだ。まだ体が震えていた。

「短い芝居だったけど、台本書けたじゃない。きつと次も書けるわよ」

私は弓美に塩を送っただけかも知れない。司郎の言う未来を、ひとつひとつ実現しようとしているだけかも知れない。でもそれは彼女の人生だ。私は、司郎との暮らしを、守る必要がある。司郎の「病気」の唯一の証拠、このハードディスクを壊せば、司郎の病気は誰にも

詮索されることはなくなる。

停まっていた黒いバンがやってきた。門の前に停まり、スライドドアが開く。暴れる北村には地獄の入口に見える。

「千恵！」

と北村は声を振り絞った。

「ひとつだけ聞かせてくれ！ どうして俺じゃなく風間だったんだ！ 俺とアイツの決定的な差って何だ！？ たとえば俺が先に君に出会っていたら、運命は変わっていたか？ 俺は金だってあるし、社会的成功はしてるし、人脈はあるし、俺の何が悪かったんだ！？ 昔から、それだけが分らなかった！」

北村を抱える黒服達が、黙れとでも言わんばかりに車の中に押し込もうとする。

千恵は答えた。

「そういう風に考えるとこころ」

「……ハア！？」

「あなたは動かす人。右から左に動かして、何かをするだけ。要領はいいかも知れないけど、あなた自身が手を下さない。司郎は、全部自分の手で作る。司郎とだったら、私はホームレスでも生きて行ける。きつと楽しいわ。私は桃を見つけて、両手一杯に持って帰ってきて、手伝うの。あなたは買ってくるだけ。外側だけで、中身がない」

「ははは。中身ね。……えらくストレートだね」

「……たとえ世界中を敵に回しても、私は司郎の味方になる。どんなに運命が変わっても、毎回私は風間司郎の妻になる」

「……中身は、どこで売ってるんだろうね」

北村の頭の良さは、最後に自虐的な笑いに使われた。

千恵はハードディスクを高く掲げた。

「壊れるものは、大事にしないとね」

手を放した。

地面に叩きつけて、壊すつもりだった。

だが、神様のいたずらか、下の砂利の角度の問題か、落された小さな箱は、跳ねて北村の方へ飛んだ。

北村が必死に手を伸ばした。届かず、かすめた指先がその箱を弾いた。

門の外へ。

反射的に千恵は追った。



車。

雨で出来た深い水たまりが、急ブレーキを効かなくさせた。

想像するより大きな音を、そこにいる誰もが聞いた。

千恵の身体は、大きな車に正面から衝突されて、宙に高く舞い上がった。

偶然が重なるとき、そこには意味がある。それは神の意志であり、キリスト教徒はそれをサインと呼ぶ。神の意志は、そのように偶然で示されると解釈する。偶然司郎と出会えたのも神の意志。「溺れる者よ。この藁でも使いなさい」という神の言葉。それからの楽しい日々も神の意志。

急ハンドルで横に滑った車のタイヤが、地面のハードディスクを踏み粉々にした。今まで、全ての証拠が無に帰した。

その景色を、千恵は逆さまに、スローモーションで見っていた。

ああ。ここか。

千恵は心の中で呟いた。神様、ここでしたか。私の運命は。

これまでの人生で、自分の判断やしたことが、全部正しかったという確信はない。そんな立派な人物でもないし、聖人君子でもないし。けれど、一番大事なことは一番大事にできたと考えた。それだけが自分という人間だと思った。人の価値は、どうであったかより、何をしたかで決まると千恵は思っている。ノーバディイズパーフェクト。赤兎馬は常にはあらず。臨機応変。だから、その時々で何をしたか、のことが千恵には重要だ。

これが走馬灯というやつかなあ。これまでの人生を、少し千恵は振り返る。引越しの日のこと。京都で出会ったこと。鳥取砂丘へ二人でいったこと。

人生というのは途中で必ず終わる。いつ死ぬか分からない、人間とは、いのちとはそのような生き物だ。全てを終えて、伏線を回収し終えて満足してエンディングを迎えるのは、物語の中だけだ。人生はそうでないから、人は物語に完璧なエンディングを求めるのだ。

だから、たったひとつだけ大事にするなら何かを、人は決めなければならない。自分の荷物をトランクひとつにまとめるとしたらその中身は何か。その他は最悪全部捨ててもいい、その代わり、たったひとつの大事なことだけは、何があっても手放さない。

私は司郎に、「役に立ったよ」って言われたい。同時に、「役に立たなくてもいいんだよ、

そばにいれば」とも言われたい。矛盾してるけど、そう言われたい。

司郎と私。

たったそれだけ。

たったそれだけを、私は守った。

第五章

司郎

坂の上で、千恵が手を振っていた。遠くにいるとき、大きく手を振る、これは千恵の癖だと司郎は思う。見つけて欲しくて、どんな遠くからでも大きく手を振る。そんなに振らなくても分るのに、千恵はいつも大きく手を振る。学生時代のときもそうだったし、一緒に住んでJ丘から仕事に行くときも、駅の改札で大きく手を振っていた。

司郎は坂の下で、この坂はJ丘の坂に似ているな、と思った。その坂の頂上は、両側から桜がせり出していて、緑のトンネルをつくっているように見える。春になればピンクのトンネルだ。遠くから見ると、坂の向こうは空しか見えない。桜が咲く時期に遠くから眺めた千恵は、あのピンクのトンネルの向こう側には桃源郷があるに違いない、と言っていた。

目の前に、老人が立っていた。光で顔はよく見えないが、会ったことのある親類のような感覚があった。じいさんでも親父でも、その兄弟でもない。俺？ だけど老人？ その老人と司郎の頭を、赤い糸のようなものがつないでいた。なんだコレ、と思った瞬間、その老人が右手をハサミのようにちよきん、とやった。糸は切れてなくなった。

坂の上を見ると、桜のトンネルのまん中で、千恵がまだ大きく手を振っている。老人はいつの間にか坂の上のいた。

千恵に手を振り返そうとして、司郎は目が覚めた。

「ん？」

そこは、見覚えのないビジネスホテルだった。

「ちー坊？」

周りに人の気配はなかった。また何か俺やらかしたか？ と、司郎はこわくなる。最近、記憶が飛びやすいことを自覚してはいる。たしか、撮影すっぽかして、大迷惑かけて、それから精神科いったんだっけ？ 北村と会わなかったっけ？ 記憶が曖昧だ。俺何してた？ 今いつ？ ここどこ？ 手帳……はどうせ何も書いてないからわからんか、俺のことだから。テーブルの上に、千恵の文字の走り書きのメモがあった。

「らんをたのむ」

蘭、のことだよな？

突然、司郎のケータイが鳴った。知らない番号からだった。

おそろおそろ出ると、警察だと言う。俺何かしたっけ？

「落ち着いて聞いて下さい。風間司郎さんのケータイですね。御本人さんですか？」

「あ、……はい」

「奥様が、事故に会われました」

「……はい？」

「メモとか出来ます？ 搬送先の病院は……」

とりあえず手を動かす。しかし意識と手は分離する一方だ。

何？ 何が、起こったの？

2

司郎は担当医に怒鳴りかかっていた。

「手術中に死亡するかも知れませんがどうということだよ！ なんでそんなハンコ押す同意書なんてあるんだよ！ お前らの身を守る為の書類だろコレ！」

そんなことはどうでもいい。ちー坊が死ぬなんて、なんの冗談だ。一ミリもそんなこと考えたくない。早く手術を。神様。神様。

3

手術は成功したと言われた。千恵の心臓は動いているし、人工呼吸器が、定期的に彼女の肺と脳に酸素を送り続けている。しばらく麻酔で寝かし続け、体力の回復を待つのだと説明を受けた。ICUという言葉聞いて、司郎は逃げ出したくなる。昔親友が車に跳ねられ、ICUで集中治療を受けたが、そのまま帰って来なかった。司郎にとって、ICUとは三字のアルファベットではなく、帰って来ない場所の意味である。

一週間、千恵は目を覚まさなかった。

司郎は毎日、病院のその部屋にいた。夜はソファで眠り、着替えに戻った。いつ千恵が目覚めても、その瞬間そばにいてやるつもりだった。医者は土日は休むのだと、その時知った。

日曜の深夜だった。司郎は目覚めない千恵に話しかけ続けた。こういうときすら耳は機能していて、目覚めた患者はベッドで交された会話を覚えている、と聞いたことがあったからだ。最初は日々のとりとめもない話をし、話がなくなると二人のこれまでの話をした。

初めて結ばれた夜の話も、初めてした。あの夜、深夜一人で目覚めた。裸で眠る二人の呼吸が、全く一致していることに気づいた。吸って、吐いて、吸って、吐いて。同じタイミングで、自分ときみの胸が、無意識に上がったたり下がったりしている。そのときにひとつだと思ったこと。千恵本人にも誰にも言ったことのない話だった。ずっと自分の中で大切にしていた秘密だ。そんな馬鹿なことを言って、って千恵が目を開けることを司郎は期待した。

千恵のまぶたには、テープが貼られている。まぶたが自然に開いて、涙が流れて眼球が乾燥してしまうから、閉じます、と看護婦が説明した。管を刺しているところが痒くて無意識に暴れるから、とマジックテープの手錠をかけられている。

人工呼吸器は、電気とモーターの力で、ずっと同じ間隔でふいごを動かしている。家に帰っても幻聴が聞こえるほど司郎はこの音を聞いた。このリズムと同じ呼吸をやろうとしたが、出来なかった。

「もういい加減目を覚まして、うちへ帰ろうよちー坊。ここはそろそろ目を覚まして、『俺はどれくらい寝ていた？』ってあのドラマの真似をするところだろ？ 『あちー坊が目を覚めました！ 馬鹿野郎心配かけやがって！』『ごめんなさい私はダメな妻ですうう』『そんなことないさ』『ああしーちゃん愛してるううう』『ぶちゅーすぱんすぱんすぱん』『ああ看護婦さんきちゃうううう』って場面だろうがよ」

千恵は答えず、人工呼吸器の音だけが響いていた。ずっと司郎は千恵の手を握っていた。窓を叩く雨の音がした。

「やだなあ……雨って気圧が変わるんだよね……」

雨の日に葬式が増える。それは悲しみの雨という美的理由ではない。肉体的な死が、気圧の変化を乗り越えられないときに起こり易いからだ。どうでもいい豆知識を今千恵に言うとして、そうなりそうで恐くて司郎は口をつぐんだ。

司郎の隣の丸椅子に、千恵が座った。

千恵は座って、自分の肉体が様々なチューブでつながれているのを見た。

人工呼吸器につながれ、まぶたがテープで閉じられているのを見た。

司郎に、おはなしは全部聞こえていたよって言いたかった。

司郎の視線の先に、雨が降っているのも見た。真夜中なのも分った。

機器の警報が鳴った。

司郎はこの一週間見たこともない心臓の波形を見た。

「看護婦さん呼んでくる！ ちょっと待ってて！」と司郎が言い、千恵の手を固く握るところも千恵は見た。残念ながらその感触は分らなかった。

司郎は走って出ていった。

千恵は、千恵の体を、自分の肉体の外から眺めていた。

雨の音が大きくなった。

4

朝、司郎はいつものように布団の中で目を覚ました。白くて明るい光が司郎を包む。七時一分。時計を見なくても分る。あれからずっとこの時間に目が覚める。

「おはようちー坊」

いつものように、司郎は千恵の頬に手をのぼそうとする。

少し前までは、目を開けたばかりの千恵がいた。

今は、そこに無宗教の祭壇と、彼女の写真と骨壺がいる。

いつものように窓をあけ、いつものように空気を入れ替えた。窓からは多摩川のきらきら光る水面が見える。風が入った。いつもと同じ朝だった。司郎は部屋の隅に座りこみ、いつものように身動きひとつ出来なかった。

踏み切りや電車待ちのホームで、司郎はうっかりすると電車に吸い込まれそうになった。

千恵がそういう気持ちにたまになる、って言ったのを思い出す。自殺したら生まれ変われないから、またしーちゃんと会う為に自殺はしない、って千恵は言っていた。そういうときは「光の方へ」という呪文をとなえるのだと教えてくれた。光の方へ。迷ったら、光の方へ。

蘭は窓の外へ向かってのびている。窓の外の光へ向かってのびている。光の方へ。彼にとつての光はどこなのか、それは誰にも分らない。

5

D 駅までの緑の街路樹の長い道を、司郎は歩いてきた。

「ずっと君としゃべってたから、一人になっても何していいか分んなくてさ」

通行人に気づき、司郎は独り言をやめた。通りすぎると、また「千恵」に向かって話しかけた。

「一人で駅から帰るとき、寂しいから駅前で待ってたって意味が分かったよ。たしかにこの道、一人で歩くには長くてつまらないね」

この視線の先には、千恵がいつも御機嫌で歩いていた。今は大きくて太いいちよう並木と、大きな屋敷があるだけだった。

『京都の学生時代からの恋人房と、Dに住むCMディレクターが、J丘にランチに出かける（しかも仕事場は銀座）』って文字面がさ、文字だけで見るとどんだけ嘘臭いステキな絵、って言ってたよね。実体はこんなにちんちくりんで小汚い小太りなのにな」

司郎は笑った。誰も笑いを返さなかった。

「アレ？ いつもどっちが右歩いてどっちが左歩くとかあったっけ？」

右を向いて話していた司郎が、左へ向いて話しはじめた。

司郎の右で、ずっと話を聞いていた千恵の魂は、あわてて司郎の左へ走った。

「やっぱり右かな」

その司郎の言葉で、千恵の魂はまた司郎の右に走って戻った。

「あ、でも車道側は危険だからお前は左側に来なさい。あ、でも車に轢かれて死んじゃわなのかな」

千恵の魂は、司郎の言葉に従って左側を歩いた。

司郎はとりとめもない話を「千恵」にし続けた。千恵の魂は、その話に茶々を入れられないことが不満だった。

「あ。そうだ。四十九日までは、魂がまだそのへんにいるんだってね。鳥取砂丘へ行こうよ。」

京都にも行こう。忙しくていけなかった、新婚旅行へ行こうよ」

千恵の魂は、疑問に思った。あの鳥取砂丘を司郎は覚えていない様子だ。ショックで記憶が混乱している？ そうは見えない。観察する限り、司郎は発病前に戻っている。あの時の司郎の記憶は、未来にしかないのだろうか。

その勘は、当たっていた。



鳥取砂丘で、司郎と千恵の遺影は夕日を見た。何度、司郎と千恵は美しい夕日を一緒に眺めただろう。京都の鴨川デルタで、多摩川で、花屋のあるデパートの屋上で。千恵の魂は隣にずっと座って、亜麻色の髪を風になびかせていた。

京都の鴨川沿いに、籠の中に遺影を入れて、司郎が号泣しながら自転車で爆走したときも、千恵の魂は後ろの席に乗っていた。

彼女の元下宿の前に司郎が佇んでいるときも、千恵の魂はそばにいた。

司郎は道端の小石を拾い、二階の窓を狙った。かつて千恵が住み、司郎が通ったその部屋には、今は住人がいないようだった。女性専用の下宿で、男子禁制だったけど、こっそり何度も何度も泊まった部屋。大学からわずか一分の距離で、千恵がすぐ司郎に会える為に借りた部屋。司郎はその作戦にまんまとはまり、研究室から即千恵のベッドに泊まりに来た。窓には今やカーテンがなく、大家の置き忘れか、窓ふき用の洗剤が窓際に放置されているのが曇りガラス越しに見えた。

司郎は「千恵」に向かって話し続ける。

「知ってる？ ここから、窓の向こうの君が見えたんだ。テレビを見てる位置にさ。俺が石を投げるだろ？ 君は窓をあけに来る。その影を見てるだけで、俺は嬉しかったんだよ」

「そういうの、先に言ってよね」

千恵の魂は、不平を司郎に言ってみる。聞こえやしないだろうけど。

「いつも私は、司郎が私を見失わないか心配だったんだよ」

千恵は、好きな人が自分を探しているのを見るのが好きだ。

「司郎も私を探してたんじゃない。そういうの、生きてる時に言ってよね」

司郎の胸倉をつかむことも、ほっぺをつねることも、額をこすりつけて「煙が出るわ」と司郎が言うほどしゅりしゅりすることも出来ない。膝枕もしてあげられない。

司郎はその小石を窓に向かって投げた。小石は窓に跳ねた。こっちまで跳ね返ってきて、石が当たると思っただけで反射的に千恵の魂はしゃがんだ。その後ろにあった看板に、小石が当たった。

電柱にくくりつけられた段ボール。そこに貼られたのは芝居の告知だった。「広川弓美 独立後初公演 一人芝居」と控えめに印刷されていた。

「アレ？ 広川さん、まだ芝居やってたんだ！ ちー坊、お前、今ここにいるね？ こんな『引く』力、俺一人じゃムリだよ。お前、ここにいるね？ 俺がずっと一人でしゃべってるんじゃないんだね！？」

ここにいる、と千恵は言いたかった。大声で言いたかった。

司郎はそこにいると信じる「千恵」に向かって、話をつづけた。

「あのさ、こないだ、お前の夢を見たんだよ。部屋は全然あのままで、俺、台所でちー坊が生きてる！ ってスゲー驚くの。で、あのペアのマグカップの残り一個、割っちゃうの。アレどこにしまったんだっけかなあ。……でね、俺嬉しくて、夢の中でも君に会えた、ってさ、はしゃいで、なんとあの踊り場で踊ったんだよ！ 引越してから、結局一度も踊ったことなかったじゃんあの踊り場。嬉しいことあったら二人で踊ろうって約束したのにさ」

そうして司郎は、あのとときの踊りを踊ってみせた。

ああ。そうだったんだ。千恵には、今、全てが分かった。

分かった途端、涙が止まらなかった。

「こんな感じでき、こう……こう……」

司郎は下手糞な社交ダンスを披露した。月夜のダンスと同じだった。

下手糞紳士に、千恵は深々と淑女の礼をして、紳士の腕の中に抱かれた。彼の肉体には決して触れられない。けれど、魂に触れられたと思った。

司郎は未来にいつてしまった、と思っていた。

逆だったのだ。

未来の司郎が、過去に来ていたのだ。夢の中で。

どうして？

「私に、会う為？」

千恵は白昼夢を見た。

二人の部屋で、千恵は司郎の帰りを座って待っていた。机の上にはカエルの胴体が置かれ、隣にウサギが、遙か向うの崖っぷちにカエルの頭がいる。

いつの間にか司郎が帰ってきていて、千恵の向かいに座っていた。司郎は笑って、カエルの頭を胴体に戻し、ウサギの隣に置く。カエルとウサギが並んだ、最初の状態に戻した。

司郎は沢山のカエル人形を取り出し、ウサギの「未来」に沢山のカエル達を置いた。沢山のカエルの頭を外し、ウサギの周りに置いた。「現在」のカエルの頭をぽきゅつと外し、ウサギの「過去」に置いた。

「どういうこと？」千恵は聞いた。

司郎は微笑みつづけた。

司郎は、「未来」の頭を、「現在」の体に乗せた。次々に、未来の頭を現在の体に乗せた。ウサギの隣には、未来からの頭が次々に来る格好になった。

私の死後、司郎は私の生きている時に来た。次の日に来た司郎は、その先の未来から来ていた司郎だ。「現在」の司郎は、トコロテン式に過去へと飛ばされた。三日過去へ。四日過去へ。五日過去へ。

それを時系列順に私は体験しただけだ。三日先から来た司郎、四日先から来た司郎。私の死後から来た司郎。四十九日あたりから来た司郎。弓美さんの芝居を見たあとから来た司郎。その後から来た司郎。八十過ぎてからも来た司郎。

ウサギの周りは、未来からの訪問者で一杯になった。

「君の所に、何度でもカエル」

司郎は微笑んだ。

なんだ。司郎は私に会いに来てたんじゃん。私を放つてどこか遠くへ行つたんじゃなかったじゃん。ずっと遠くの方から、毎日私を探しに来たんじゃん。

司郎と千恵は立ちあがり、両手を広げた。固く抱きあった。固く固く、抱きあった。自分の体が、相手の体にめりこむぐらい抱きあった。

京都の下宿の前で、司郎は、千恵と踊るつもりで踊った。

千恵も、司郎と踊るつもりで踊った。

景色がぐるぐる回る。

これまでのこともぐるぐる回る。

「じゃあ、今度は、私が予言者になる番だよ？ このあと、弓美さんの芝居、見に行くよ。目が覚めたら、北村さんと私がいてびっくりする。紅茶はちゃんと飲んでね。蘭の話も覚え

てね。そのあと色々な事を聞いて、ランチアンド映画のリベンジに行くよ？ 蘭を拾う許可を出してくれて、二人で「ビバ風呂！」やって。籐のダンスに入っているものは、何？ 次の夢は弓美さんが部屋に来る。遊園地行こうって言い出しておおはしゃぎ。あ、逆行催眠はごめんなさい。スペシャル按摩してあげるから許して。それでね、それでね。……二人でほんとの鳥取砂丘に行くの。誰もいないの。本当の二人きりになるの。久しぶりに夜をちゃんと過ごして、朝になってもイチャイチャして。サルの話、覚えてるよね？ あとしばらく会えないけど、八十こえた頃に、また夢の中で会えるよ？ 気が済むまで膝枕してあげるからね」

流れている音楽なんてない。そんなもの二人には必要ない。

二人の呼吸が、ひとつになって音楽になる。

君のところにカエル。

司郎は私のところに、毎日毎日ちゃんと帰ってきてたんだ。

「もう。帰ってくるときは、今度から先に言ってよね」

千恵はくしゃくしゃに涙を流して、司郎の腕の中で拗ねた。

「うん。わかった」

千恵の言葉が聞こえたかのように司郎が微笑んだ。司郎には千恵が見えていたのかも知れない。神様が、一度だけ会話を許してくれたのだと千恵は思った。

二人は踊り続けた。

ケンカなんてするんじゃないかった。余計なことしてる暇なんてなかったのに。その時間が勿体なかったよ。

私は愛されていた。最初からずっと愛されていた。それが私の、運命だったんだ。

また二人は会える。幸せな、深い眠りの中で。

あれから。

司郎は、黙々と部屋に残された蘭の世話をしていた。弓美の芝居を何度か見た。春も近い

冬、弓美が東京に寄るといので司郎は自宅に誘った。胡蝶蘭の花が咲いたので見せたいのだ。駅まで迎えに行く、という司郎を、道は分ってるからと弓美は返した。不思議に思う司郎に、あのときのことをどうやって話そうかと、弓美は考えながらD駅からの街路樹を歩いていた。東京で行われた千恵の葬儀の知らせは来なかった。行く勇氣もなかった。あれから、話せるだけの時は経った。千恵が命をかけて司郎を守ったことを、私から伝えるべきだと思う。

冬枯れたいちよう並木も味がある。千恵は、秋の見事な黄色い並木を自慢していた。春はすぐそこで、五月になればふたたび新緑でこの並木は埋めつくされる。途中の大きな屋敷に、大きな桜が二本いる。千恵はこの桜が好きだと言ったことを弓美は思い出した。右京と左京という、京都にちなんだ名をひそかにつけているのだそうだ。蕾の気配はある。その桜もきつと見たい。

司郎は割れたマグカップを鉢代わりにした胡蝶蘭に、水吹きをしていた。根が空中にたくさん伸びて、いずれ植え替えをしなければならぬほど株が大きくなっていた。チャイムが鳴り、弓美が入ってきた。

「お邪魔……します」

前に来たときも同じ言葉を言ったと弓美は思ったが、司郎が知らないことを態度で察した。「あのころ」の司郎の記憶が全くないことを、何度か話した中で弓美は確信した。記憶喪失の人が回復すると、喪失していた時期の記憶はなくなる。そんな仕組みに似ているのかも知れないと思った。

他人はこの線からこつちに入らないで、と弓美はあのとときも今も千恵に言われたような気になってしまい緊張する。それほどこの部屋は、濃密に二人の匂いがする。

「これが最初の蘭」

と司郎は弓美に、マグカップの蘭を見せた。大ぶりのピンクの花が四つ咲いていた。個性的で、鮮烈でやさしくて繊細な、千恵のような花だと思った。

「俺さ。ずっと不思議だったんだよ。何で胡蝶蘭なのかなって。植物好きが最後にたどり着くイメージがあるけど、ハイビスカスとか最初は普通の花だったのに。鑑葉植物や多肉に凝ったこともあるけど、なんでよりによってウチは胡蝶蘭なんだろうって。蘭は、昔イギリスで珍重されたじゃない？ イギリス文学好きのあいつが高貴な花としてのイメージがあったのかな、とか、貧乏性だから高級感で部屋を埋めたかったのかな、とか。蘭だって、もっと育てやすいデンドロやシンビジウムがあるのに、この辺に捨てられてたって以上に、あいつ

は胡蝶蘭にこだわった。夢中になったドラマの主役が温室で花屋やっていた憧れかな、とか、仮説も立てただけどき。……でも、違ったんだ。答えは花言葉だったんだ。あいつ絶対それを知ってた。だから胡蝶蘭なんだと思うよ。それが一番しっくり来て、それを知ってからこの花園を見て号泣したよ」

弓美は言葉を失った。

ピンクの花。

ピンクの花。

ピンクの花。

壁の全面の窓を、ピンクの花がいくつもいくつも埋め尽くしていた。床の鉢植えにもピンクの花が散りばめられ、十二畳からは胡蝶蘭のピンクが溢れ出そうだった。

大きな窓の、六畳ふた間。東南側の殆どをを大きな窓が占めるのが特徴的な、日当たりに千恵がこだわって決めた部屋。

その窓全てを占領し、胡蝶蘭たちが吊るされて、籠と緑と籠と緑で緑一面に埋めた部屋。捨てられてそのまま消える運命だったのちを、千恵がひとつひとつ救ってきて、根気良く世話を続け、司郎がそれを継いだ部屋。

そのひとつひとつに、ひとつひとつに、ピンクの花が咲いていた。

胡蝶蘭の花は、一カ月は咲き続けるらしい。蕾もある。どれだけの時間、この部屋はピンクの花で埋まり続けるのか、それは司郎にも分らなかつた。

もうすぐ春だ。暖かい太陽の光が、水吹きされた花をきらきらと照らす。花から元気をもたらえる部屋にしたい、と最初にこのなにもない部屋に来たとき千恵は言った。この美しく、大ぶりで、育てるにはあまりに気難しい、千年咲く気高い花は、千恵そのものだった。

「あなたを愛します」、それが胡蝶蘭の花言葉なんだ、と司郎は静かに言った。

了